

大正四年三月發行

校友會雜誌

第拾參號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第拾參號目次

口繪

○展覽會出品優等書畫 其一 其二

會誌

○長距離競走○部長改選○委員改選○劍道部記事○柔道記事○選書展覽會記事○書道部展覽會記事○漕艇部記事○辯論部記事○會員計報○通信一束○會費決算報告○基本金決算報告

藝苑

○夏期休業中他人を喜ばせたる我行爲 熊谷真夫 武田弦介 下井干城 富田 穰
○第二學年選文 中村 博
○第三學年選文 吉田一虎 増野兼寛 仁尾重人

目次

表面題字は松陰先生手
寫稿本中より選びて擴
大撮影せるものなり

○第四學年選文 杉 義夫 中村貞夫 松浦梁作

○第五學年選文 中山節郎 片岡勝資 村岡淺一

藤井四郎 渡邊正規

Our Excursion. By Motojiro Nagamine, 3: B.

Leaves From Summer Vacation Diaries,

By Fourth year students.

Love of Native Place. By H. Yokoyama, 5: B.

A Page From My Diary. By B. Nishibayashi, 5: B.

The Most Pleasant Day in Our Scientific Excursion.

1. By S. Kodama, 5: A.

2. By K. Tagita, 5: B.

3. By H. Tanaka, 5: B.

A Little Riding Trip. By S. Shibata, 5: A.

Yoshida Shoin's Seven Rules for Warriors Translated

By S. Shono.

(二共)

同



第四學年 松村正一



第三學年 長嶺元治郎



第三學年 進藤常雄



第五學年 阿部綱音



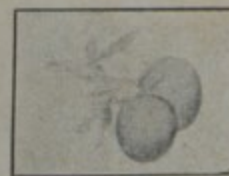
第五學年 西林鴻介



第四學年 清瀬勲一



第二學年 田中政太



第一學年 上川忠夫

山口縣立 中學校 校友會雜誌 第十叁號

會

誌

(自大正三年一月 至大正三年十二月)

長距離競争

二月五日、長距離競争準備として、玉木校醫體驅に懸念ある者の體格検査を行はる。七日午前七時半集合、八時出發、大井に向ふ。從來は、大井村高倉荒神社下を決勝點としたりしを、本年は之を改めて、同地を出發點とし、校門を決勝點と定めらる。發着兩點距離二里二十丁は從來と異ることなり。午後零時二十分より、各隊七分を隔て、出發、歸途に就けり。此日天氣快晴、稍溫暖なりしかば、競走には不適なる方なりしが、而も一人の落後者をも出すことなく、各隊とも整々として校門に達せしは頗る壯快なりき。各隊の成績左の如し。

成績	隊名	出發時刻	到着時刻	經過時間
第一	第四中隊第二小隊	十二分四十二	一、三、八、三	〇、一、四、〇

第二	第三中隊第一小隊	一三、四	一、五、三、七	一、一、〇、三
第三	第三中隊第三小隊	一、二	一、六、一、七	一、四、一、七
第四	第四中隊第一小隊	一、九	一、三、三、三	一、四、三、三
第五	第一中隊第三小隊	一、二〇	一、五、五、五	一、四、三、五
第六	第二中隊第三小隊	一、二一、七	一、五、五、三	一、四、三、一
第七	第四中隊第三小隊	一、二二、五	一、五、五、三	一、四、二、二
第八	第二中隊第一小隊	一、二三	一、五、五、六	一、四、二、六
第九	第一中隊第二小隊	一、二四、〇	一、五、五、五	一、四、一、五
第十	第二中隊第二小隊	一、二六	一、五、六、六	一、四、〇、六
第十一	第一中隊第一小隊	一、二七	一、五、六、三	一、四、〇、六
第十二	第三中隊第二小隊	一、二八、八	一、五、六、三	一、三、五、一

右各隊の校門に達せし時、隊伍の最も好く整頓せしを第一中隊第一小隊とし、第一中隊第三小隊之に亞ぎ、第三中隊第一小隊又之に亞ぎたり。

以上各小隊の成績を平均して、各中隊の優劣を左の如く定めらる。

部長改選

會誌

四月八日、本會各部部長の改選行はれ、左の如く決定せり。

剣道部長	長東教諭	柔道部長	中村教諭
辯論部長	土江教諭	書道部長	安藤教諭
書道部長	田總教諭	庭球部長	田中教諭
野球部長	田邊教諭	漕艇部長	山本教諭
海泳部長	相島教師	雜誌部長	藤井教諭
褒賞掛	藤原教諭	岡本教諭	

委員改選

四月二十九日、本會各部委員の選舉を行ふ、結果左の如し。

柔道部	中山 節郎	武林 治郎	西林 鴻介	小河 千里
	來島 眞介	吉田 操	松本 壽利	大野 寛
	和田 義忠	今田 泰	花田 好定	宮田 晋二
	三村 喜治	福川 秀夫		
剣道部	加藤萬壽夫	中村 一郎	横山 繁介	片岡 勝資
	飯田 剛一	松浦 時行	宮崎 恒介	坪井 六郎
	宮田 稔	津田 實	坪井 七郎	松浦 孝義
	森重 千夫	磯松 嶺造		
	兒玉 才三	馬庭 長一	岩竹 了	松原 淨二
辯論部	吉田 操	清瀬 勘一	宮津 精一	杉山 貳顯
	瀧口 純	志賀 義雄		

剣道部記事

六月二十七日、第一學期剣道大會を舉行す。番組並に勝負は、記事の都合により之を略す。

第一學期も末に近づくと、山口中學校道場に於て舉行さるべき縣下縣立諸學校武道大會に参加すべき柔剣道選手各八名宛を指定さる。その人名左の如し。

柔道部	中山 節郎	山中 尙夫	山根 貞行
	(以上五年)	吉田 操	三好 一郎
	來島 眞介	吉田 稔	坂田 義亮
	(以上四年)		
剣道部	中村 一郎	加藤萬壽夫	黒瀬 貞盈
	伊藤 好春	横山 繁介	(以上五年)
	松浦 時行	飯田 剛一	兼田 幸作
	(以上四年)		

柔道部にては、西林鴻介君、武林二朗君、剣道部にては、片岡勝資君、勝野秀信君、孰れも、病氣若くは事故の爲参加するを得ざりしは遺憾なりき。各熱心に稽古を勵み、七月二十日となれば、學期試験終了と同時に先生四人を加へて、同勢二十人、校長及び諸先生

書道部	三木 定治	井本 明治	齋藤 八郎	村岡 淺一
	渡邊 壽	松原 淨二	林 只一	河崎 隆輔
	兒玉 義清	藤井 健三	金子 忠恵	山川 恒久
	花田 好定	熊谷 眞夫	吉浦 文次	磯村 嶺造
書道部	阿部 頼晋	田總 時俊	渡邊 正規	黒瀬 貞盈
	片岡 勝資	中村 芳政	松村 正一	中村 貞夫
	河崎 隆輔	櫻井 義彦	進藤 常雄	松本 正人
	河村 宜介	友森 茂人	平川 太助	鷺海 一
庭球部	藤原 敏夫	松村 六郎		
	村岡 語郎	綿貫 秀雄	村岡 淺一	鈴木 勉
	坂田 義亮	上利 祥亮	宮川 保次	津森 篤介
	山根 保次	原田 信次	平川 太助	前田 吉久
野球部	錦織 勉三	穴戸 昇		
	武林 治郎	阿部 頼晋	西林 鴻介	上田 保則
	田中 忠介	益田 兼施		
漕艇部	河野匡四郎	勝野 秀信	村木 好郎	阿武 良雄
	松浦 時行	坂田 義亮	三好 市郎	末武 清
	須子 英一	桑原 芳樹	和田 義忠	若松 小一
雜誌部	梅田 秀起	山田 孝介	森重 千夫	寺田 重郎
	柴田 省三	三木 定治	下井 干城	松原 淨二
	横山 繁介	村岡 淺一	石井 精一	吉田 操
	松浦 榮作	河崎 隆輔	進藤 常雄	倉重 義雄
	金子 重恵	横山 良晴	田中 政太	櫻井 敬三
	森重 千夫	倉田 義弘		

校友諸君の熱誠なる歡呼の聲に送られ、皆々必勝を期し、四臺の馬車に分乗し、山口指して出發す。此日快晴、炎熱灼くが如く、馬頗る惱む。乃ち坂路の上りは下車す。八丁越の險は、萬歳を連呼して下り、八時頃、街燈美しき中を走りて、上野小路中川旅館に著く。

二十一日、午前中は、兩部選手、高商道場へ稽古に行き、我校出身諸氏に迎へられ、同校及び他校選手諸君と稽古す。國學院の選手某君、我が山根君と稽古中、君の背負投を受け、過りて、腕を折りしは氣の毒なりき。

二十二日、午前は柔道試合にして、山中教師井上舜一、佐藤虎介二氏の型に始まる。本校成績左の如し。

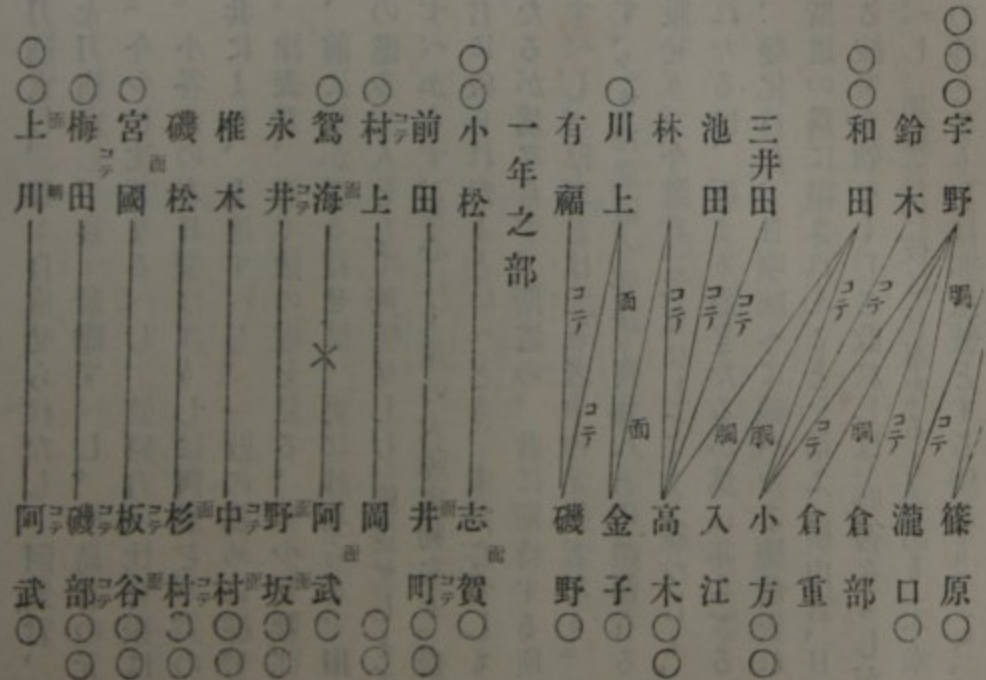
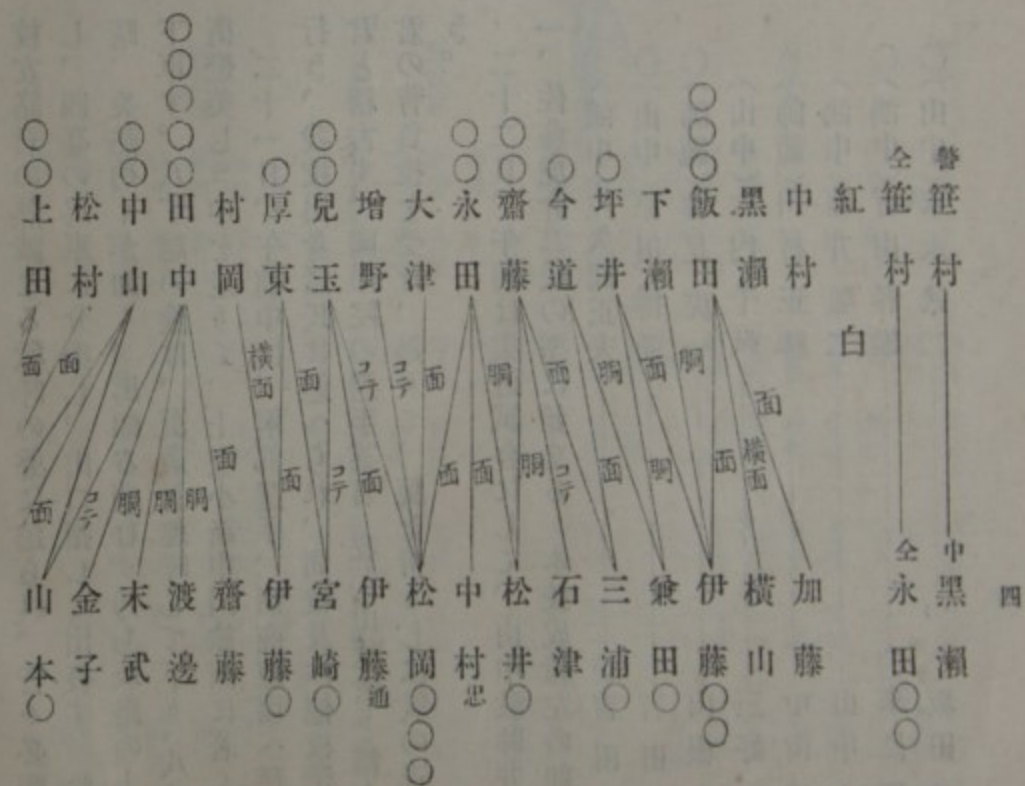
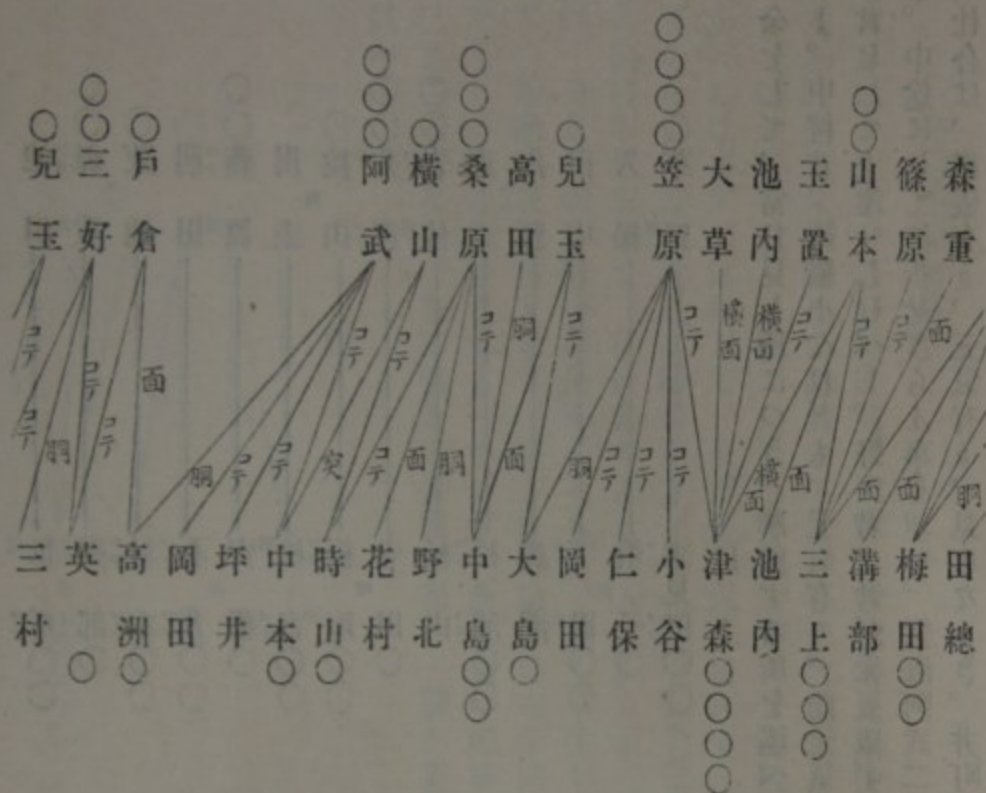
○(鴻中)佐久間正夫	○吉田 稔
○(山中)原田博愛	○吉田 操
○(師範)藤尾虎一	○山根 貞義
○(山中)大内千秋	○三好 一郎
○(師範)川村正勝	○山中 節郎
○(鴻中)藤井順二	○山中 尙夫
○(鴻中)青山春雄	○來島 眞介
○(山中)末永武二	○坂田 義亮

午後は剣道試合にして、山中教師林郷一氏と我校教師末永柳一氏との型に始る。本校成績左の如し。

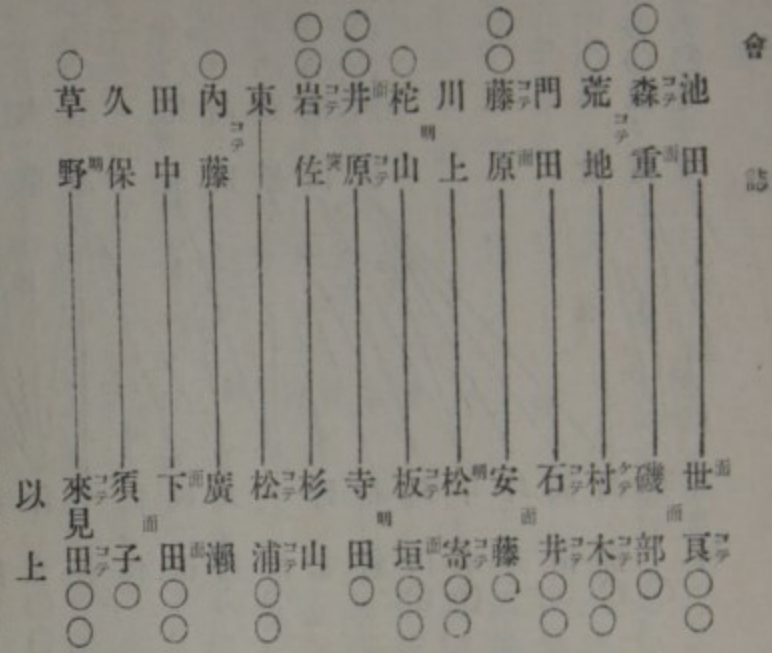
- (鴻中)高松 潔
- (山中)有富 乙熊
- (山中)高林 良雄
- (師範)重岡 隆吉
- (山中)中島 茂
- (徳中)中村 誠也
- (師範)栗屋 佐藏
- (國學)木下 裕
- 兼田 幸作
- 松浦 時行
- 飯田 剛一
- 黒瀬 貞盈
- 伊藤 好春
- 加藤 萬壽夫
- 横山 繁介
- 中村 一郎

試合終了後、同校食堂にて、茶菓の饗應を受け、歸れば、在高商先輩諸兄、ナイダ菓子等を多分に贈られ、大に我等が勞を慰めらる。此稿を了るに際し、篤く、高商先輩諸兄及び同校選手諸君の懇情を謝し、併せてその健勝を祝す。

十月十六日、剣道秋季大会を開かれ、末永先生の審判の下に、壯快なる七十組に近き仕合は行はれぬ。今や、我部は順風に帆をあげて進む舟の如く、進歩の見るべきあり。部員諸君の益熱心に練習せられん事を望む。當日の勝負次の如し。



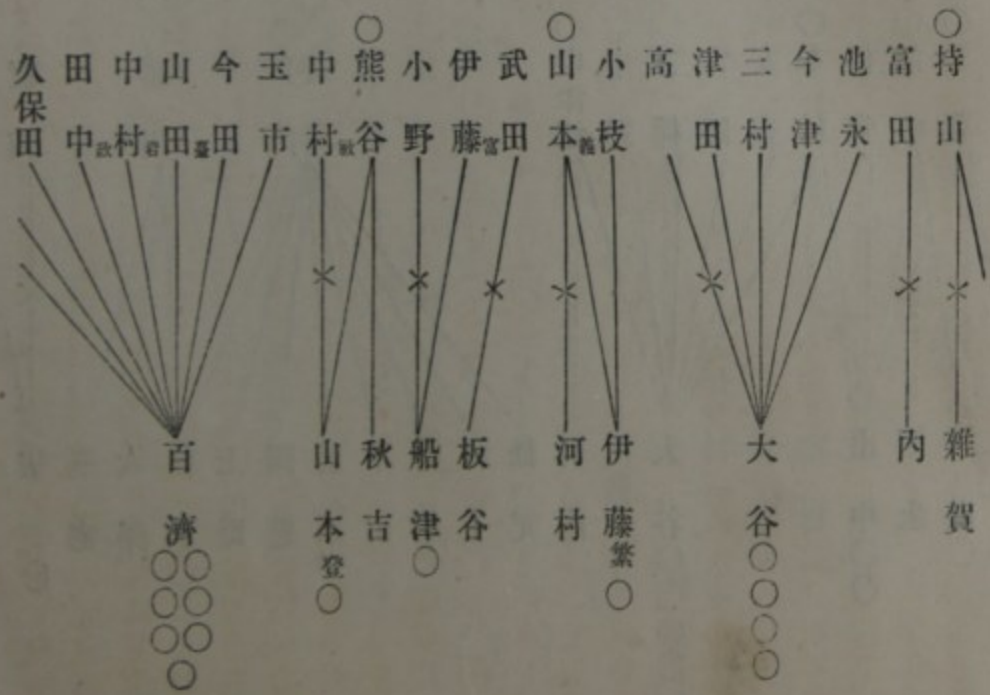
余をして、當日見し所につき、聊感ずる所を述べしめよ。中村君、體軀小なれども、元氣有り。此元氣必ず君をして上達せしむべし。野坂君、君が元氣感ずべし。中途にして挫折せざらん事を望む。鴛海阿武二君の仕合は、禮儀有り、元氣有り、見事なりき。井町君

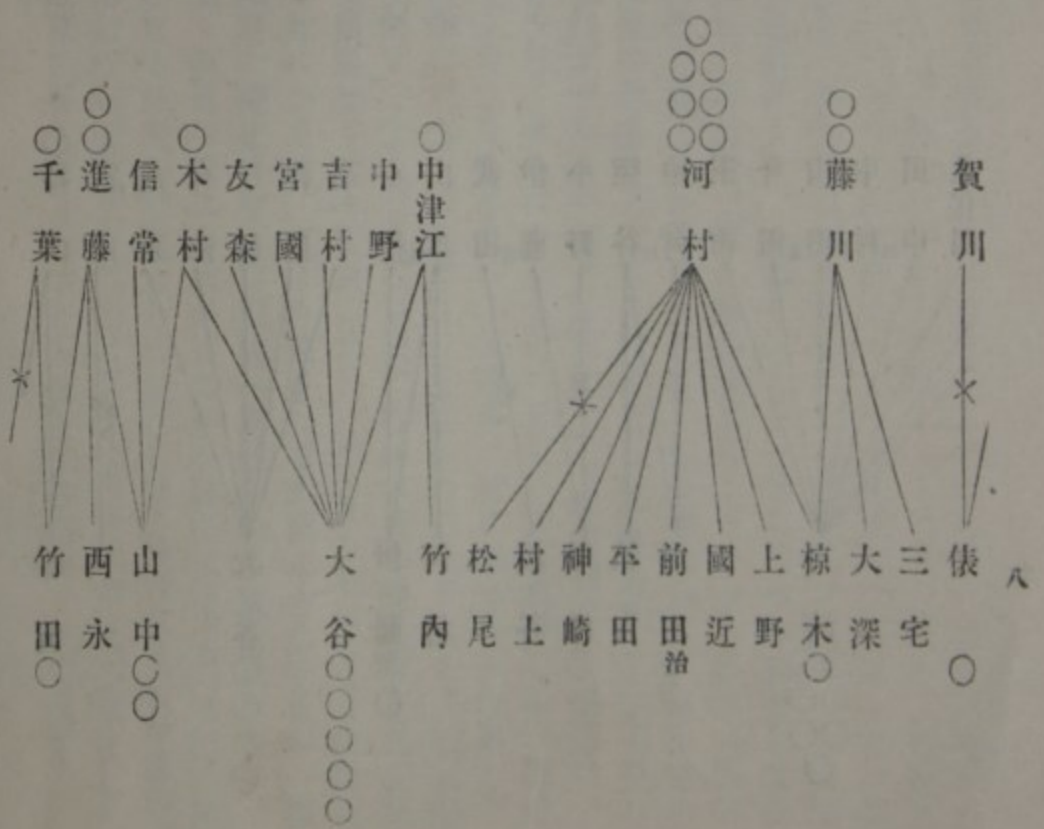
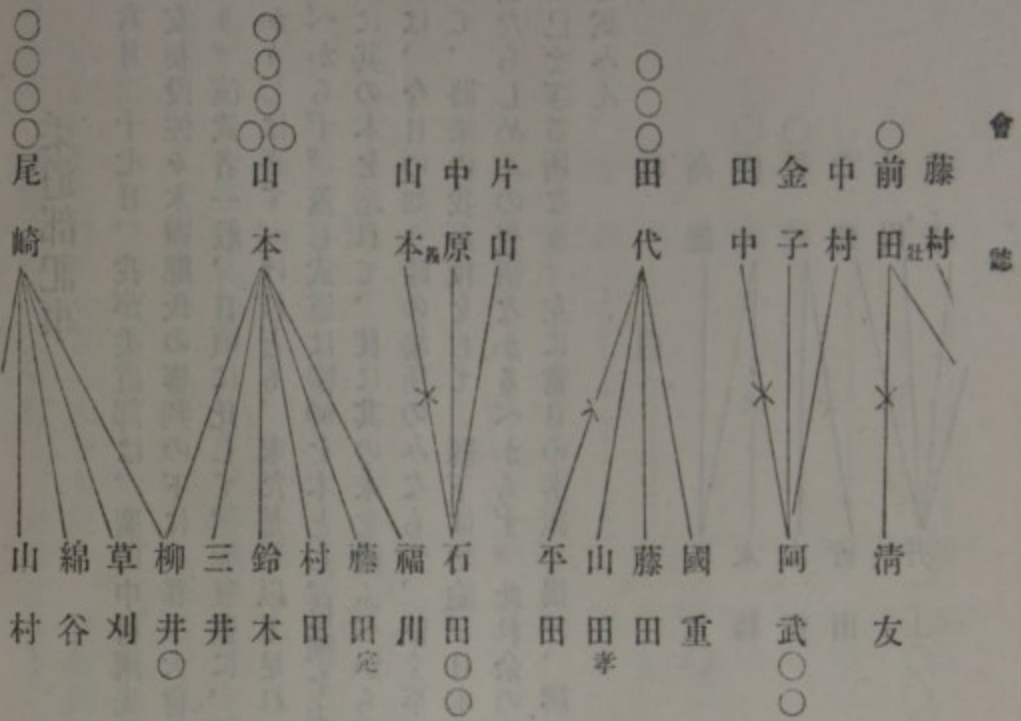
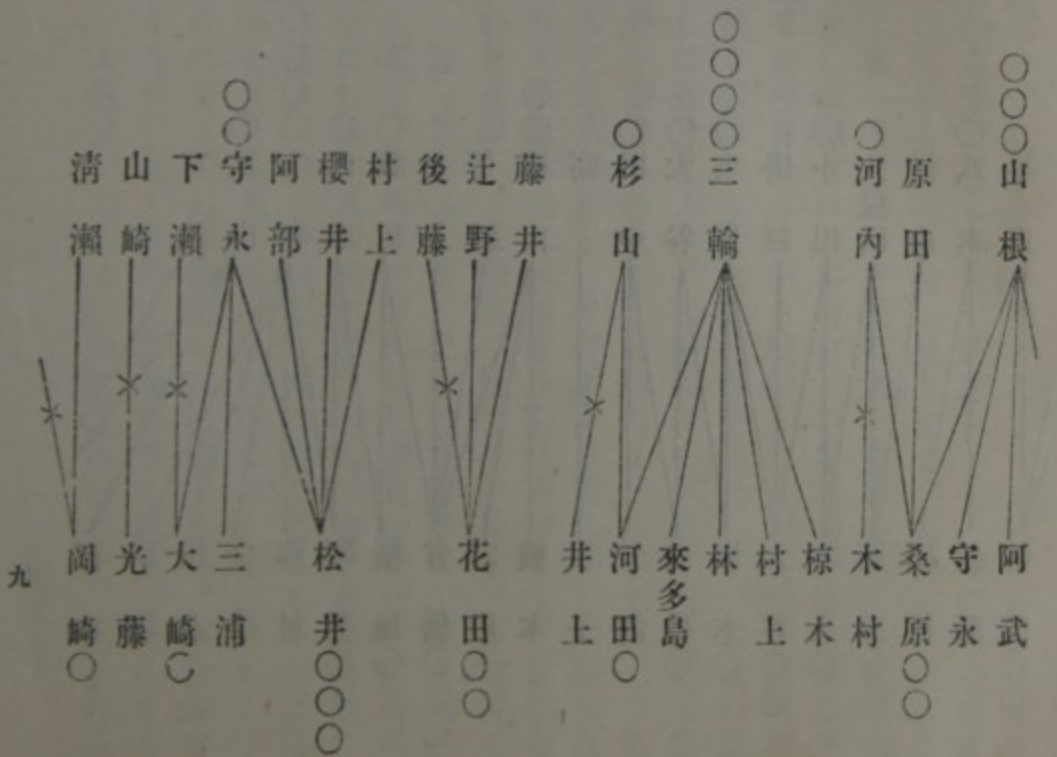
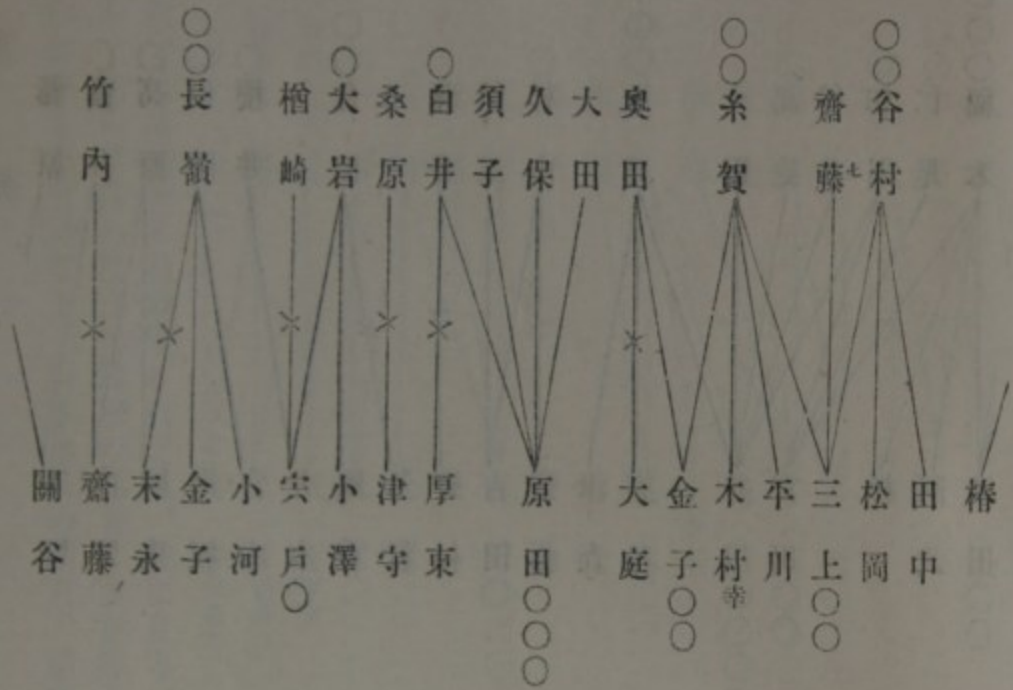


の太刀筋宜し、益々自重せられたし。阿武君、精悍にして太刀筋宜し、益々奮勵すべし。中島君の元氣嘉すべし。今少し沈著なるべし。笠原君の仕合振は見事なりき。小谷君の本日振はざりしは何故ぞ。君の太刀筋元氣共によし、上達すべし。一敗の爲めに練習を怠る勿れ。津森君、能く敵の虚を見る。今少し腰部に力を入れ、前に傾かざる様せば、更に妙ならん。田中君の長足の進歩、人をして驚嘆せしむ。優退せしめて、慢心を生ずべからず、慢心は上達の大障害物なり。齋藤君、田中君に破られたりといへども、未だ必ずしも、技の劣りたるが爲ならず。斯道の、君に期待する所多し、奮勵すべし。厚東君は元氣者中の元氣者なり。元氣敵を壓す、之また武道の要訣。齋藤八君の禮節有る試合振り感服せり。今道君、元氣にしてよく戦ひしも、兼田君に敗れたるは、近より過ぎたるが爲に非らざるか。飯田君、變化自在、日頃練へに練へたる腕前表れたり。益々斯道の爲に盡されんことを請ふ。横山君、日頃の熱心なる練習も効なくして敗れしは、時否なりしが爲か、惜むべし。加藤君の技は見事なるものあり。不幸にして敗軍の將となりしは亦遺憾とする所なり。(S, Y,)

柔道部記事

六月二十七日、我が柔道部は、廣田中村兩先生併に會友初段佐々木四郎氏の審判の下に、春季大會を舉行せり。演武者一般、日頃に比して、元氣盛に、禮儀正しかりしは嘉すべけれども、未だ是を以て足れりとなすべからず。蓋し武道は精神を本とし、技術を末とす。故に其の本を忘れて、徒に其の末を勉むべからず。諸君は、今日の如き晴の場所のみならず、能く平生を慎みて、將來の我が校をして、縣下は勿論、日本帝國に覇たらしめんの覺悟なかるべからず。此れ余の願望して已まざる所なり。左に當日の番組を掲げ、聊か妄評を試みん。





べからず。小田君の袖投と本永君の巴投とは共に軒輕なき妙技にして、中野君の袖投笠井君の大腰亦勇ましく、富田君の巴投天晴なりき。善甫君、本日は大いに振へり。練習の効なるべし。上田君、君の技美事なりしも、元氣乏しかりしは、著しく衆目を引きたるが如し。松本君、君の身體は強大なるも、其の技尙幼稚なり。今後奮つて技を練習せば、將來の大成長み難からじ。小河君、小軀を以て敵に抗す。其の技の妙を見るべし。吉田稔君、得意の脊負投、三好君の大腰と共に今日の白眉なるべし。吉田操君の大腰、山中君を倒す能はざりしと雖も、其の技や侮るべからず。山中君、君は體軀の強大なるを以て、剛座に著くことを得たれども、惜しいかな、君の技には稱すべきものなし。少しく意を致されんことを請ふ。武林君の本日はざりしは何ぞや。是れ單に君の不運なりとのみ云はんや。

十月十六日、廣田中村兩先生及び先輩佐々木四郎氏の審判の下に、秋季大會を舉行せり。天氣の快晴なると共に、一般に元氣なりしは、余等の満足せし所なるが、掛聲を發するなどの失態を演ずる者ありしは頗る遺憾に堪へざる所なり。是亦我が部の不振を證する一

現象と認むるを得んか。諸君何ぞ慎まざる。

村橋君は體軀小なるも技あり、將來に望あり。吉浦雜賀兩君の進退敏活なるは大に見所あり。怠ることなかれ。船津君の肩車觀る者をして歡呼せしめたり。玉市君は今少し敏捷なれ。柳井君、力ありて勝つは當然なり、宜しく技に依るべし。小河君の巴投亦功を奏せり。怠らずんば進歩の見るべきものあらん。長嶺君は足を合はする癖あり、注意せよ。關谷君、押込も輕んずべからざれども、立技も侮るべからず。河田君の技威服の外なし。山根君、力を頼みて敵を侮る、稍禮に失するあるが如きを見る。力を頼まずして、技をこそ頼むべきなれ。大崎君、技といふべきものなし。技を輕視するは敗を取る所以なり。花田君、君の元氣こそ眞の元氣といふべけれ。尙ほ平素に於て、技を研究練習すべし。内野君は力と技とを共有する一人なりといふを得べし。今田君の技大に進めり。杉山君、平素熱心の効、斯會を待ちて現はれたり。巴投殊によし。和田君、宮津君を倒す、二年の最勇者たるを失はざるなり。有延君には今一層の奮勵を望まざるを得ず。福本君の體軀小なりと雖も、斯道に適す。故に君の技よく

其の要を得。藤村君の大腰は誠に美事なりき。白根君、無言の内に元氣あり。小田君、技の敏なる點に於て余は感服せり。伊藤君、日頃の如く能く防ぎ能く戦へり。林代君は足を揃ふる習慣あり、注意を要す。村上君は敵の體をくづすことを練習すべし。伊藤誠君、初めて美事なる跳腰を見せたり。願くば益々大成せられん事を。中野原兩君、掛聲無用、以後を慎まれし。五峯君、君の技は大且敏なり。然れども脆さを感じ。足の運びに要を得ざる所あるに依るなるべし。敏捷なる村岡君、其の特技を發揮せずして退く、残念至極なりき。松本君、體力衆に秀て、將來の好戦士たり。坂田君、極力松本君に對して、終に勝者となれ。これ今日の重きをなす所以なり。河崎松原兩君、八分間の奮闘に於て、遺憾なく其の技術は表はれたり。剛膽なる三好君、不幸にして、足を挫きしも、屈せずして、大敵山中君に組み付き、竟に彼を倒せり。あゝ「斃而後已」とは君の今日の擧の如きを云ふか。(K、N生)

選書展覽會記事

書道部委員

村岡 淺一
齋藤 八郎 記

我校友會書道部の選書展覽會は、十一月二十二日に行はれたり。當日午前第九時より、午後第四時までの間に於て、公衆の縦覽を許さる。會場は教室三箇を以て充てられ、書道部の展覽會場に隣れり。抑この展覽會は、もと定例の如く、十月十八日を以て開かるべき筈なれども、本年は都合によりてかく延期となれり。是より先、本年七月の初に、左の如き課題を定められ、十月五日を期限として提出せしめらる。

- 第五學年 李白の峨眉山月の詩(楷行草隨意)
- 第四學年 頼山陽の蘇水遙々の詩(同前)
- 第三學年 梁川星崑の古往古來の詩(同前)
- 第二學年 義氣凌秋日高懷互海雲(楷行隨意)
- 第一學年 志士慕古人忠臣挺奇節(楷書)

しかして、選出陳列の數は總計百九十三點にて、内受賞百十三點なり。受賞を等級學年に分てば、

- 學年 一等 二等 三等

五學年	二、	九、	一五、
四學年	一、	七、	一一、
三學年	一、	六、	一二、
二學年	一、	七、	一七、
一學年	一、	八、	一五、
計	六、	三七	七〇

なり。之を、昨年の、一等六人、二等三十三人、三等五十一人に比すれば、稍々好成绩なるが如し。是日、風寒くして、來觀者多からず。但し、終始場内靜肅にして、本校生徒のかはるく、審かに閱覽し、書道に奮勵するの刺戟を得たりしは確なる事實なりしなり。

書道部展覽會記事

委員 渡邊 正規記

十一月二十二日、書道部展覽會が開催せられた。此の日は、うすら寒かつたので、午前九時から、午後四時迄、一般の觀覽を許したが、午前中は、吾等中學生と小學兒童との外には、あまり觀に來る者はなかつた。午後からは、秋日がゆるやかに、南面の玻璃窓の外に流れそめて、ぼつぼつ、學生以外の觀覽者もあつた。

膽に筆を運んで貫ひたかつた、清瀬君のは、今回の秀逸の部だ。松村君のは、丁寧に書いてはあつたが、一等の價値は疑はれる。進藤君のは、色彩筆致共に感服の外はない。今回出品中の白眉と思ふ。長嶺君のは、恰も黒人の畫を見る様な思がした。田中君上川君のは別に評し様はなく、只年級相當と思はれた。此の外の作品に就いて云ふと、吉田君(四年)の夕景などは、三等では惜しいと思つた。一等の松村君のに比べても、遜色はない。寧ろ勝つて居ると、自分には思はれた。松原與七郎君のも、有望では可哀想だ。仲々旨く書いてあつた。審査外のものでは、進藤、清瀬兩君の油繪、進藤君の泊船(水彩)及び風景(水彩)、松本君のランケ(コンタン)、須子中村芳、清瀬君の風景畫など、異彩を放つた。田總先生のあたゝか(バステル)及び魚類の二點は、どちらも衆目を惹いた。殊に、あたゝかは、小春の温い空氣が美しく畫かれてあつた。まだ書けばいろんなことがあるが、これで結末をつけることにしやう。

終りに一言したいのは、諸君が畫筆を取られる際に當つては、なるべく寫眞的にならぬ様に、人に不快な

自分は屢々「今年は淋しい」と云ふ聲を耳にした。以前は知らぬが去年のそれと比較すると、自分にも今年には實際寂しく思はれた。今年も去年と異つて、寫生畫と限られたので、總體に出品畫は地味で、あまり畫面の大きなものも見受けなかつた。然し、其人の技倆を發揮すると云ふ點に於いては、臨畫よりも、寫生畫の方が、一層勝つて居ると思ふ。故に、實績に於いては、今年の展覽會は、去年のそれよりも一段進歩したものと信ずる。左に、出品畫に就いて、略記しやう。

出品總數三百八十八點、その内、一等八名、二等三十五名、三等七十一名、有望六十九名。

優秀者の姓名と書題とは左の通りである。

五年、南瓜(水彩)阿部柄音、南瓜と柘榴(水彩)西林鴻介、

四年、風景(油繪)清瀬勲一、風景(水彩)松村正一、三年、風景(水彩)進藤常雄、風景(水彩)長嶺元治郎、二年、南瓜(水彩)田中政太、一年、橙(鉛筆)上川忠夫、右に對して、少しく感想を述べて見やう。

阿部君のは、鮮明な色彩と輕快な筆致と、共に快く感じた。西林君のは、色はよく出て居つたが、今少し大感させる様な色彩を避ける様に、又、大膽に、一々筆跡が明に印せられる様に畫かれんことを切望するといふ事である。今一つ、これも自分の考へとして、先生のあたゝかに於ける様に、諸君の作品に書題を附したら面白からうと思ふ。妄評の罪を謝し、併せて來年度の展覽會には、今一倍の發展を遂げられんことを祈つて擲筆します。

漕艇部記事

Y、M、生

秋天澄渡れる九月二十九日、我校五百の健兒は、勇みに勇み、各中隊旗押し立て、玉江河畔の會場に臨めり。

午前八時半、準備全く整ひ、烟花一發碧空に炸裂して、轟然たる響、四峠内に傳はると共に、和船競漕は始りぬ。今年に諒闇中のことなれば、奏樂の賑はなけれども、意氣衝天の健兒の應援、觀覽人の叫び、萩の天地は爲に震撼せむばかりなりき。第十二回は第一中隊對第四中隊選手競漕にして、一發の號砲と共に滑り出てたる二つの艇、これこそ未曾有の記録を作りたる

競漕なりき。秋の日漸く玉江山に隠れんとする頃、第二中隊對第三中隊選手の花々しき競漕ありて、健兒の意氣益々揚れり。第一中隊對第三中隊選手競漕となれる折から、夕燒雲の河に映じて、滿目紅なる其中に、二條の直線を曳きて進む壯觀は、例へんかたもなかりき。かくて一同解散せしは、午後六時なりき。左に當日の最興味深かりし者を掲載せむ。

第三回(四分十五秒)

第四回(四分十五秒)

吉田 稔	村木 好郎
松岡 六雄	中野 常一
渡邊 壽一	國重 爲人
吉村 潤一	吉田 一郎
上野 弘	坂本 四郎

中隊選手競漕(二週)

村木 好郎	松浦 時行
三好 市郎	河野 匡四郎
竹内 基雄	黒瀬 貞盈
吉田 操	厚東 宗一
山川 恒久	富田 稔

- | | | |
|-------------------------------|------|--------------|
| 4. The good man and his sons. | III. | T. Hayashi. |
| 5. The Death of Nelson. | II. | S. Murakami. |
| 6. 人物論 | III. | K. Ogata. |
| 7. 人物論 | III. | 吉田 操 |
| 8. 故郷の樂 | V. | T. Kaneko. |
| 9. Saved from the Sea. | III. | H. Tani. |
| 10. True Friend. | III. | M. Nagamine. |
| 11. 誠 | III. | 關谷 等一 |
| 12. Good for Evil. | III. | T. Miyazaki. |
| 13. King of Lear. | III. | J. Sugiyama. |
| 14. 皮肉説 | V. | 阿部 桐香 |
| 15. A Boy and His Wish. | II. | R. Oshima. |
| 16. 噫殉國の志士沖積介氏 | III. | N. Arifuku. |
| 17. 殖産興業 | V. | 吉田 稔 |
| 18. 深夜の感 | V. | 田北 浩一 |
| 19. 復活 | III. | 黒瀬 貞盈 |
| 20. The Wit of Sorori. | V. | 中川源三郎 |
| 21. 眠ざる夢 | V. | 兒玉 才三 |
| 22. 梅雨に臨みて感あり | V. | 武田 政介 |
| 23. William Tell. | V. | 渡邊 壽一 |
| | V. | 小川 千里 |
| | V. | A. Murakata. |

須子 英一	横山 繁介
武林 治郎	西松 鴻七
大津 藤一	山中 尙夫
末武 清	伊藤 好春
木島 清七	高原 敬介
村木 好郎	須子 英一
三好 市郎	武林 治郎
竹内 基雄	大津 藤一
山川 恒久	末武 清
吉田 操	木島 清七

辯論部記事

馬庭長 一記
兒玉才三

我部第廿五回大會は、六月二十九日、我神聖なる講堂に於て開かれた。登壇辯士及び其の演題左の如し。

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1. 英詩 | Y. Y. Shimura. |
| 2. 萩に就いて | III. 宮津 精一 |
| 3. Union is Strength. | III. S. Okada. |

- | | | |
|--|------|-------------|
| 24. The War between U. S. A. & Mexico. | V. | Y. Shimura. |
| 25. 余が難船の實驗より我短艇部の不振に論及す | III. | 松浦 時行 |
| 26. 忍耐 | I. | 志賀 義雄 |
| 27. 否の一語 | V. | 中山 翁郎 |
- 宏大なる場内には、雄渾なる氣魄を漲した我五百の健兒が、整然として席を連ね、尙ほ各先生の臨席をも忝うした。總て部長土江先生の開會の辭終り、次いで校長登壇、校堂の神聖なる事、並に生徒一般の心得に就きて訓話あり、尙西野文太郎氏の人物論に及ばれた、其よりプログラムの順番に従ひ、滔々たる辯論は始められた。
- 劈頭第一番に、アダムス先生登壇、「難破船金星丸」と題する英詩のレシテーションをせられて、我々に模範を示られ、後で、頓野先生が、大意を通譯せられた。次に、宮津君は、萩地出身の諸先輩を拉し來りて、現代我等青年の奮勵努力せざるべからざるを論じたは至極よかりしも、君が、扇をつかひ乍らやられた其の態度はあまり感心せぬところであつた。岡田君、原田君の

英語のレシテイションは共に悪くはなかつた。村上君の英語のレシテイション、小方君の通譯、共におだやかにあせらずやつてのけられたのは嬉しかつた。吉田操君の人物論、好適の人物を捕へ來りて、善惡兼ね行ふが如き人物こそ、茲の生存競争劇甚なる社會に於ける眞の勝者なれ。然らざる人は劣敗者なりと絶叫した。右終るや、演壇さして眞一文字に突進した一勇士、是れぞ櫻井義彦君であつた。衆皆、君が、果して如何なる議論を爲すかを聞かんよ待つ間もなく、語氣勇しく、卓をなぐつて、「我輩の意見は、吉田君と正反對なり」とどなり、同じく好適人物を擧げて、反對説を喋々述べ終りて、意氣揚々と降壇したりしは、面白かりき。論の可否は別問題として、いづれ劣らざる達辯であつた。次に金子君、谷井君、長嶺君の英語のレシテイションがあつた。その態度といひ、發音といひ、共に賞讃の外なかつた。殊に、谷井君の流暢な演説振は、今尙目に残つて居る様である。關谷君は、切りに佛法の功德を説き、之が信仰を奨めた。宮崎杉山兩君の英語のレシテイション終るや、どよめきの中に、飄然と見られた一快男子があつた。それは阿部君であつた。登壇

するや、後に掲げられたる演題を指して、「諸君、我輩の演説は皮と肉とのみにして、悲い哉骨なし」と叫んだので、先づ、聴衆は笑の波を打たせた。さて、君は皮肉説を喋々饒舌り始めたが、一言一句、笑を催さしめざるはなく、聊か催せし満場の脈氣を洗流させた。次に吉田君登壇、題の眞面目なりし爲か、一齊に静まりかへつた。語々肺腑より出て、我五百の健兒をしてそらに扼腕せしめた。大島君の英語のレシテイション、有福君の通譯、共に少しも臆する色なく、満面にえみをたへて、しかも優しき音調で静かにやられたのは、頗る愉快であつた。田北君の「殖産興業」は、聊か原稿朗讀の氣味があり、餘り立板に水的であつた。然し、流暢な辯、鷹揚な態度は誠に初登壇としては、豫想以外であつた。黒瀬君は、俄に、深夜の感なる題を改めて、落第説とし、原級の濫に蔑視すべきものに非ずして、大に尊ぶべき者なる所以を語られたが、確に一理はあつた。中川君、君に元氣のあつたのは何よりであつたが、しかし、餘り最大急行的であつた爲か、小譯がよくわからなかつたのは残念至極、今少しゆつくりやり給へ。兒玉君は、英語演説のスピーカーとし

ては抜群の人、今迄レシテイションばかり聞いた耳に、君の實力を以て、巧みに、曾呂利新左衛門の逸話を述べらるゝるを聞き、而も、我々無才のものまでがよく解する事の出來たのは誠に嬉しかつた。「眠らざる夢を見よ」と絶叫したのは五年級の一雄辯家渡邊君、一徹せる論旨を、ホープなる一字に置きたる、熱誠にして氣概ある辯論は、我々をして、眞に眠らざる夢を見しめた。君に愛嬌のあつたのは何よりであつた。小河君の梅雨の感、村岡下瀬兩君の英語のレシテイション、共に華々しき好成绩であつた。幸に本部の爲めに益々突進し給へ。松浦時行君は、難破の實驗談をなし、我漕艇部の不振をいたく嘆じた。熱烈な情が表れてゐて、しかも、君の論旨は甚だ痛切であつたが、君の態度に滑稽なる點ありし爲か、聴衆の中より間々聲笑の起りしは遺憾の極みであつた。今少し研究し給へ。志賀君の「忍耐」は、一年生としては、出來ばえ申分なく、論旨の一貫せる、辯舌の流暢なる、實に將來有望の辯士なる事が首肯された。大いに務め給へ。プログラムの終末に掲げられたるは、達辯家の聞えある中山節郎君其人であつた。「否の一語」と題して、得意の辯を奮ひ、

適例を拉し來りて、説き去り説き來りて、満場の聴者をして、恍惚として耳を澄まさしめ、聊か催し、睡氣を覺醒した。かくして部長の閉會の辭と共に和氣霽々の裡に閉會されたのは、夕陽將に指月の頂に隠れんとする六時頃であつた。十一月二十八日及び十二月二十四日の兩日に互りて、本部は秋季大會を講堂に開きたり。先づ部長の開會の辭あり、二三の禁戒を與へ、靜肅を旨として、拍手喝采等をなさざる様注意せられ、終りて、「ブカナン」先生は、特に、余等のために英語のリーディングをなし、好模範を示され、次に富田君立ち、現代青年の禮儀頹廢せるを痛論し、多く、自己の經驗の實例を引き、急所を衝いて誤らず、實に、當日の驍將たり。次で、前會に殿を務めたる剛の者中川君立つ。其熱心なる、其元氣なる、共に稱すべきも、早口に過ぎ、其論旨の徹底せざる所ありしは遺憾なりき。谷井君、例に依て、愛嬌ある態度にて、靜に語り初む。態度・ジエスチニア等申分なかりしも、唯、其發音の稍、日本語的なりしは、蓋し白璧の細瑕か。國重君、野卑なる

言語は慎むべし。田北君の辯、眞面目にて宜し。今少し抑揚を練習すべし。須子君、初回なるにも拘らず、滔々と、君が登壇の興趣を語る。聴く吾等が心は劍嶺の顛にありて、紅暎を、將に昇りて六合を照臨せんとするに見る心地して、壯快痛快筆舌に絶したり。阿部君立つや、東方朔者流の滑稽的論法を以て、修學旅行中の見聞につきての感を述べ、大に聴衆の退屈を醫せり。君が目的とする所は、之に依りて何事をか諷刺せんとするにありしも、時間の都合にて、中途降壇、十分其懷抱を吐露し得ざりしを憾とす。次に老将中山君立つ、論旨高大、思想深遠にして、且つ其音調や朗に、其辯舌や雄、實に本部の重鎮たるに恥ぢず。藤井君、初陣なりしも、君の熱心は、君をして、臆氣なく、思を吐かしめたり。されど稍、場馴れせぬは止むを得ず、益、努力せよ。これより晝食、約一時間の後再び開會、英語討論ありしも、初めての事にもあり、且つ急なる思立なりしかば、不成績なりき。吉田君、素より聞ゆる雄辯家今回は初めての英語演説なるに、君が旅行談を、平易に且自家の英語にて發表し、其意よく徹底せり。谷井君と共に、當日の二白眉として、會長の讃辭

を贏ち得たる君が特色は、實に茲に存す。唯、會長の批評の如く、今少し語調の優雅ならむことを望む。柳井君、壇上に立ちて、臆せず、突進せよと説く。初年級としては望を囁すべき辯士なり。幸に本部のために突進せよ。本日は之にて解散。
十二月廿四日再開。先づ、飯田君悠然登壇、英語のリーディングを爲し終る。小河君、長上の音を濫用するは不敬なり、慎むべし。兒玉君、初度の登壇なるに拘らず、よく流暢に、英語の昔物語をレシテイトせり。これまた有望の辯士なり。今後の努力を希ふ。松原君、論旨高尚、多く泰西の例を引き來りて、よく自我の觀念を説く。早口なれども、確に能辯なり。玉置君、立つや「満場の諸君」と云ひ放ちしは一才意外なりき。英語演説なれば、前置も英語なるが宜しからん。今回は此類多かりき。獨君のみならずれども、一般に注意せるなり。最後に、西林君、英詩の暗誦を試みたり。閉會の辭終つて、會長より、吉田谷井二君に對する批評あり。一等の價値はあれど、我が部の程度を高むるためとて、二等と定めらる。而して、今後、出演の方法を、英國人のそれに鑑みて、次の如く定められたり。

辯士は、豫め原稿を作り、之を提出して、添削を乞ひ、然る後、清書して、演壇に立ちて、之を朗讀すること。尚ほ、當日の辯士演題及び受賞者左の如し。

1. 英語朗讀
I カナン先生
2. 學生と禮儀
II 5, 富田 穰
3. 自然にかへれ
4, 中川源三郎
4. The Musician of Bremen.
II 3, 谷井 完
5. 寸鐵(英語)
5, 金子 武馬
6. 大國の國民
4, 國重 爲人
7. King Alfred and the Cakes.
III 5, 兒玉 才三
8. 戦はんかな
5, 渡邊 壽
9. A Clever Doctor.
4, 山田 正武
10. 眞心
III 5, 田北 浩一
11. George Washington.
2, 村上 莊一
12. 諸君よ
4, 寺田 寶藏
13. 登山みやげ
II 3, 須子 英一
14. The Ungateful Soldier.
3, 松尾 剛介
15. 旅行のみやげ
5, 阿部 輛香
16. 死の價値
II 5, 中山 節朗
17. Julius Caesar.
3, 宮本 謙介

18. 不出世の英傑か、將た虛榮心の權化か。
5. 藤井 信次

19. 文明は吾人に幸福を齎すか。(英語討論)
議長 西林
5,1 柴田、武田、阿部、兒玉、齋藤、金子、
5,2 松原、横山、黒瀬、村岡、小河、藤井(信)
 20. 嘘 P O ツ
5, 黒瀬 貞盈
 21. Talking to a Fish.
4, 阿武 芳輔
 22. 諸君の大半は法律の違反者なり
4, 松浦 時行
 23. 藤栗毛(英語)
II 4, 吉田 操
 24. (food for Evil).
II 3, 津森 壽卿
 25. 突進
1, 柳井市次郎
 26. The Noblest Deed of All.
4, 飯田 剛一
 27. 東洋保衞
5, 小河 千里
 28. The Story of William Tell.
3, 兒玉 義清
 29. 自我の觀念
5, 松原 淨二
 30. Oysters for a Horse.
4, 玉置 一
 31. Sir Humphrey Gilbert.
5, 西林 鴻介
- (ローマ數字は受賞の等級を示す)

會員計報

二月九日、二學年生兼重英三君は、心臟痲痺の爲めに死去せられたり。

會友箕妻規一君は、東京高等商業學校卒業後、臺灣銀行に入り、新嘉坡支店在勤中なりしが、不幸にして鵬窒扶斯に罹り、十一月二十九日遂に死去せられ、十二月七日、遺骨當地に歸葬せられたり。

通信一束

拜啓昨日御不在中突然參堂失禮仕候其後家事取込の爲御伺出來ず乍略儀書中を以て申上候兼て御承知の如く我防長二州の青年にして海軍兵學校機關學校に入學する者過去五六年前迄は其數漸く優勢に趨かんと致居候處明治四十二年以降形勢頓挫し昨年の如きは兩校を通じて僅に二名の及第者を得たるに過ぎず候而も元來萩中學校は毎年二名多きは三名の採用者を出せる例も有之候處當今殆ど其迹を絶ちし有様に相成申候時の推移と共に諸君の思想も亦變じ時に消長あるは免れざる所なるべしとは雖も頗る遺憾に堪へず肩身の狭さを覺

え候固より吾々の推奨努力の至らざる責に歸する外無之候へども由來海軍には同郷の出身者極めて尠く隨つて海軍の事情を紹介して普く青年子弟の心頭を刺戟するの機會多からざりし結果所謂る食はず嫌の感有之間敷哉との疑も有之幸ひ冬季休暇歸省中なるを以て此機會を利用し校長に御願申上げ黄口の分に過ぎたる業ながら軍人志望者に對し海軍の事情を説き先輩憂慮の一部を分たんと存じ之が御願旁々現今の學校の狀況等に就いて御高説拜聽仕度と存じ御伺ひ申上候次第に候へども御用繁の折柄且勝手ながら家事取込の爲其意を得ず遺憾ながら來るべき夏休暇を待つ外無之候

春暖の候修學旅行を行はるゝあらば多少交通の便を缺くの嫌は有之候も吳軍港は左程遠しと申程にも無之候間途に嚴島の勝を探り藩祖の往事を偲び廣島宇品に商業の狀況を視察し吳工廠に造兵造船の狀態を觀軍港に碇泊軍艦を訪はるゝが如き場合も有之候はゞ海事思想振作の一助とも相成可申先輩諸氏も非常に望み居られ候同裳會に於ても志願者奨勵の一助として希望者へは受験地迄の旅費等に就いても志願者及體格檢査合格者試験及第者に對し應分の補助金給與の方法も講ぜら

るゝ事に相成居候間金錢上の顧慮よりして他に志願を轉ずるが如き者有之候はゞ遺憾千萬に候承れば近頃は軍人志望者へは放課後特別授業を科せらるゝ趣何卒右事情御賢察の上御講話の御序を以て生徒諸君に御紹介被下候はゞ幸甚に候尙生徒諸君の御質問も候はゞ回答の煩は厭ひ不申候間御一報被下度申添候也

右先輩諸氏の意を體し失禮を顧みず如此に御座候
大正三年一月二十四日

(軍艦三笠乗組海軍中尉) 田村能介

萩中學校長村上俊江殿

拜啓寒風吹きささみ滿目蕭條たる季節も過去り楊柳新芽を萌す折と相成申候處校長殿初め諸先生御揃ひ教務に御鞭掌の御事と奉察候生儀も入營以來最早四箇月軍隊生活に漸く趣味を感じ初め申候教練も日々進捗し來二十四日頃より第一期の各個教練の檢閲有之筈に御座候入隊後體力頗強健一貫五百目を増加仕候然しながら晝間の激動と隊務の忙しさに追はれ五年間懇々御教授被下候普通學も存分復習出來兼困り居申候本年は士官候補生採用人員減少せられ候へども志願者は相當に

可有之と存申候益々御奨勵相成一名も多く合格致し候様所願に御座候其他上級學校志望者も全員合格仕様御盡力の程願上候當地は當冬は非常に暖なる方にて萩と氣候上大差無之非常に仕合せ申候學年試験も旬日の間に迫り嘸かし御多忙の御事と存じ奉り候切手封入致置候間本年度校友會雜誌印刷出來之節一部御送附被下候はゞ幸甚に奉存候明日は陸軍記念日にて餘暇を得候間就床前の三十分を利用して一書呈上仕候次第に候へば亂筆は御咎め無之様願上候別紙は陸軍志望者に廻覽せしめ被下度併せて御願申上候 勿々頓首

三月九日夜 生駒林一
村上校長様 御侍史

拜呈西比利亞風の猛威を振ひし候も經過し指月の櫻花將に綻びんとする時諸君五個年螢雪の効空しからずして旬日の後には希望滿々たる卒業證書を手にせらるべし愚生の過去を追懐して諸君の御心中を想像申上候生入隊以來殆ど四閱月軍隊生活にも馴れ當節にては趣味も層一層と相加り愉快なる生活を續け居申候生活狀態は後に譲り來四月に考試に應ぜらるゝ諸君の爲に

生の思附を可申上候陳腐の事をとの御考も可有之候へど軍隊に入りて切に感じ候間可申上候先第一に數學に全力を注ぎて良き成績を得る事肝要に候是には出來得る問題より先づ手を着くる事に候去年迄は採用人員も澤山に候ひしも尙三分の一位完全に出來ざれば合格せざりし由に候へば今年は少くとも二分の一は是非合はず事肝要に候べし次は英語理化に候他は如何に不出來なりとも可なりの點は取れる者に候一學科不成績の故を以て自暴自棄する様なる事は絶対に慎むべく候殊に軍人には此精神を必要と認め居るらしく候時間前に早く退場する事を戒むべし何處までもかぢり附く精神を要求する故試験官が踏を不入る程長く居るべし然し時限來らば一秒も猶豫すべからず次に字書を丁寧に書く事に候兎角試験を受けに行くと卒業後の情性で遊びたくなるものに候故僅か一週間の苦痛が一生涯の浮沈に關するのであると云ふ事を常に念頭に置きて刻苦奮勵せらるべく候試験場にては殊に姿勢を端正にし袴も毎夜寢床の下に敷きて折目を正しくして入場すべし試験官には中學校で習ひたる禮法を嚴格に行はれ度候以上は小生が受験上必要なりと感じたる事に御座候是より

聊か生活状態に就きて記し可申候入營後一箇月は銃を持たず徒手體操速歩行進で正月と相成申候銃の操法を習ひ出して折々野外へも出て申候此頃では歩哨斥候の動作位で諸君が先日やられた様な演習は四月から始ま可申候毎日擔銃捧銃に鍛へられ實彈射撃も四五日前に行ひ申候行軍も折節行はれて面白く候日曜日には一等卒の肩章ながら下士と同様に霜降の服を着て外出し將校の宅を訪問して馳走になるを常と致し申候中隊にても候補生殿と尊敬せられ案外嬉しきものに候手紙などは消燈時間を経過して書く事に候へば自然亂雑と相成申候讀み難き箇處は御捨て被下度候明日は陸軍記念日にて餘暇を得候儘一寸相認申候申上度事は尙澤山に有之候へども軍隊の規律には違犯出來不申候故是にて擲筆仕候御不審の事も有之候は御一報被下度二十七日第一期檢閱終了後は暇に候間御答可申上候 勿々拜
三月九日夜
生駒 林 一

士官候補生志願者諸君

御中

拜啓寒氣漸く加はらんと致し候處諸君益々御壯健御勉學の御事と奉察候扱先達而小生出發の際御約束申上

候第五高等學校状況の一端を御紹介可申候入學以來僅に二三箇月の事に候へば素より様子は未だ十分には相わかり申さず唯幼稚なる眼に映じたる五高生活の一斑に御座候五學年生徒諸君は已に修學旅行の際當地に立寄られ候事なれば一通りは御承知の御事と存じ候へども重ねて概略申上ぐべく候高等學校の組織が一三三部に分れ其の一二部が更に甲乙丙の三類に分たれ居る事は無論御承知の事なるべけれどこれ等が夫れ／＼何科を意味して居るかといふ様なる事は或は未だ御承知相ならざる諸君も可有之と存じ候故左に概略を表記可致候

- 第一部
 - 甲類 (英法) 英語を主要外國語として政治法律等を教授す
 - 乙類 (文科) 哲學史學英文科獨文科等を含む
 - 丙類 (獨法) 獨逸語を主要外國語として政治法律等を教授す
- 第二部
 - 甲類 (工科) 電氣工學應用化學機械工學等の九科を含む
 - 乙類 (理科) 動物植物純正物理化學藥學等の諸科を含む
 - 丙類 (農科) 官科農藝化學獸醫學等の諸科あり水産科もこの中に含まる

第三部 醫科

尙悉しき事御入用の方には何時にても規則を御

送り申すべく候

さて高等學校授業の梗概を申せば第一第二第三部を通じて主要なるものは外國語にして一週間に三十時間乃至三十四五時間の授業時間中約半分即ち十六七時間は外國語に占領せられ居申候其他の學科となると部によつて夫々同じからず一部にあつては國漢文歴史等を課せられ二部は數學物理化學動物植物圖畫等に候體操は何れの部をも通じて一週三時間にして秋期には數日間の發火演習舉行せられ後本年は佐賀武雄方面にて行はれ一部對三部聯合にて三回の演習中三回とも聯合軍の勝利となり申候運動部は中學校にある位のものすべて備へられ其上にボート部弓術部等も有之候陽春四月の候には市を距る一里ばかりの江津湖上にて對部のボートレース行はる、由に御座候又十月には對部陸上運動會舉行せられ又對部のランニング選手競争があり中學校の中隊競争どころでは無く猛烈なる敵愾心を以て行はれ寧ろ凄しい位に御座候

各部は夫々俱樂部を作りて團結し一部は綠俱樂部二部は有明俱樂部三部は紅龍俱樂部と稱し居申候

入學試験に關する事は毎年五月初旬に官報を以て發

表せらるゝ事なればそれを御一覽なれば直にわかる事に候へども官報によつて知るべからざることを即ち五高のみに關して申せば本年の入學試験の傾向は全體よりいへば入學志望者十人に對して入學三人強而して部により競争の程度はそれ／＼異り二部甲は七人につき一人三部は六人につき一人獨法は五人につき一人位にてどう云ふ譯か文科理科の志望は少く二人につき一人或は一人半につき一人と云ふ様なる易い處も有之申候競争は毎年烈しくなる一方なれば志望諸君は十分の用意を整へたる上にて見事に成功せられん事を願上候五高生徒にて組織せられたる防長會々員六七十人の中に萩中出身僅に三人とは實に心細き次第に御座候終りに熊本土地に就いて申せば所謂肥後平原の沃野渺茫たる中に遙に阿蘇の雄姿を望み市の中央には三百年の歴史を包む銀杏の聳ゆるあり剛毅朴訥の男性的氣風を養はんと欲せらるゝ諸君の來遊を切に相待ち申候時節柄御自愛專一に奉候草々頓首

大正三年十一月二十三日 小川 義 雄
萩中學校生徒諸君

大正二年度萩中學校々友會費
收支決算書

收入ノ部		支出ノ部	
一金七百七拾六圓貳拾五錢	生徒會費	一金四拾八圓四拾四錢	基金蓄積費
一金百拾六圓四拾五錢	職員會費	一金五拾五圓	短艇新造同上
一金七拾六圓貳拾貳錢	雜收	一金參拾七圓參拾壹錢	劍道部
合計金九百六拾八圓九拾貳錢		一金參拾六圓六拾九錢	柔道部
		一金百壹圓八拾八錢	野庭球部
		一金七圓	短艇部
		一金百七圓六拾錢	遊泳部
		一金五圓四拾八錢	雜論部
		一金拾四圓八拾錢五厘	圖書部
		一金拾參圓拾八錢	圖書部

藝苑

夏期休業中他人を喜ばせたる我行爲

熊谷 眞夫

第一學年 熊谷 眞夫
余等數人にて山口道を通らうと家を出れば葬式に出逢ふた、町中に帽子を取つて心から叩き叩き行く程に、「おい君の帽子は倒になつてゐる、鉢巻の結び目が左にならなければならぬと余は友人に注意した。又大橋も過ぎ淡松の坂を登る時、一人の児供が袴の片方に兩足を入れて六ヶ敷さうに歩いてゐるのを見た。これは家を出づる時急いだ爲であらう。これも氣を付けた。明木村に達して親族に立ちより、「明日は山口で御親類の御方に逢ふ筈であります、何か御用事はありませんか」とこちらから言傳を促した。時に段々と日が西山に入り淡黒くなつた。一升谷の險道で、一人が物を失つたから共に探した。夜の十一時、櫻の茶屋で辨當を開いて食事中咀嚼する習慣をつけねばならぬと注意した。持參の仁丹を一同に配つた。それより旅の疲れで寐た、目のさめた時は二三時間立て居たので又出發して進むと、誰か提燈を持たないで行つてゐる者がある、追付いて提燈の明を分けた。又佐々並の農家の軒端で東のしらむまで休んだ。やがてそこを出て、幾度も幾度も松並木の間に隠ひて一ノ坂に出た頃は、全く夜があけた。ふと路傍を見れば、山の裾に愛らしい桔梗が咲いて居たので、折取つて、丁度其の邊で遊んでゐた子供に「歸つて佛壇に立てなさい」といつてやつた。山口町に着いたのは午前

一金拾壹圓五拾壹錢	地理兩部
一金百五圓四拾五錢五厘	褒賞部
一金百六圓九拾六錢	陸上運動會費
一金九拾壹圓七拾九錢	雜費
一金百貳圓貳拾壹錢	臨時費
一金六拾七圓五拾四錢	剩餘基金編入
合計金九百六拾八圓九拾貳錢	

大正二年度萩中學校々友會
基本金決算書

一金千貳百六拾壹圓參拾貳錢	前年度繰越金
一金百九拾八圓九拾四錢	本年度實收高
此 譯	
金四拾八圓四拾四錢	校友會費ヨリ蓄積ノ分
金六拾七圓五拾四錢	同 上決算剩餘金
金七拾參圓拾壹錢	利子
金九圓八拾五錢	雜收
合計金千四百六拾圓貳拾六錢	入

七時過ぎであつた。道で休んだ爲案外長い間かかった。数日見物後、小郡の親族にと出立つ。山口驛にて、列を作つて切符を買ふに、老人がまごまごしてゐられたので、そつと自分の前に挟んであげた。發車してから、友人が窓から首を出さうとしてゐたので、「風に吹き取られますぞ、其の帽子に挟んである切符は、どこか内懐にしまつて置に給へ」と注意した。小郡驛に着いて皆が立つたあとで、小さい風呂敷が一つ腰掛の上に残つてゐた。どうでも前を行く婦人の忘れた物らしいと思つて、「もし〜」と呼びかけて問うて見たら、果してその婦人の忘れた物であつた。それより十数日遊んで萩に歸つた。間もなく盆となつて御墓に参り、隣家の御墓へも花を立て、墓石に鳥が糞をかけてゐたのを、水で奇麗にして上げた。餘り暑いので、近所の小供が裸體のまま遊びに来たから「罰査にしかられるぞ」と注意した。夕方より、橋本大橋に涼みながら「圖書館によつた時、尋常一、二年と見える姉妹の小供来り、妹が聲を出して讀み出したのを、姉の方が、すぐそれを注意したのは感心であつた。此の様にしてこそ我が國の道徳が、日にまし進歩發達するのだとつくづく感じて、一層これにまけない様に心掛けやうと覺悟した。

同題宿 第五學年 武田 弦介

試験が終ると、豫て思つて居た水漣しを作ることに掛つた。早速、化學で教はつた法を應用して、砂木炭棕櫚の皮を用ひて作りあげた。今まで白く濁つて居た水が綺麗に澄んで、見るからおもしろいさうな水となつたので、母は勿論家内中大喜び、自分も得意満面であつた。後の空地に、庭を築かうと思つて、濱から、石草花八手の實生などもつて歸つた。餘りはずんで居つたので、炎天頭を焼くのも覺えず、一生

月のないその夜、重たさうに垂れて居る雨雲の間から、星が鋭い光を投げて居たものの、一寸前も判然しない。やがて、明木のトンネルに着いて、入つて行くと、突然靜寂を破つて、老爺らしい聲が、直ぐ耳元で響いた。「何處へお行きになる、俺も件にして呉れる」、彼はかう云つた。よく聞いて見ると、萩に買物に出て、一杯機嫌よく快を稱する間に、思はず遅くなつた。その上眼が悪いので、「ま、よ一夜をトンネルの中で明かさう」と決心して居たこと、「よし、それではおいでよ」、我々は懐中電燈を照らして、彼の車まで引いて、明木の市まで送つてやつた。老爺は、滑稽な程頭を下げて禮を述べた。夜なので見えなかつたが、必ずや彼老爺の顔には、誠の感謝の表情が表はれて居たらうと思つた。我々の足は自然に勇み立つて居た。全身の血は歡喜の情に熱して居た。廿五日の朝の汽車で、山口から船木へ歸つて行つた。街から半里距つた磯崎村の小丘こそ、故郷の幻影として片時も消えやらぬ我が「ふる里」ではないか。自分と意氣相投合し、肝膽相照し、一生の苦樂を共にせんと誓つた兄弟が居る。それから毎日、附近の寺の鐘を借りて、藝術を論じ、學生に禁物の政治を論じ、生實氣に宗教を論じ、滑稽にも口角泡を飛ばして、氣焔を吐いた。或日、彼曰く「智識の交換をしやうし。僕曰く「全く賛成」相談の極、益ひな數學は止めにして、自分は、彼にアツシング、野村白村氏の近代文學十講、彼は自分にアラビアンナイト、大谷鏡石氏の英國短篇集を、夫々、幼稚ながらも、梗概だけを話し合ふことにした。世界一の怪文學アラビアンナイトの大意は、恥かしい事だが、この時、知つた。故郷に居る間、大きな堤が三つ程潤れた。網を提げて、魚を獲りにゆく。澤山の人の中間に交つて、夕方まで漁つた。鯉鮒など無慮七十四。

懸命に造つた。海鼠形の金魚池、妙義山の石門然たる岩、影を水にうつして、云ひ得ぬ趣、前夜の妙を得て、金魚さへ、水に潜り、嚴父の面には時ならぬ喜悅の色が浮んだ。自分の母は自分が働けば働く程喜ぶ。勉強の事は餘り八益散云はぬ。自分が畑に出て、一生懸命に草を取つて居ると、畑に赤みを帯びて喜ぶ。これが孝行かも知れぬ。

越ヶ濱の管絃祭で、靜な海も湧きかへる様であつた。さしも廣い菊ヶ濱も、西は阿武の松原から、東は松本川の洲口まで、人の山人の垣を築いた。數萬の螢をつれた星の神の座乗船とも見える船が、浮きつ沈みつ、瑠璃と笛の音高く、洲口にはいつた。其の時、群衆はなだれをうつつ押しかけた。蟬娟たる巫女の舞、うちならす鉦の音、心の底を刺るやうであつた。其時、一人の婆さんが、自分はよし見ずとも、孫には見せやうと心をくだくが、丈の低いので、見せる事が出来ない、自分には心ならずも、其の子供を肩に乗せて見せてやつた。いつも忙しい香川津の渡場、澤山荷物を積まうとして居る五十許りの老人は、心をいらいらさせて居る、誰一人手傳つて遣る者もない。髪をわけた若い連中は、標草をふかして、舟ばたに座つて居る。餘り氣の毒だから、手傳つてやつた。荷は積まれた。舟は出た。若い者はなに思つたかすごすご逃げて行つた。

同題宿 同 下井 干城

一昨年歸郷したばかりなので、今年は一つ歸つて見やうと思ひ立つた。恰もよし、七月廿三日の夜、同伴の出來たのを幸に、折からの黒闇をものともせず、萩の街を辭したのであつた。

とても、食べきれないので、近所に配つて歩いた。ある日のこと、従弟と二人で、恰好の處を擇んで、涼み臺を造つた。隣の人々は、喜んで涼みに來た。そして、種々の世間話に、夏を消したのであつた。今でも毎晩涼んでるだらうと思ふ。八月廿三日、見返り見返り、故郷を後にした。末日迄も居たかつたけれども、海水浴と宿題との爲に餘儀なくせられた。暑い日を、船木から萬倉へ、萬倉から吉部へ、吉部から太田へと、七里の道を踏んだ。午後一時、太田に着いた。私は、足が悪いので、馬車に乗つて歸らうとしたら、もう満員だ。併し一人位は、どうかならうと云ふ。行つて見ると、四十位の商人も乗りたがうて居る。自分は奮勵一番、彼に譲つて、てく〜と眞晝を歩いて、萩に歸つた。あ、四十餘日の間、記するも恥かしい四つ五つのことでも、果して他人を喜ばしたか、どうだか。

同題 同 富田 穰

成績は以前よりは少しは良かった、番數も少々上つたが、首席に人ありと思ふと、下ること教席、面目無いのである。而し一年の初陣がまづかつたので母も少しは満足した様であつた。又來學期から瀧口氏の別荘に移ることを話したら非常に安堵した様子であつた。私は、そつと此様子を伺つて、他に望みのない母、これしきの事にと暗涙を催した。而し親も安堵させるのは、子たる者の務で、決して譽ではない。安心させる事が出来なかつたら、それこそ大不孝者である。記して人に見せるほどの事も無いが、私が生れて始めてお禮らしいお禮を人から受けたので、「これしきの事を」との評をされてもいとはない、大要を述べて見やう。

隣りの安部某の不思議、議に黒い顔は、七月二十七日の夕刻、庭先きに現れた。特別にお願ひがあると云はれたので、奥に通じた敷道の煙は隣から流れる様に庭を襲ふた。野から歸る牛の一聲「ウオー」と田舎の暗き夕寂寥を破つて、悲しみを催させた。さてその話はかうであつた。實は不景氣な上に、五百圓の負債があるので、其整理をつけねばならぬがどうしたら良いだらうか、出来るなら盡力して呉れまいかとの事であつた。父の不在以來代理として所々に出入したので、こんな子供らしくない話を聞かされる身となつた。早速母に相談したら、父上不在だから斷れとの事であつた。可愛相だとは思つたが、斯くと答へた。重ね重ねの嘆願に遂に私も一緒に母に頼んだ。そして彼の救護策を案じた。それも負債の源因と眞面目なる経過とが氣に入つたからである。其源因は數年來不自由であつた長屋を増築したので、百合野氏から四百五十圓ほど借り、米を賣つて支拂はうと云ふ計畫であつた。處が米價暴落のため、月一分二厘の利子さへ完納せられず、遂に利が五十圓餘りも溜つたさうである。今では五百圓となつて、このまゝで行くと、殖えはしても減りはしない、困つた事であるとの話であつた。私は五百圓と云へば、多額では無いが、小農家にとつては困難であらうと思つた。そして長屋を賣る理にも行かず、又賣つたとて半額も止まらない。いつそ頼母子にしたらと氣付いた。で五百圓の利が年に七十二圓となる。今迄の狀態で行くとしたら、年々優に六十圓は出来る、で二十圓株で年三回か、三十圓掛で年二回か位は確にやれる。三十人の入組を作ると、二十圓掛で六百圓、三十圓掛なら三十人で済む。が人は年三回で二十圓掛を好む、是は年限が短いからである。遂に高六百圓、三十人で三十圓掛と決定した。善は急げて、其夕、近隣の人三十五人を觀音堂に集めて馳走して、後で

頼母子一件を持ち出した。演説の結果、二十一名は加入を賛成して呉れた。残り九名は、親戚や知人の内から心配しやうと契約した。豫想は當つた。意外にも三十二名ほど出来て、高も六百四十圓となり、年限は二期分だけ多くなり、十一ヶ年となつた。第一番會を、八月十五日に開いて、私は總代に推された。明るる日、六百四十圓を集めて、安部氏に、百合野氏を招かせて、五百圓を返却させて、残りは銀行に預金とさせ頼母子の抵當物件に付いて少々面倒を見たが、私と同本の老人とが受人となつて事が易く済んだ。茲で一段と整理の道が開けた。十一年の後は立派に整理が出来て、二百四十五圓の金が残る筈になる。それは以前利子として、毎年七十三圓の内を六十圓位づゝ納めて行つたと同様、金を心配すれば、掛金だけはあるが、而し、座をして行くと、年に五十圓内外で済むのである。是が發起のありがたい所である。で十圓位は毎年残る。十一年後には百十圓ほどたまるので前の殘金とて、凡そ二百五十圓位となる。だから、年に七十圓餘りも利子を支持つて、おまけに千年たつても元金は依然であるのと比較すると、割合がいゝので、私も自分ながら感心した。而し三十餘人を集めた十日間は、なかなか心配であつた。酒席では加入を賛成した人も、後から、女房から叱られたから斷るの、考へて見れば難しいからのなんのと云つて来るので、一時は私も途方に暮れた事もあつた。誰に話しても、不景氣で、頼母子はとも出来まい、私ももてあましておるから、御免をとの答であつた。爲に私方で二口ほど加入する約束を、始めはした位であつた。お蔭で、私も社會學を研究する事が出来て、得る所があつた。單純なる學生生活とは比すべき事の出来ないほど複雑な活社會の一部を知る事が出来た。此計畫の成績は思はず上々で、安部家でも大喜びであつた。明る日、

安部夫婦は魚を持つてお禮に來た。酒が嫌であるからと云つて菓子を呉れて。辭したが、是非と云ふので受取つた。其夜、母と私とに夕食を差し上げるからと云つて來た。再三使が來たので、行つて、非常に愉快に夕食を終つた。明る日菓子を食へた。非常に愉快であつた。平素の菓子とは異なる様な感じがした。而し一箱の菓子が得られたのも不愉快ではなかつたが、一籠の魚もうれしくはあつたが、それ以上に、無限の何物か私を浮き立たせる様に、肩をのびのびさせて呉れた。それは彼の菓子の源因を考へる事であつた。

隨を得て蜀を覗むの欲を脱し得ずして、又こんな事を實行しやうと決心した。それは私が加入してをる二口の内の一を彼に譲る事である。開けば、田村氏發起の十五圓掛年二回頼母子が、親で困つて居つたが、此秋が満會であるさうで、さすると、一口位は掛けて行ける筈である。と云ふのも、十五圓に三圓の利で、十八圓が一回で、年には三十六圓余り掛けて居つたのであつたからである。で三十六圓あると、子で行きさへすると、充分掛けられるであらう。つまり、少々位は座の方の豫定の十圓の残り金の内をこちらへ出しても同じ事であるからと思つた。さうすると六百四十圓ほど、十一年後には金が出来る。開けば、他にはもう頼母子は無い相だから丁度よい。かうなると約八百圓の貯蓄が出来る筈で、彼の老後が一寸豊に過される理である。出稼する前日に、此事を話したら、涙を流して喜んだ。そして、十二月十五日の座を、廿五日（私が歸省する豫定の日）に延引する事と定めて、其會から彼が掛ける事がした。私の豫定では、札が、少くとも百七十八圓は入るであらう、否此景氣なら二百三十四圓は入るであらう。そうすると、子で行つたら、一回の掛金が十三圓餘りとなるといふのであつた。

其一家の人に會ふと、丁寧に禮をする。其度々に、何となく愉快な氣が私の身邊に漂ふた。二十日に出て來る時には、船まで送つて來た。願ふ所は後の十一ヶ年。唯深く謝す、三十二人の連中の人々。余の功に非ず君等の功なり。

秋夜讀書の記 第二學年 中村 博

秋ふけて窓下に蟋蟀の聲しきり、遠寺の鐘ゴーンゴーンとかすかに聞え、月光窓の硝子を照して其の如き一夜、燈下に奈翁が一生の史傳を繰きて彼が悲慘なる最後を弔ひぬ。百年の昔、歐洲の天地を悠々馬蹄に委したりしが彼が英姿を想へば血湧き骨なり肉躍る。讀者をしてさながら奈翁たらしむる名文に酔はされて、我は奈翁と化し奈翁となりて、歐洲の天地に測歩する心地し、若き我が血潮は湧きいてとむる能はず、覺えず知らず一枚又一枚と數百頁の彼が史傳を讀破して、今や彼が最後を弔はんとなす。モスコイに敗れ、アウテルリツクに勝ち、或はトラフハルガに、或はライプツヒの野に戦ひし等、限なき變化に富める彼が活劇もウオータローの一戦にもろくも敗れて、百計此につき、遂にセントヘレナの潮風吹すさび、怒濤さかまくセントヘレナの夕、無限の怨を抱きつゝ、彼は一生の夢をむすびぬ。嗚呼その一刹那に於ける彼が遠古や如何に、心中や如何なりしか。盛者必衰會者定離、彼が運命此に至りてつきはて、彼が五十餘年の活劇の幕は絶海の孤島にとざされぬ。盛者の末路それ何ぞ哀なるや。嗚呼！しげしげと彼が最後を弔へば、夜もはや更けわたりて四顧寂たり。春戸の谷、流るゝ水音物さびしく聞え、名もしれぬ蟲、叢に哀れる聲を放つ。窓を開きて空を仰げば、初秋の空は玲瓏、一片の

傳だになく、月は尙ほ低く老松古杉の間にかゝれり。窓下の草に露の玉
きらめきて、悉く神々しき光を放つ。嗚呼此の寂寞の景に對して、末路
の奈翁の心中を察するだに涙なり。秋風颯と梧葉に音たて、去り、犬の
啼聲がボーと夜の闇をやぶりて聞え、後はまたもとの寂しきにかへれ
り。

まもなくテンテンテン………時計は十一時を報じぬ。

都會と田舎題 第三學年 吉田 虎 一

夏が来れば冬を羨み、冬になれば夏を羨むのは、普通一般の人情であ
る。若し、冬が来て冬でよいといひ、夏が来て夏がよいといふ者が有つ
たら、其人の意氣は、眞に旺んである。それと同様に、都會に在つて都
會に安んじ、田舎に在つて田舎を慕ふ者が、眞の偉いのである。平生田
舎にのみ住んで居る者が、時に大都會に出ると、其繁榮便利に驚き、直
に都會生活を慕ふのであるが、都會の人間が、たま／＼田舎に来ると、
其風光を羨むのである。都會から想像した田舎は、空氣が新鮮で、山紫
水明、野は廣く、氣は暢々として、遊ぶにも働くにも、都合がよい様だ
が、實際の田舎は、之と大いに反對で、平凡にして、變化がなく、只
だ寂寞を感じる計りで、直に都會生活を慕ふのが普通である。さて、此
の單調なる中に、變化を見認め、平凡なる中に、非凡を見出し得る人が
有つたら、其の人こそ、眞の田舎生活を味つてゐる者で、即ち又眞の社
會生活を知る者といふてよい。都會にては、活動の氣が充滿して居り、
田舎は、人間も暢氣で、活動が少いといひて、田舎を捨つる事は出来ぬ。
田舎にては自然といふ物が沈黙しつ、寸分の絶間なく活動して居る事
を忘れてはならぬ。水は流るる、鳥は飛ぶ、草花は咲く、蟲はなく。吾

つとめ、更の閑なるを知らざる者は、果して誰ぞや。官吏教育家が、遊
暑よ入湯よと、驕奢に誇る間に、破帽輕裝、炎熱燬くが如きの時、飄然
山河を跋涉して、或は長江の残月に嘯き、或は峨峨たる山嶺の雲に歌
ひ、以つて浩然の氣を養ふは、學生に非らずや。これ等を果して元氣活
氣乏しと稱す可きか。是れ、俯じて吾人の首肯する能はざる所なり。然
るに、現時の學生を見るに、此社會の非難、新聞紙の攻撃に掛念せず、
或は、これに群易して戰戰兢兢、歎息嗚咽、漸く意氣沈衰に赴く傾向を
示しつゝあるは、吾人の懍らずとする所なり。勇往せよ。邁進せよ。社
會の批難は既に正鵠を失せり。

凡そ腐敗墮落せる者、其の甚しきを舉げれば學生界よりも、高級なる
成人即ち社會の中堅たるべき人に先づ指を屈せざるべからず。若し彼等
にして自ら改むるに非ずんば、天下の徳道の上進は望むべからず。天下
學生の修養は望むべからず。蓋し、源泉涸つて末流清らかなるは未だ
これあらず。上の好む所下亦これに倣へばなり。然りとはいへども、徒に、
彼等の墮落を云云するのみにて、自ら何の爲す所なきは吾輩學生たる者
の屑しとすべからざる所なり。吾輩學生は、彼等が中堅として立つ所の
現代よりも、一層邁進すべき將來の時代に、中堅として立つべき責任を
有せり。されば吾人は、決して彼等に倣ふべからず、決して彼等により
て濁さるることあるべからず。

かの腐敗墮落華美驕奢の世評は勿論惡評なり。惡聲來らば必ず之れを
反して、正々堂々、其の信する所に向つて勇往邁進する氣象なかるべか
らず。豈自ら腐敗墮落せりとして、自ら群易し躊躇すべきんや。然ら
ば、その邁進は何事より手を下すべきか。即ち、日常學生間上の問題に
就きて、自己の所信を披瀝し、鋒銳銳利、以つて極力論争することな

人は、單に是等を美だと、道樂半分に見るのではなく、其所にも幾分の
自然の活動を見ねばならぬ。特に天地の氣の調合で、四時の間、秩序的
に、農作物が生育するのは、活動の最大なる者であると思ふ。兎に角に
自然の沈黙と活動に接したものは、田舎生活をすると限る。田舎にて
は、汽車もなければ、電車もない。そこで、塵もなければ、泥や油の交つ
た不潔な水は流れてはいない。人情厚くて、生活には心安い。小田の蛙
の聲は單調だが、電車の軋る音より聞きよい。森の蟬の聲は五月蠅い様だ
が、店で客呼ぶ聲よりは聞きよいかも知れぬ。然しながら、文明の利器
を早く應用して、見聞を廣め、技能を磨き、大いに活動して、國家有爲
の人材となり、國家に貢獻せんと欲する者は、田舎にのみ止る事は出来
ぬ。ただ偉大なる業をなし、崇高なる人格となるには、田舎生活を味ひ、
活動しつゝある自然といふものに學んで、豪傑心をやしたふがよい。

勇往邁進せよ 同 増野 兼 寛

近來學生に對する社會の非難喧し。曰く腐敗墮落せり。曰く華美驕奢
に失せり。曰く元氣乏しと。その批評たるや、標準を、遠く、維新當時
の「衣到肝」底の書生に取れり。それ、今日の學生を明治初年の書生と
比較すれば、一見して、或は華美驕奢に傾き、或は元氣活氣に乏しきを
認めん。然れども、時代は、長足の進歩を以つて未開より文明に進み、
粗朴より優雅に推移せり。學生の風俗、豈獨り舊套を嚴守するを得ん
や。且つ紳士紳商が、一個の時計、若しくは指輪に、よく數百金を投ず
るに、學生が十金を以て一洋服を購ふは、華美驕奢と謂ふ可きか。彼等
紳士紳商が、玉食佳肴に晩酌の一献を傾け賜して、輕衾に夢暖かなる
時、寒風清瀟として星稀なるの夜、一穗の孤燈の下、學窓に孜孜として

太陽の美 同 仁尾 重 人

或日の事なり。休暇を利用して近郷に遊び、早く發して山の峰に著き
たる頃は、正に静寂たる晩なりき。遙かの東天ほのぼの白み初むるか
と見れば、青白き空の色の中に微紅を含みて、天地漸く分れ、既にして、
淡紅、既にして殷紅、また濃紫と變じ、遂には金色ひらめきて、太陽の
一輪あらはれ、やがて半輪となり、ついでに全身をあらはしたり。此間
の氣象豈致は、口これを言ふ事能はず、筆亦これを寫すこと能はず。余
は、唯造化の技巧なるに驚く外なかりき。

また、或日の事なりき。天に一片雲なき夕、瀟瀟に立ちて望めば、落
日海面に流れて吾が足下に至り、見渡すかぎり、山と言はず、砂と言はず、
松と言はず、轉がりたる生實の露と言はず、落ち散りたる葉屑ま
で、一として燃ゆる色ならざるはなし。已にして、日は別れ行く世を顧
み脚ちに、塵々落ち行きて、水平線近くとなるや、忽ち沈みて眉となり、
眉渡せて點となり、遂に其の姿を失へり。然れども、其の餘光の、忽ち
箭の如く上射して、西空は、黄金よりも鮮かなる色を呈せり。やがて、
金色の空は赤紅となりて、次第に燃ぶるたる輝色に變り、何時しか暮れ

行きぬ。

つらつら思ふに、性時より、月を愛づる者は多けれども、未だ日を賞する者あるを聞かず。豈に自然に對する眼力乏しと謂はざるべけんや。紅塵万丈の都市にのみ住める人は、唯太陽の光の益をのみ知りて、其の美を知るに由なからん。されども、高山に攀ぢて、明け渡る空の日の出の景を見よ。また、海邊に出て、はてなき滄海の彼方に入る日を見よ。その光の如何美にしきかを見よ。日中に見るよりも大なる團體は、和かなる光を宇内に注ぎ、山に、水に、雲に、霧に、變幻陸離、其の美に人靈あるが如く、朝の光は、人に今日の希望を生ぜしめ、夕の光は、人に明日の事を豫期せしむ。實に造化のこの技巧は、人間の何物も企て及ぶべからざる大丹精に出づるかと思はるゝなり。

太陽の美は、朝夕を最美なりとし、然して、高山に見る日出の景は、日出の景の最も美なるものなり。海岸に見る日没の景は、日没の景の最も美なるものなり。さて、二つの景象相異なる所なけれども、暗より明に遷ると、明より暗に遷るとの差異あり。従て、そを見る人の感情、亦一様なるを得ざること、かくの如し。更に思へば、晝間と夜とを觀することの如何によりて、日に對する人の感情、また異なるものあり。即ち、もとの如何によりて、日に對する人の希望の色あり。日没には悲し、日中を光明ある世界とすれば、日出には希望の色あり。日没には慰安の色あり。もし、また、夜を理想の時とすれば、日没には慰安の色あり。その夜の明けて見ゆる日出には、百尺竿頭一步を進むる色あり。要するに、日の出沒の時には、美觀を呈する間短くして、満月の終夜かがやく如くなるを得ざれども、月に盈虧あり、日光の美は、日々に變らざるに注意すべし。これを譬ふれば恰も、我が國體の万古に超絶して微瑕なきこと、世界に例なく、また、其を守る國民の氣象雄偉、世に並

風はそよそよと青い田の上を渡り来る。非常に氣持がよい。稻がみのつて、吹く風に黄金の波を翻すのもよいが、緑色の濃い稻の上を風が渡つて、ひるがへるのも中中よい景色である。氣が神化するを覺えた。

七月廿六日
風が強い、風が強い。
戸の入れ 様が遅かつたので表座敷の障子がはげれる。コスモスは傾

く、脈來紅は倒れさうになる。
妹と二人がかりで竹を立ててすけをする。其の中には手水鉢の柄杓が一間先へころがって行く、もうとんだ事になつてしまつた。

七月廿九日
白銀に行き講習用の本を一冊買つて歸る。(勿論二冊入用の答はない。)

失敗は人を賢にするとはよく言つたものだ。誰が言つたのか知らん、若し言つた人が無ければ自分の發明とする。一夜の失敗は、自分をして常識は處世上最も必要なりと感をもいよいよ深からしめたのである。

七月三十一日
要をつみに行く、ゆくりなくも中原君に出合つた。中原君は僕にとつて忘るべからざる朋友の一人である。家は近所であり、同じ中學の一年は事もなく過ぎ、二學年一學期を終つた暑休に、彼は自分に退學の事を話した。退學後は講義録を取つて勉強するとの事である。其の理由は病氣で通學に堪へぬとの事であつたので、反對はしたが、強ひては言ふを得なかつた。九月以後も、自分は毎日君を誘うたが、君は病氣と稱して來ぬ、遂に「誘うてくれるな」との言葉を父母の口より聞いたの

びなきが如し。實に太陽の美は、我が國體の如く、我が國體の美は、太陽の如し。日章を以て國の旗號とせること亦宜なるかな、余はこれによりて、日を賞するなり。

夏期日記中の數節 第四學年 杉 義 夫

七月廿二日
「人の運」を讀む。思はず興に乗せられて、頁をくるうち、半は讀破し、然も少しの倦を感じぬのは、其の内容の充實を示して居る。但しこれは自分が本の廣告をするのではない、之で見ると運は天に在り、之が取捨は人に在り、との結論を得る。そうすると、人はやはり努力して、幸運を得ねばならぬ。幸運を得るには、必ず努力が必要である。努力は幸運を得る所以である。

七月廿四日
今日の出来事は通知書を取りに、學校まで御苦勞したといふことだけで、他には無い。
もう少しと思つて勉強した甲斐も、よどみに浮ぶうたかたの如く、あはれをとどめたよである。

七月廿五日
「天地有情」定價二十五錢を求めて歸る。
今朝はどういふ工合か目が早く覺めたので、床を脱けて稻田の間を散歩した。新堀川を渡れば向ふはすぐ稻田だが、佐世の橋か又は渡り口の橋までまはらねば行かれぬ。
非常に氣持がよい。川上の方と見ゆる山山の中腹以下は、皆清風にうつまれて眞白だ。

て、自分も誘う事だけはやめた。さうすると、間もなく、君は今の所へ轉居したので、其の後は遂に相見る機会も少くなつた。ところが、今年(多分だらうと思ふ)の一月の國華新聞紙上に、社員として君の名が小さく見えたので、其の後は今でも社に勤めて居る事と思つて居たのである。然し、聞けばそれも今はやめて居るとの事である。僕は之で分れた。夜は九時であつた。

八月五日
今年朝顔を東京から取りよせた、すると、中に六寸咲と銘打たれたものが四種あつた。
其の一つが今日初めて花を開いたのである。之だけは特別に手入れをしなければ、六寸咲は四寸咲も見られぬとの注意がよくしてあつたので、注意はしたが、六寸には咲かなかつた。然し他の花より大きい、而して色が非常によい。高尚な色、今まで見受けたことのない高尚な色である。

八月十五日
昨日の洋服がききめのあつたのか、祖父は少し心よい様になつた。自分は足の腫物の爲に歩行せられぬ様になつた。昨日までは隣り位までやつと歩いて行くことが出来たが、今日はそれすら出来ぬ。一度腫物の上を机の足の角で打つたときの如きは、自分は號泣した、實際號泣せざるを得なかつたのである。

妻から、河崎君が、講習に出んのを不思議に思つて尋ねて來て呉れた。
祖父は己の病氣を忘れて、自分の事を心配してくれられる。自分が足の腫物の爲に辛うじて這い歩くを見て、自分の事を心配してやらぬとて

母や姉を叱られる。

此時は眞から心に感銘した。

八月廿三日

昨夜あれ程有望であつた曇も、四五滴の雨を名残りに、とうとう降らなかつた。

午後四時、思ひ立つた様に村上君方へ行く。十六日以後、門外に出たのは今日が初めてだ。歸つたのは六時の少し前、母は小林の葬儀に行かれた。小林といへば、哲雄君も實に可愛想なことだ、母が盂蘭盆の焼香に行かれた時に逢はれたが、色は蒼く、やせて骨と皮ばかり、とても此の夏がこせまい」と歸つて話されたが、然しこんなに早くとは思はなかつた。

曇がひどくなつたので、母が傘を持って行かれなかつたのを心配したが、雨は歸られてから降り出したので、都合がよかつた。よい雨、よい雨のほひ、是で少しは土地もしめるであらう。

八月卅一日

昨日にひかへて、今朝はよく晴れた。高村君が、學校へ歸るといつて、御別れに來られたので、門まで見送る。夜の十二時の汽船では大田君が去る。

いよいよ今日も暮れた。是で四十餘日の休みも残す所僅に六時間となつたのである。

四十餘日の間、祖父死去の爲、混雑と悲愁との爲、五十日間も休んだ、残り三十七日は、毎日の如く書き續けた此の日記も後數行で終りとなる苦だ。

此の書き續けた數枚の文字に、筆の鈍き爲、自分の暑中休業中の生活

を得て猛然として殺到するや、多くは周章狼狽、忽ち名を退却に藉りて逃ぐるに依るものならむ。抑々武器の、敵のために略取せらるるは、戦士たるものの恥辱なり。以て歐軍士氣の一斑を察すべし。

最後に、吾人の感措く能はざるものは、即ち死傷數の莫大なる事とす。これ一に武器の精銳なるに由るものならずんばならず。人曰く「戰場は人類の屠場なり」と。これ一面の眞理なり。而して、こは、年々武器の改良せらるると共に、益々その感を深うするに至るや明なるところなり。されど、男子一度祖國の爲に干戈を執りて起せば、六尺の軀軀何ぞ夫れ惜む所あらむや。所謂身を鴻毛の輕きに比し、以て國家のために戦ふ。これ男子の最大面目と云はずして何ぞや。

螢に添へて友人に遺す 席上 同松浦梁作

拜啓、濃緑滴らんばかりの初夏の候と相成申候處、皆々様には益々御清福の御事と奉存候。愈々昨日より梅雨の季節に入り候へば、暫くの間は、細雨靡靡として降り、唯蛙鳴喧聒を聞くのみなる陰鬱生活を續くることかと坐ろに悲觀致し申候。先日よりの温かさに、已に螢も出てぬと聞き及び候ひしが、一昨夕、大河の堤防を遺透致し候處、未だ盛りとは申されず候へども、彼方此方の水邊草叢にては、愛らしき火玉團の中に飛びかひ、來るべき長蛇ヶ原の螢合戦に參加せん準備とは存せられ申候。其節、家苞にと取り歸りし螢數疋、本日好便有之候まゝ、御送り申上候間、御受納被下度候。こればかりは人口稠密なる都會の地よりは、水清く空氣澄みたる田舎の地の誇かと存じ申候。尙、眞盛とも相成候はば、御知らせ可申候間、長蛇ヶ原螢合戦見物に御光來り下度候。草々

の一端をも表すを得ざるを遺憾とする。殊に先生よりの宿題が三行日記であること、未だ一度も日記を書いた事の無い自分には、其の體を具へざることとの爲、興味める事も其の興味を失ひ、愉快なる事も不愉快となり、全體にわたりて、其の砂をかむが如くなりしは偏に御許しを願ふ。

時局に對する感想 席上 同 中村貞夫

埃國皇嗣フェルチナンド太公夫妻、一朝塞國に於て暗殺せらるゝや、突如埃塞は宣戦し、忽然として全歐の大戦亂と變じ、露獨佛相繼ぎて起る、英亦遂に之に投ずるや、對岸の火災視せし我邦も、同盟の義務として、獨と膠州灣に旗鼓相見あるに至れり。其漫衍の甚だ速かにして且事の大なるは、吾人の一驚を喚せざらむとするも得べからざるところなり。

吾人の、日々の新聞紙上に於て、讀むて最も憔悴に堪へざるは即ち兩軍共にその捕虜の甚だ多數なることなり。その第一戦に於て、佛軍の三萬、埃軍の七萬と云ふに至りては、實に言語に絶えたり。夫れ、捕虜たるや、我櫻花園男子の最も恥辱として思みたることを願ひ、捕虜として生りて全からむよりは、寧ろ玉となりて砕けむことを願ひ、捕虜として生れ恥を見むよりは、却りて城を枕に名譽の戦死を遂げむことを欲せり。素よりその國情を異にするを以て、一言にして蔽ふ可らざれども、その男子の屈辱たるや言を待たざるどころならずや。歐兵何ぞそれ卑怯なる。次に、吾人の感じたるは、大砲小銃其他武器彈藥の戦利品甚だ多きことなりとす。これ亦彼等意氣地なきを證して餘りあるにあらざや。彼等の戰場に出づるは、眞に祖國を念ふの情によるものなるか。敵軍一度利を

初夏の景 席上 第五學年 中山節郎

世の人、四季の中、春秋をこよなうほめて、他を多く言はざるいと心得ぬ事どもなり。新緑満目、希望にみちみちたる初夏の候、豈語るに足らずとせんや。足を郊外に運びて、初夏の景に接せんか、吾人青年の心をひくこと、春の花、秋の月に勝るものあるを見る。昨日の春の名残をみせて、遠山のはるかにかすむあり。そのもとより出づる一條の清流の、新緑に彩られたる野原を貫流し、涓々の音たて、岸の青葉をくゞり行く、けだし初夏の景を語るに充分なり、もしそれ、夕つかた、垣根の卯の花にうつる月影を眺めて、裏山に時鳥の忍管を聞かんか、その情趣の詩的に富むところ、吾人はより多くの感謝を以て自然に對せざる能はざるなり。吾人は、「目に青葉山時鳥初かつを」これを誦する毎に、春の趣ありて、その濃艶なく、秋の情ありて、その悲哀なく、希望にみちみてる初夏の景に對する賞讃を惜む能はざるなり。

戦死者の遺族に 席上 同片岡勝資

謹啓、前略御免下されたく候。承り候へば、御出征の御令息様、此の度、巫山占領の一大快舉にあたり、遂に、名譽の御戦死遊ばされ候由、驚き入り候。さぞかし、皆々様、御慰傷の御事と、推察致し候。さりながら、男子生を皇國に享け、一朝國家の干城として、敵國と干戈を交ふるにあたり、功なくして、命あらんよりは、死して功名を不朽に垂れんこそ、誠に、武士の武士たる所以に御座候へ。御令息様は、非凡の御技能もて、披鋒の功を御立てなされ、終に、名譽の御戦死遊ばされ候事情は、諸新聞筆をそろへて書き立て申し候。こは、軍人の最も、

名譽とする所、否、男子の名譽、何事か、これが右に出づるものこれあり候はん。今や、御最愛の御令息様を御失ひ遊ばされ、御涙の盡きぬ御事には御座候へども、かくの如き名譽の御職死、其の赫々たる御功名は、誰も皆羨み慕ふ所に御座候。且つ、また、皇國の榮えて盡きざるが如く、永久に、御令息様も靖國神社に祭られ、幾萬代も、畏きあたりの御禮拜を受けさせ給ふことは、人民として、如何に望み候ふとも、容易に出来申さざることに御座候へば、御悲歎はさることながら、其の邊、篤と御思考遊ばされ、御諦めの程、肝要かと存じ候。申すも疎に候へども、あまりに御心配の結果、御身體にもさはり候ふ様のことこれあり候時は、却つて後の御ためにも悪しかるべく、此の上は、只管、善從を御弔ひ遊ばさるゝ方、誠に然るべき御事かと存ぜられ候。

眞の友 題 常上

同村 岡 淺 一

友には、幼にして共に嬉戯する竹馬の友、稍長じて勉學相親しむ同窓の友、社會に立つに及びては、互に奮闘する同業の友等、その種類は多けれども、眞の友の種なるは甚だ悲しむべきことなり。財豊かなる時は、徒に交を求むる者はあれども、その財盡くるに及びては一たびも顧みず。あさましき至りなり。黄金の爲にせず、將勢力の爲にせず、表面上の交際を棄て、互にその心を知り、至誠以て相交る者こそ眞の友といふべけれ。故に、眞友は、たとひその友落魄するに至るとも、決して之を忘れず、その友情は、遠く關山を隔つとも、通ぜざるなし。眞友は只現存せる人のみに限られたる事なし。過去幾百年を隔つとも、よくその人を知ることを得ば、これ亦眞の友といふべし。楠公にもせよ、松陰

倒壊せりと傳ふ。數年前我村の小學校も新築に際して倒壊せし事あり。又某村にも、同様の災に遇ひぬ。新築校舎は、一度は倒壊の厄を免れざるなど思へり。床を脱け出で見れば、あはれ、我丹誠の茄子、玉蜀黍は、根こぎにせられ居たり。本年は、耕地整理をなせる故にてもあらんか、平年作以上なりと喜ばれ居たる一面の稲田も、將に黄金の穂波打たんとし、皆此の災に罹りぬ。實に傷ましき有様なり。出淤泥而不染、濯清澗而不妖、中通外直、不蔓不枝。と周茂叔の賞讃措く能はざりし蓮も、あはれ、無情の風に、其莖は皆半切の厄に遇へり。果然數日後の新開紙上には、各地被害の報頭頻たり。噫、滿帆に含ませて、遠く彼岸に航するを助くる風も、斯く人に恐怖の念を起さしめ、農作物を害して民を困め、船舶を覆して、貴重なる人命を海底の藻屑となす風も、些の異る所なし。唯其程度如何によりて、貴ばれ、喜ばれ、恨みられ、又恐れらるるのみ。

奈良紀行の一節 題 同 渡 邊 正 規

八月二十日、味爽浪速を立ちて、南都を訪れぬ。老杉に、藤波の紫に匂ふ春の趣もなく、樹々の梢紅に染む秋の寂さもなく、眞夏の春日野は、只、吹く風のみ薫る。彼方此方の日光雨の如く漏る緑の木蔭に、香高き草を茵に、神鹿の老も、若もいと長閑に打ち臥せり。短か夜の夢の名残などもや見つゝあるらむ。ふと頭を擧ぐれば、老杉の樹間より、三笠山の彼方に、眞白き雲の碧空を翔り行くも見ゆ。喧しき蝉の聲を聞き流しつゝ、木の下道を、春日神社へと辿る。路傍に、蒼色蒼然たる石燈籠、幾百基となく立ち並ぶ。社は朱塗の色も鮮に、杉の緑と相映じて、一人美觀を増す。昔ゆかしく

先生にもせよ、素行先生にもせよ、乃木大將にもせよ、眞にその心を知りて之を慕ふ者あらば、其人は古人に對する眞の友と謂ふべきなり。眞の友は容易に得べきものにあらず。人若し之を得ば、それは無二の幸福なり。刀折れ矢盡くるに至る迄奮闘力戦し、而も敗を取るに至りて、鬱々たる生涯を送る時、一知己あらんか、必ずや、その心情を附みて慰めん。遂に憂の内に死すとも、その奮闘は一知己に依つて始めて認められん事疑なし。悲の内幸なるかな。眞友の人生に必要なことそれ此の如し。嗚呼誰か我眞友たるものぞ。思うて此所に至れば、うたゝ寂寥の感なくんばあらず。

暴風雨の記 題 宿

同 藤 井 四 郎

昨日より吹き出せる風は、今朝夜明け方より益々烈しくなりて、晝前よりは、雨さへ加りぬ。都會と田舎とを問はず、かくなりては、宛然地獄の觀あり。然れども、雨の加りて、砂塵の上らざる方、幾分か優れるが如し。雨を含める東南の風は、戸障子の差別なく、何の遠慮もせず横ざまに降りかかれり。平素は、ただ優美なる花とのみ思ひ居たる庭前の蓮も、斯くの如き場合、ただ雨の音を増すのみにて、昨日の優美は今日の恨と變じぬ。病氣揚句の父は、何も知らず顔に、すやすや寝入り居たり。隣家は目と鼻との間なれど、障子を開きて眺むる事も出来ざれば、狭しと雖、廣き心地せらるる我家に、一人徒然として居るは、中中に物寂し。時折、烈風中の烈風、霹靂と唸を發して襲來すれば、家は呻を生じて震ふ。かくして夜通し打撃きたる大風雨も、翌朝になりて、稍をさまりぬ。未だ起きやらず、寢床の中に耳を澄せば、隣の男大聲にて、津和野小學校新築校舎

偲ばるゝ二月堂三月堂と、尙、春日野の奥深く分け行けば、路傍に、鹿角細工洋杖奈良人形繪葉書などの土産物賣る家多く、二名所繪葉書はいかがおやすくいたして置きやす。奈良人形はいかが「お休みやして おいきやす」など、京訛にて五月蠅く、旅客の一顧を惹かんとす。時正に午。東大寺の大覺は、今を盛りの日を受けて、羞明しく輝き居たり。それより、晝食を喫せんと、猿澤池畔の一旅館に投ず。欄に倚りて眺むれば、采女の衣掛柳も、連日の酷暑に堪へ兼ねてや、力なくも俯れたり。やがて日盛りの二時三時も過ぎて、蟬の鳴き初むる夕暮に、懐しき古都を辭しぬ。我この地を訪づること前後四度、春と云はず、秋と云はず、何時來りても、ゆかしき思するなり。急速として走り行く電車の窓より顧れば、嫩草山も、廣福寺の五重の塔も、薄紫の暮靄に包れぬ。金剛山も暮れぬ。生駒隧道を過ぐる時、四方已に暗し。大阪に歸りしは、午後八時とおぼしき頃なり。空に一帶銀河流れ、水の浪速に、夏の夜は頗しく更けぬ。



英文欄

OUR EXCURSION.

By Motojiro Nagamine, 3: B.

The time was so early in the morning that no crows in Mt. Shigetsu had left their nests. The place was the eastern side of the river of Nakatsue. Whence we third year boys started under two teachers for Mt. Goban-ga-dake at Kawakami to get the views in the mountain in autumn. Two or three boats that were running on the clear stream of the Abugawa and the white for that hung in the midst of the flame-colored foliage of the trees along the opposite side of the river, were bright against the blue colour of the sky and the stream.

Admiring them, as we walked some miles, the water of the river grew thin and the beautiful colour of the leaves was deepened. It is impossible to express the beauty of the view. We walked round many mountains until we arrived at the foot of Mt. Goban-ga-dake. An old farmer told us that it would be impossible to climb up to the top, but we, who had great stamina, turning deaf ears to his advice, started for the crest. That it was a difficult climb was indeed too true. At first there was a small steep road, but as we advanced farther, it was thickly covered by the bushes and we lost our way. Though it was very cold, our bodies soon got warm and

the sweat ran down our faces and dropped on the leaves of the bushes. The mountain grew steeper and steeper so that we became so tired and weak we could hardly stand. By helping each other, we climbed on several more miles and at last we came to a little plain, that was the crest of the mountain. How glad and happy we were when stood on the summit of Mt. Goban-ga-dake; All other mountains were to be seen far below and looked like the waves of a burning sea. In front, far away, the Japan Sea was spread out to our view, and on the right but nearer, the foaming water of the Ogi-otoshi-fall.

Looking at these beautiful views, we quite forgot the troubles experienced on the way thither. Never before had I been so happy. Since it was so cold on the crest we remained only an hour.

On the way down we took a new path, going in an opposite direction to the one we had taken on our way up. Fortunately there were no accidents on our downward trip. At the foot of the mountain we found ourselves in a dark, thick woods, through which ran a straight white road. As we were walking through the woods a fresh cool breeze brought us the delightful odor of mushrooms. We passed along this picturesque place, singing songs with vigorous voice utterly oblivious to our tired condition. It took us about an hour and a half to cross the woods. At length we came out in front of the Hitomaru shrine at Matsumoto-mura. Since it was just one o'clock in the afternoon, we finished our trip a good deal earlier than we had expected.

Then and there we dispersed and started for home, slowly dragging along our tired legs.
Oh! what dreams my class-mates must have had that night!

THE PIONEER OF AVIATION.

By Y. Nakamoto, 3: B.

One day on my way home from school I saw the flight of Captain Tokugawa in an aeroplane at Tokorozawa. I was much impressed to see how slow the development of the aviation has been in this country. Now, I will tell you an old story of an aviator in Japan.

About the era of Temmei, there lived in Okayama a man whose name was Kokichi. He was a paper-hanger.

One day catching a dove he closely studied the proportion of its wings and its weight and made two long wings himself, with a machine, and flew up into the air. However, as he could not make his flight from the ground, he started off from a roof.

One night while flying over the suburbs, he looked down and saw a crowd of people. When he approached the group to see and speak to his acquaintances, he fell down, for the wind had weakened suddenly. Then the men, moment, and children were terribly frightened and rushed away crying and screaming. It is said that the authorities, having heard of the matter, forced the daring aviator into exile.

Ah; Kokichi may well be termed the forefather of Japanese airmen. If the authorities had in those days, encouraged aviation as they do now, our country would surely have been by this time the foremost nation in the aviation world.

LEAVES FROM SUMMER VACATION DIARIES.

July 22. I went up the deck. The sea was dark, but soon a red ball was seen rising up on the horizon.

When the ship entered the harbour, mother and sister came to welcome me.—G. Yamamoto.

23. Awakened by a whistling of a train, I ran with K. to the station. Unfortunately we failed to catch the train. So we had wait two hours at Ogōri.—Nakamura.

23. Went to the Prefectural Office for business. I heard a doctor lecture on Chikazumi.—Kijima.

24. Before breakfast I reaped fresh grass for the cow. My coat got wet as I passed down a dewy path. —Kasui.

24. On my way from Yamaguchi I drank lemonade at a shop little thinking that I had lost my purse. I was puzzled greatly, but a kind woman lent me ten sen. All men are not devils!—Sakata.

24. Went to see some famous places at Shimomoseki. From Kameyama I saw a warship and some steamers at anchor.—Kaneta.

27. I do not know whether the prayers of the farmers for rain were granted or not, but the sky became cloudy towards evening.—Mito.

28. Remembering the ethical precepts of our principal, I helped mother with her house work. However as it began to rain I called on an old man next door.—Anno.

29. In the morning, went to worship at the ancestral tombs of our family. Coming home studied Geometry. —Mitsudō.

29. All our family pleasantly passed the evening in composing poems. Just then the moon was shining in the sky.—Uno.

29. At the East Park of Fukuoka, saw bronze statues of the Emperor Kameyama and Nichiren.—Ho.
30. As it was the anniversary of the decease of the Emperor Meiji, went to school. We worshipped the photograph. Then heard the Principal's eulogy of the late Mikado.—Sakurai.
30. Saw wrestlings of the Young men in the neighbourhood.—Nagata.
- Aug. 1. Went to Girl's High School to see the education exhibition. At night all of us went to Sumiyoshi, and from the outside, saw moving pictures. This plan being the most economical.—Tasaka.
3. I think Germany in very strong; for it is fighting with many Powers.—
3. Our Summer English Meeting began to-day. Mr. Tonno is teaching us a by Coum Dayle, and Mr. Shono, English Composition. Went to Kikugahama to swim.—Iida.
4. My brother-in-law loves a morning glory. This morning there were 37 flowers in all. They were various sizes and colours. It was indeed very pretty to see white, red, blue, and violet flowers, among green leaves of tendrils.
- While we were praising the beauty, we saw a speck of black cloud rising above the mountain. Soon a severe storm came on us, So we hurriedly brought the pots into the shade. What a refreshing scene it was!
- R. Matsura.
7. Went to the grave yard with mother. Went also to the beach to catch shell-fish.—Murakami.
7. Went to the river to wash the straw mats of silk worms. This took me three hours. Then I plucked mulberry leaves. Studied at night.—Kô.
8. A friend of mine invited me to dinner. I was served with shiruko, of which I drank many cups. Spent the night joyfully.—Jenpo.

11. The war cloud in Europe is becoming thicker and gloomier. Mr. Mizobe told us that reports of the newspapers are exaggerated; This he can say from his actual experiences at the front.—Fujii.
11. The south wind blew very hard. It blew sand and dirt to our eyes. It would be very bad for the rice fields.—
12. Received a letter from Mr. Ishizu saying that he went on board the Settsu and that she left Kure for Sasebo on the tenth.—Ikawa.
13. "Every boy of the Swimming Club must spring into the water from the high scaffold!" cried the teacher.—Kodawa.
13. Doctor advised me to undergo an operation on my nose. An old man who was in the next room talked with me.—Kôda.
13. We merchant are busy getting ready for the festival of Tanabata.—Fukutani.
15. Brother dined with some of his friends from noon till night. I was very busy.—D. Hayashi.
17. Commenced to solve the problems of the home task, but gave up very soon; this must be the punishment of my idleness.—Inoue.
18. We made our way along the Abu river and enjoyed the beautiful scenery along the banks. We came to Nabegafuchi, a deep pool, where a miraculous rock was towering up to the blue sky. On the crest of this rock were some shapely pines and it seemed to me cranes were dancing over them. The pool was surrounded by many trees of luxuriant foliage. This spot far from villages was indeed an ideal place for the cleansing of our soiled hearts.—M. Yoshida.
21. Borrowed a friend's phonograph and heard it. What a wonderful machine Edison has invented!—Shirane.

22. Physician told me, "You had better go to sea and dispel your gloom than to drink sour medicine." A wise counsel it was indeed!—Yamamoto.
22. Went out fishing in my little boat with my cousin. Caught many and returned home. Reading an interesting book, fell asleep.—Nakano.
23. Before sunset, I sowed seeds in my field. Bought seven gold-fish from a vendor.—Miura.
25. Went to the Elementary School, for I had received an invitation to present at an alumni meeting.
—M. Kunishige.
27. I suffered greatly with the tooth-ache. The tooth is decayed. I must pluck it out.—Kitajima.
29. I attended the lecture meeting of Kotobukiza. Six students of the Buddhist University of Tokyo made interesting speeches.—Matsumura.
29. Went as usual to the fields with a sickle in hand, and a hat on my head. It was so hot that it was hard to cut the grass.—O. Otouji.

LOVE OF NATIVE PLACE.

By H. Yokoyama, 5: B.

Young men! don't forget your native place. The high mountains, the long streams are your old friends, and among them, there is Hagi. The little cottages at the foot of the mountains, the small cabins by the riverside, or the pretty huts on the sea shores are your homes—the place in which you were born. When the snow, on the summit of the mountain, at upper parts of the rivers, begins to melt, all the plum-trees blossom and the birds fly, singing happily, from their old nests in the thick forests.

We can hear the songs come from the mouths of the maids, planting or hoeing. In autumn all the leaves of the trees are painted with various hues of red, brown and gold. When the grounds are covered with snow, we can see the smokes rising from the ovens, in which some of our brethren are burning charcoal. All things that may be seen or heard, are field with peace and pleasantness. How dare you try to flee from such places as that!

Though you seek for places, there are no places like your homes. Money is not everything in life, even though you may have gold enough to fill your stores. Don't say that the cities are beautiful. They are the places of battles for honor and gold, while their grandeur is nothing but the artillery of the devils belching forth their crimes.

Then, wanderers! don't forget your native places where your old dear friends are following the plow, where brothers and sisters are longing for their brother's return, and parents are sincerely praying for your safety. When you grow old and weak though you may have succeeded in the world, much more have you failed, unless you come for guidance and help to your homes to the knees of your parents, and to the companionship of your friends. No home places is so narrow that is can not take you in.

As we were permitted to go out till 10:30, we travelled very and rapidly around the city by electric cars.

A PAGE FROM MY DIARY.

By B. Nishibayashi, 5 : B.

October 21. Fine. At the breakfast I ate first new potatoes produced from my own farm this year. Those tasted very sweet to me. After that I went to school as usual.

To-day being the 12th anniversary of the death of me Grandfather I had a memorial service held at my house together with that of the 6th anniversary of the death of my father.

As soon as I came back from school my mother handed me a post card. It was from Mr. Kodama and was posted from Moji. It assured me that all my dear friends were safe. Though it was very short, I was greatly relieved when I read it.

By this time some relatives had come from the country to attend the service. I was thankful for their kindness. They were to spend the night with us.

I visited the family temple, Kōmiji, with them, offered some water, swept around the graves clearly, and knelt down before them. Towards evening my cousins came, and we all sat down at the meal of to-day's memorial service.

At night all assembled by twos and threes in one room where the ancestral tablets were placed. And then before the lights of the Buddhist shrine glimmering dimly and drearily, we mourned the departure of my grandfather and father. Sometimes we laughed after hearing some amusing stories. Thus we remained till late at night.

Till yesterday it was warm enough for us to wear only unlined clothes, but to-day genuine autumn weather set in...the wind suddenly shifting from the south to the west. Especially that night was very chilly, the wind died away and the loud roar of the waves was heard. A cricket was chirping with a lonely and sorrowful cry outside my study.

 THE MOST PLEASANT DAY IN OUR SCIENTIFIC EXCURSION.

1.

By S. Kodama, 5 : A.

The Educational excursion party left Hagi at about 7 : 30 p. m. on October the nineteenth on board the "Oki-maru". We entered the bay of Shimono-seki and Moji the following morning at about 5 : 30 a. m. and landing at Moji took a train for Kumamoto.

It was a little after 2 p. m. when we arrived at Kumamoto, where we met with a warm welcome from the people of our district. Being led by some old schoolmates, who are now the students of the Kumamoto High School and the Higher Technical School, we saw the sights of the city. First we saw the above mentioned schools; and in the Higher Technical School, we were permitted to inspect the specimen-rooms, apparatus rooms and a work-room, where we saw and heard many useful things. Then we went to the famous "Suizenji" park, where we enjoyed the fine view. The water of the pond there was exceedingly clear, though the water of the city is said to be not so clear. The refreshing, picturesque scenery of the park is beyond description.

After a while we left for Honmyōji Temple by a light railway train. Alighting at Kinouchi-mae, we continued on foot and reached our destination at dusk. The temple is noted in that it is the family cemetery of

Lord Kato Kiyomasa, who was a wise and righteous man who served Taiko Hideyoshi. On our way to the temple we saw some troops holding military maneuvers, the castle built by Kiyomasa, and the local military preparatory school, where an intimate friend of mine is studying.

We returned to our hotel very late. In the night those who had welcomed us before and some others held a tea party for us, and, after many useful speeches about the two schools, we passed on to the entertainments. The land lord and some other persons ran in kind of play that interested us very much. As it was very funny, all of us could not help splitting our sides with laughter. We went to bed at about 12 that night, and were forced to get up the following morning at 4 a. m. We bade the city farewell, and started for Omida by train. Our seniors and former school mates came to the station to bid us adieu.

We must thank them fervently for their complete and kind entertainment. While with them we wanted nothing. But I wanted only one thing. To my great disappointment, I was unable to have an interview with the intimated friend of mine. To see him had been my long expected desire. In spite of this, however, the day was to me the most interesting one of our journey.

2.

By K. Tagita, 5 : B.

On the night of the nineteenth of October, our party consisting of three teachers and nearly sixty students, started on board the "Oki-maru" for Shinonoseki. I felt very happy, because it was my first journey by sea. Our steamer proceeded towards Tsunoshima, where is a light house. By that time the wind was blowing hard and the waves were very high. However, after a ten hours' sail we found ourselves at Shinonoseki. Here crossing the Strait of the name-sake we landed at Moji and took a train for Kumamoto. Our party arrived at

the station of Kumamoto in the afternoon. We saw Mr. M. Kawasaki and Mr. I. Miwa. They had graduated from our school with the highest honours. Then we went to the Fifth Higher School and the Higher Technical School, where we saw various machines. Then we went to Suizenji park, which is one of the famous parks in Kyūshū. After visiting other places by tram car, we put up for the night at Kumamoto.

3.

By H. Tanaka, 5 : B.

Oct. 21, Wednesday. Got up at 4 a. m. Before anything else I looked out at the sky, and the twinkling stars seemed almost ready of fall in a shower.

We left Uenoya hotel at Kumamoto City, at 5 : 30, and marched to the Station. We started for Omida by the 6 : 13 train, and arrived at that station promptly at 11. Thence immediately we marched down to the town to see the harbour and then the Milke Coal Mine, where we saw the largest Davy pump in the world. Again we returned to the station and several graduates of our school gave us many cakes.

At 1 : 30 p. m., we again started on our way, admiring the picturesque scenery of the Ariake sea. After passing through Watase, Yabegawa, Kurume, and many other places, we arrived at Hatsukaichi, where we again made a stop. Since we were too late to catch the train for Dazaifu, we hastened at full speed to that place on foot. When we saw the Dazaifu shrine we were greatly surprised at its indescribable magnificence. We returned to Hatsukaichi by train and immediately started for Fukuoka, with the afternoon sun shining full on our backs. On arriving at our destination, we were led by Mr. Marumoto and Mr. Egashira to the "Second Takashimaya", a hotel conveniently near the station. Both our kind conductors were formerly teachers in our school. A hot bath cured us of fatigue and we sat down for dinner. The waitresses were overwhelmed and

flustered by the filling of our bowls which we quickly and repeatedly emptied.

A LITTLE RIDING TRIP.

By S. Shibata, 5: A.

On the 24th of October, I with two friends made a little trip by bicycle.

In accordance with their promise on the day before, they came in the morning to my house. At a half

past 9 we started from my house, with the intention of going as far as Ōi via Obata and Koshigahama.

At Obata, we tried to take a photograph of a ship sailing back from the offing. But hardly we had occupied a suitable place and taken out a camera, when the ship disappeared behind Kitsume Island. We were much disappointed.

Then, taking our bicycles again, we went on. When we came to Umanokura, near Koshigahama, the missed ship appeared. It was indeed fine sight! The white-winged vessel skimming lightly over the smooth

sea, the silvery waves flashing in the sunlight, and the dark tinted mountains in the background!

We jumped down from our bicycles, and opening the camera, quickly photographed the scene. Then we mounted again and rode on.

Soon we came to the slope of Ōtō, down which our bicycles rolled so swiftly that we felt as if we were on an automobile.

We rested a little while in a tea-house, which was built so near the sea coast that the waves beat against the stone-wall of that structure. After drinking some tea and eating some *mochi* there, we went to Ōi.

At Ōi, we climbed up Mt. Takakura. On the summit, there was a shrine, and from there we could see a fine panorama.

According to our former plan, we were to return back from Ōi. But because the seascapes were very fine and none of us were willing to go home, we changed our minds and determined to go as far as Nago.

About noon we arrived at Nago. It was also a good place. The streets were clean, the sea was clear, the islands off the coast were fine and some fishermen were catching fish.

We went down to the shore, sat upon the white sand, opened our lunch, and ate it heartily.

On finishing, one friend began to sketch, while I with the other walked along the shore and took two or three photographs.

We stayed at Nago till two o'clock, visiting the shrine dedicated to Kankō and the primary school. But soon the sky became darker and it seemed to be going to rain. So we again mounted our wheels and started to hurry home lest we should get wet. Though we rode quite speedily, we were at last overtaken by the rain.

We separated at Ganjima and I reached home at about 5 p. m., the rain having by that time stopped. Indeed, though we got wet on the way home, we were very happy, because we had seen many fine sights and had enjoyed our ride. That night, I developed the plates on which I had taken photographs. I am glad to say that most of them were quite good.

YOSHIDA SHOIN'S SEVEN RULES FOR WARRIORS.

Translated by S. Shono.

When we open books, forests of highly instructive words vividly confront us. However, some people pay no attention to them; even though they do, they neglect to put these precepts into practice.

The full meaning of these teaching is, indeed, so profound and immeasurable that even thousands of years would not be sufficient for us to follow them. It is true that any more addition to the list seems unnecessary, but human nature cannot restrain the outflow of our inward sincerity. I, therefore, betook myself, as our ancestors have done in ages past, to the composing of maxims. These rules of which there are seven, should be observed by warriors.

In the first place; Human beings ought to be aware of the impassable gulf which lies between them and other creatures. Indeed, we possess five everlasting principles of morality, of which loyalty and filial piety are of the fundamental importance. The unerring observance of the said virtues will alone qualify us to be men worthy of the name.

In the second place; The subject of Japan ought to know the high position which their fatherland has taken in the world. Ever since the time of the founding of the Empire, rulers have been of a single line. Loyalty has been the unchanging trait of both the civil and military retainers who supported the Imperial sovereigns. Our rulers have from generation to generation inherited the great deeds of their forefathers, and have made the welfare and prosperity of the nation the sole principle of their administration.

The people, also, unswerving in allegiance, have not failed in the realization of their ancestors' will. Thus

this harmonious union of loyalty and filial piety has drawn together both rulers and subjects with the closest ties, and has resulted in the glorification of the Empire.

In the third place; Justice which is the greatest virtue of the warrior depend entirely upon courage; the latter, however, would never be advanced were it not aided by the former.

In the fourth place; Let veracity and simplicity be the guidance of your action; any attempt to make excuses for your own faults is despicable. Truly, greatness and righteousness spring from this.

In the fifth place; He, whose knowledge does not extend to things ancient and modern, or who has no desire to follow in the footprints of sages, is to be pitied. It must be the aim of a man of honor to cultivate his morals by reading.

In the sixth place; The development of virtues as well as the sharpening of talents we chiefly owe either to the assistance of tutors or the influence of friends. We cannot, therefore, be too careful in the selection of our associates.

In the seventh place; "Death alone stops efforts," is a saying concise in diction but profound in meaning. Without a firm will, such qualifications as long suffering, invincible determination and immovable adherence to the truth shall never be fostered.

These seven principles may be conveniently summed up in the following three. Firstly, all our conduct must be based on a solid determination to exert ourselves for the cause of righteousness; Secondly, we must by the wise election of friends up lift and elevate humanity; Thirdly, we must constantly seek moral instructions by reading books. The above rules are, indeed, the foundation stones for the full development of our personalities. (The end.)

講壇

山根正次氏演説の要旨

柴田省三 筆記

諸君、私は山根正次であります。一昨夜、父の法事を營む爲に歸萩したのでありますが、校長の御案内を受けて、本日此式に列する様になりました。諸君は本日を以て本校を卒業せられますが、之も諸君平素の御研鑽の結果で、誠に結構な次第であります。就いては、私は故乃木將軍の逸事の一二を御話して、本日の祝辭に代へ、聊か諸君が將來の修養に資したいと思ひます。

私は明治十年、新聞紙上で將軍の性格を知つて、いつか御目にかゝりたいと思つて居ました。所が、私が明治十五年に大學校を卒業し、同二十年に歐洲に行きました時に、伯林で初めて將軍に見えるの榮を得まして、其から益々將軍の偉大なる人格を慕ふ様になりました。

大將は諸君も熟知せらるゝ様に、非常に、禮儀が厚かつたのです。長屋又助氏の話に依りますと、將軍は十八歳頃明倫館に居られましたが、當時、將軍は毎朝必ず早起して體を清め袴をつけ、東の方へ向つて禮をせられ、それから舎長の許に行つて、端坐して朝の挨拶をせられたといふことです。所が、今の書生を見ますと、一般に甚だ禮が薄い様に思ひます。禮のない傲慢不遜な人は決して偉人といふ事は出来ません。

將軍が日露戦争から凱旋せられた時、私は之を赤坂の邸に訪問しましたが、其時、私に一通の書を見せられました。其手紙には「生還した軍人は、之を種々の方法で歓迎するが、戦死者に對して敬意を表するものは誠に少い。それで、青山に於て、其等の人々の祭典を行ふから、將軍も賛成して下さい」と云ふ意味の事が書いてあつた。私は鳥渡見て成程尤なことぢやと思つて居ました。すると、將軍は「日本人はこれだから困る。戦死者は今靖國神社に祀られて居て、長くも萬乗の君の拜を賜はるではないか、其に敬意を表する人の少いと云ふは何といふことであるか。軍人となつて、一死以つて國に盡したればこそ、陛下の拜をも賜はるのではないか」といはれました。將軍の忠烈な心が想ひやられます。

將軍は又極めて廉潔な方でありました。陛下の御下賜金も多かつたが、其等は皆貯へられたことはなくして、其金で、吉田松陰先生の遺墨等を刷つて知人に頒布したり、軍人遺族にめぐんだりせられました。二令息戦死の當時、當然受けられる筈の恩給さへ、「私は上からいつも多くの金を貰ふ、兒が死んだからとて、別に金を貰ふ筈はない」といつて、請求せられなかつたといふこととあります。大抵の人なら、陛下から下げて貰ふのであるから喜んで御受をするが、將軍は獨りさうでなかつた。當今の人は、多く金錢の奴隷となつて居て、中には、全く廉恥心のない人も有ります。彼等は此話を聞いたなら慚死すべき筈のものであります。

瀧口吉良君は、嘗て、馬關に伊藤公爵を迎へに行かれた時、船が難破したので、他の人は皆逃仕度に周章狼狽の體であつたが、瀧口君のみは、伊藤公の身に怪我あらせじと、公を抱いて居たといふ様な人格の高い人であり、又、私の友人で、歐洲にも共に行ったことがありますが、其瀧口君が、乃木將軍の家へ、日露の役の戦利品と大將の寫眞とを貰ひに行かれました處が、其時、大將は「希典の家には公の物たるべき戦利品のあらう筈はない。

又、此鬚寫眞を貫はなくとも、死なれた偉い人のがいくらもある」といはれたので、面目を失つて歸つて来たところがあると曾て自ら語られた事があります。彼の役に出征した軍人は、大抵戦利品の二つや三つは持つて居るのに、將軍のみは決してそんな物は持たれなかつた。之に依つても、將軍がいかに公私の別を明にして居られたかがわかります。

毛利妙香院様の御通夜の晩に、毛利公爵家の家令中村君が、斯ういふ事を話されたことがある。私が、毛利公の使として、絹地二枚を持つて、將軍の所へ書を請ひに行つた事がある。其時、將軍は「字を書く人を見る様な所に掛けられるから困る。まして、毛利公からの御頼となつては、私の様なものが書く譯にはいかない。君が書いて呉れと云ふのなら書いてもよい」と云はれた。其所で、私は、「それでは、私に書いて下さい」といつたら、將軍は「其絹は君のか」といはれたので、自分は赤面して歸つた」と話されました。

又、大將凱旋の時、相國寺の僧獨山禪師が、丁度將軍と同車して居て、將軍の爲に車中で讀經した。其時將軍は、讀經が終る迄最敬禮をして居られた。別れる時、大將は扇子に詩を書いて師に贈られた。禪師は非常に喜んで、常に之を持つて居られましたが、或日、汽車中で、横濱の金持が之を見て、禪師に、千圓で其扇子を譲つて下さいと頼んだ。所が、師は非常に怒つて、「俗物奴、汝等の持つべきものではない」と云ひながら、扇子を以つて、其頭をボンボンと打つたといふ話があります。

將軍は、常に「人を導くには言葉を以てしてはならぬ、必ず行を以つてせねばいけぬ」と云つて居られました。其言の如く、將軍は、常に自ら行を以て人を指導せられましたので、人々がよくなつたのであります。

又、將軍は、「人間は、錦で包んだ馬糞の様ではいけぬ、褌に包める玉の如くなくてはならぬ」といはれた。將軍は斯様な性格の人でありました。

乃木將軍の話は之てやめます。私は、先月二十五日、小田原で山縣公爵に御目にかゝつて松陰先生の事等を尋ねました。其時、公爵は、「近頃は先生の事等尋ねる人は尠いに、よく尋ねて下さつた。實は、私は初から先生の門人ではなかつた。自分が先生に師事したのはずつと後の事だ。安政三年、十七の頃、京都に上つた其時、伊藤利助山縣二介安樂杉山伊藤傳之助岡の都合六人と同道した。其中、自分が一人先生の門下ではなかつた。京都に著くと、自分より年少の久坂義助が試験を行つた。其時、自分の「體を健にして膽を鍊る」といふ答が氣に入つて、久坂に紹介せられて、歸萩して、松陰門下となつた。當時先生門下の人々は、何事もよく出来て、自分は皆の者に劣つて居た。中にも、杉山は勉強せんでもよく出来た。自分はとても及ばぬと思つた。十七から十九迄、槍術稽古をして居た。武術を鍊るために、五ヶ年程修業に出やうとしたけれども、親類が許さなかつた。其内に維新の騒動が起つて、遂にこんなものになつたと話された。

其當時の人々は皆若くして志士であつた。其頃の山口縣の青年の意志は實に旺なるもので、今の人の模範とすべき事が多かつた。然るに、今の青年は、兎角名利に赴いて、昔の偉人のことを忘れて居るものが多いが、こんなことではいけん。諸君は今後大に社會の激浪と闘はねばならん。私は自分の立場から諸君に注意する事がある。即ち山縣公が云はれた、「體を健にし膽を鍊る」といふ事でありませぬ。今の人は、農を嫌ひ、工を厭ひ、發達せる機械の力に依つて心身を用ひぬから、自然と體が弱くなつて、病人ばかり多くなり、爲に多額の費用がかゝりませぬ。人と議論をしても、負けたら毆る位の元氣がなくては駄目だ。折角大學を卒業しても、國家救済の大氣焰を

吐くばかりに血を吐く様では何にもならぬ。何をすることも體が第一であります。乃木將軍があんなに偉くなられたのも、幼時、嚴父や玉木翁が將軍の體育につとめられたからであります。

將軍は演習等の時は一度も缺かれた事はありません。英國大使が將軍の事を本國に知らせた電報に依つて見ても、英人が如何に將軍の人格を慕つたか、わかります。實に將軍は我等同胞の範たるのみならず、人類の龜鑑であります。

此のつまらぬ話が、少しでも諸君の爲になれば、私は非常に満足であります。此に掲げたのは將軍の遺墨の一つですが、將軍の筆蹟の中でも特に優れたものです。式後、諸君の御覽を願ひます。終に臨んで諸君の益々健全に勉學せられんことを望みます。

村上校長東京より歸校後の演説(六月)

下生筆記

ワタシは先般上京して、しばらく留守をあけた。上京中に昭憲皇太后御大葬儀を拜觀したが、重ね重ねの皇室の御不幸には實に恐懼に堪へない。又滞在中に大正博覽會を見物した。總體より言へば、成功ともいへないが、しかし各縣出陳の製造品を覽るに、如何にも平生苦心の迹が顯はれて縦覽人の注目を引くものと、又ちつとも進歩の認むべきものなく、餘所ながら氣の毒に感じたものがあつた。

本縣の出品などは多くは後者に屬する方で、他の縦覽人に對しては聊か赤面せざるを得なかつた。之につけて

も忘れてならぬ事は、世の中は不斷の競争場であり、不斷の試験場であるといふ事である。世の中は始より終まで劇しき競争と苦しき試験とを続けねばならぬ。現に今回の博覽會は試験場て、出品は其の答案である。毎日幾萬の人々之を縦覽し、安價にして品質の善き者は、諸方の人々がドン／＼注文して歸ると云ふ有様である。之に依つて考ふるに、こんな試験は人世到る處に行はれて、優者が次第に發展するに反して、劣者は一生落後者とならねばならぬのである。此う考へて見ると、一刻も油断をしてはならぬ、ボンヤリして居てはならぬ。ドウシテモ此試験を優等の成績を以て通過することを謀らねばならぬ。今學生の身の上について云つて見れば、學生は毎學期に試験を受けねばならぬ。そして此試験に好成绩を收むる様でなくてはいかん。「試験は當にならぬ、時によつて幸不幸があるものだ」などと高を括るのもいけないが、胡魔化して之を通過しやうなどと考ふるは尙更いかん。人間の一生が前述べた様に眞劍の試験場である以上は、諸子は學校に於いて試験をよくやる事の練習を爲ねばならぬ。「實際の學力がありさへすれば試験はドウデモよい」と云ふ様な考は間違つて居ると思ふ。そんな言ひ事は、兎角實力のないもの、遁辭である。實力があれば試験の成績の良くない筈がない。試験の成績の良いと云ふのは、平生教はつた事をよく纏めよく整理して之を頭に納めて居る能力の有るもので始めて出来るので、秩序的頭腦を持つたものでなければ中々出来る事でない。人世の試験を好成绩で通過するには、學校に在る間によく練習して置かねばならぬ。即ち學問を勉強して、僅な時間に纏つた答案を作る事の出来る伎倆を養つて置く事が肝要である筈へば、諸子が將來官吏になるとしても、始から長官になれんと云ふ事は極り切つて居る。是非屬僚から段々と經上らねばならぬのである。屬僚となると、長官から色々な事の取調べを命ぜられる。それには決して長き時間を費す事を許されんから、短時日の間に纏つた報告をする事が出来ねばならぬ。此伎倆が長官の信任を得る資

本であり、又段々上位に昇進する資格である。「やることはやるが、ゆつくり取調べていなければ出来ん」と云ふ様な事では間に合はん。短時日に精密な報告をすることの出来る練習は、學校に於ける試験が即ち其であると思ふ。長き間學習せる智識を纏めて教師に示すのは試験である。單に生徒の學力の如何を見る事のみを以つて試験の目的と考ふるならば、それは更に他に其以上に肝要なる事即ち一學期間學習せる智識を纏めて之を教師に示すの伎倆を見ると云ふ事を忘却したものであると云はねばならん。此の大事な目的のある事を忘れずして、十分に其の伎倆を養ふ事に心掛けねばならん。學校で試験の下手な様なものは社會に立ちても仕事は出来ん、長官の信任は得られん。此處をよく考へて、平生學習した所の事をよく纏めて、整頓して腦裡に收めて置かねばいかん。平生取亂して置いて、すは試験と云ふから遽にぐんぐん勉強すると云ふ様な事ではいかん。其は丁度囊の中に品物をゴツチャに入れて置く様なもので、すは入用と云ふ時には何も彼もみんな其處に振ひ出さねば思ふ物は得られないと云ふ様なものである。諸子は萩圖書館の書庫の書物を観るがよい。現在の冊数が三萬ある。若し之がごつちやに押込んであつたなら、一冊の書物を出すにも、二時間三時間で逆も捜し當てられるものでない。部門を分け番號を打ちなどして色々整頓の方法が立て、あるからこそ、おいそれと入用の書物が直様出して來られるのである。其と同様に、諸子が學得した智識も頭の内に秩序正しく收めてあれば、試験の際に直ぐ取出されるから短時間に立派な答案が書ける。此心得て平生から勉強して置けば、試験の際にどんな問題に出遇うても詰度立派な答案が出来る。世の中に出ては、汚い答案は人が見て呉れん。例へば、諸種の高等の學校の入學試験に、千人二千人と云ふ多人數の答案を調べる試験官は、きたない答案をば目を通して飛ばして仕舞ふ。其てはよしんば學力は有つたにしても不合格である。されば、試験は社會の劇烈な競争に打勝つ準備であるから、決してどうでも

よいなどと考へてはならん。しかし、試験をよく遣らうと云ふ爲に卑劣な手段を行ふ様な事があつては其こそ大間違である。たとひ學校の試験はそれで通ることが有るとしても、社會の試験は極めて嚴正であるからズルイ手段で通るものでは決してない。試験の準備は順序正しく眞面目に勉強するに在る。それで出來た答案は詰度立派なもので、その學生は優等の地位を得るのである。社會に在つてもその通りで、立派な報告を作り得る様な者が拔擢せられるのである。近頃學生の元氣が萎靡して勉強といふ事を忘れて居る者が多い様に見えるのは残念な事である。青年たる者は希望に満ちて居らねばならぬ。將來は必ず國家に貢獻する所ある者とならねばならぬ。其氣が偲えては勉強は出來ぬ。勉強せんでぶらつくから酒を飲む、饅頭を借倒す等の事が起る。つまり青年に燃ゆるが如き元氣がないからである。是てはいかん。未來に大希望を有するならば、一時間でも惜しくなくてはならぬ筈である。此地の青年は此地の歴史に對しても元氣を振作せねばならぬ。維新當時の青年は皆元氣が燃えて居た。それだから能く維新の大業を翼賛する事が出來た。今日の青年はどうであるか。當時の先輩に對して恥しくはないか。一日片時も希望がなくてはならぬ。馬車馬的に脇目も振らず突進せねばいかぬ。後年の野村子爵即ち當年の野村和作氏は十六七歳から國事に奔走せられた。其は其頃から既に志が確立して居たからだ。饅頭を食ひ食ひ歩く書生ではなかつた。餘分にもない家財を賣拂つて國事に奔走せられた。「酬國精忠十八歳。毀家貧士二十金」と云ふ詩は松陰先生がその時の實狀を述べて野村氏を稱賛せられたのである。家財を賣拂つて國家に盡した青年と饅頭を食倒す青年と其差はどうであるか。既往は尤めず、將來は深く戒めねばならぬ。獨立獨行競争劇甚なる社會に於て一步も他人に後れぬ様今から覺悟する事が肝腎である。博覽會で見た本縣の出品は實に哀な者であつた。人の目を引く様な物は一つもなく、確に落後者であり試験の落第者であつた。今日までは澤山の人才を出したか

ら、殖産興業の方には後れて居ても多少は言譯が立つが、今後はどうだ。殖産興業の方はあの通り、それに人物も一向出ないと云ふ様な事になりはすまいか。もしさうどもあつたら世間に對する面目はないのである。今日の青年たる者は此邊の事を考へて、諸先輩の跡を受継がうと云ふ大志を有せねばならぬ。志が大きくなるとは何事も出来る者でない。「中學を卒業すれば其てよい」位の考では何にもならぬ。曾て話した事があるから上級の人は知つて居る筈であるが、元就公が幼時嚴島に參詣せられて歸つてから、從者等に何事を祈つたかと問はれた處、
「一人が對へて「若様が安藝の國主となられん事を祈りました」と云ふたら、元就公が「願ふ所は大きくとも成就する所は小さいものである。なぜ我が天下の主となる様に祈らなんだか。安藝一國の主となるを願ふ様では成就する所は知れたものだ」と云はれたと云ふ話があるが、かゝる大志ありてこそ十州の太守とはなられたのである。今日の學生でも志は大きくなければいかぬ。其志が大きければ従つて大勉強も出来る、大成就をする事も出来る。今度の試験に及第する事が出来ればよいと云ふ様な事ではいかん。そんな小さい魂性だがら色々のつまらん事をする様になる。維新大業の策源地とも云はれた防長二州の青年が、五十年立たぬ今日志氣萎靡して振はんと云つては先輩諸氏に對して云譯はない。馬車馬的に脇目も振らず突進せねばならん。此話は平生の訓示と同様に思つて貰つてはならん。眞に深く感ずる所あつて話したのである事を承知して貰ひたい。

赤星知事訓話

横 山 繁 介 筆記

私は、此度本縣縣治に命を受けたものであります。永らく御地へ參りたい希望を持つてゐましたが、不幸にして果すことが出来ず、遺憾に思ひましたが、此度端無くも此萩の地を訪うを得、且つ國家の中堅たるべき五百の健兒諸君と一堂に會するを得たるは大に光榮とする所であります。此地は山陽の雄藩毛利氏の居城の地で、毛利氏は、祖先以來文武兩道を奨勵せられし家柄で、遠大なる目的を以つて、明倫館で忠君愛國主義の教育を施されたのである。諸君の父兄達は大概此所で教育を受けられたのでありませう。此久しき以前より文武の教育の隆盛なりし萩の地に生れられたる諸君が、忠君愛國の精神に富んで居られるのは疑なく、又校長以下諸教員に依つても常に此道の教育を受けて居らるる故、何等私か贅する必要はない。併し諸君は今や青年期の人人である。此青年時代は身神の發達最も旺盛にして、種々な變化を來す過度時代で、最も大切な且つ最も危険な時代である。沈思默考すれば、一廉の役に立つべき人が、此處で一步を誤ると、一生を平凡に終る様な事になる。諸君は今や血氣旺盛にして、理性の未だ充分發達せぬ時である。平生忠君愛國的教育を受けて居られるから、何等注意の必要もない様であるが、併し青年時代は人生に二度とない誠實に有價値に暮らさざるべからざる時代であるから、敢て一言するのであつて、そは強ち諸君の爲にのみ望むのみに非ずして、實に國家の爲に祈る所である。維新以前には、一朝風雲に乗じて大榮達を遂げる事も出来、血氣の青年時代から既に社會國家問題を論じたが、今日では社會の秩序が整頓して、維新の如くはいかない。故に今では沈思默考して行ふべきである。私は何等教育の経験もないが、經驗ある諸員と謀り、大に教育の爲に盡さんとする微衷を存するのであります。私が出京する毎に何時でも、在京の諸先輩が「防長現時の教育を維新前と比較し、統計を取つて、他縣と比較して見ると大に劣つてゐる。殊に中等教育に於て然らうだ」と非常に心配して語られるので、私も其意を諒し、嘗て人材簇出せし防長二州

から、今後も有爲な青年を出さんと努めてゐるのである。當地は熱烈にして感化力大なる吉田松蔭先生の生地である。先生は纔に數年にして、許多の青年を立派に教育された。東京に居た時、市ヶ谷の先生の祀つてある神社に參拜し、肥後の學生を代表し、銀杏の樹を植ゑ、英風を欽慕し微衷を致すといふ石碑を建てた事がある。その先生の生地なる萩に在る諸君は、教育當局者及び先輩の衷情を汲み、熱心に勉學して有爲の青年と爲られんとを希望します。本日、寄宿舎で、舍生諸君と午餐を共にし、又大きなお萩を二つ御馳走になり、非常に満腹したので、多少考へて居た事もあつたが忘れてしまつた。兎に角、諸君が將來有爲の青年たられん事を單に希望する次第でありませぬ。

三國同盟と二國協商

西川敬
論議演

松原 繁二 筆記

本題に入る前に、便宜上、先づ獨逸帝國の歴史及び其元勳たる鐵血宰相ビスマルク公に就き略述致します。今の獨逸は、明治四年に建設された聯邦組織の國で、其以前は、諸侯割據の甚だ不統一な國で、其上に廣大なる御料地、千年以來の古い歴史を有する皇帝が君臨してゐたといへ、唯虚器を擁するに過ぎなかつた。我國で云へば、丁度、幕末に、徳川の下に毛利島津等の諸侯が、各地に蟠居してゐたやうなものであつた。其諸侯の中で勢力ある者が、從來の皇帝を壓迫し、終に皇帝となつた。是即ち其當時のプロシヤ王で、現今のカイゼル家である。從來の皇帝は、プロシヤ王の壓迫に堪へかね、獨逸聯邦を脱して、別に獨立國を作つた。オーストリア即ち之である。かくして今の獨逸帝國は建設された。この建國の大業に大功のあつたのは、レオポルド・フォン・ビスマルク

公であつた。公は、初には普國の宰相で、後には獨國の宰相となつた人である。我明治維新の際、木戸大久保西郷諸公が、大政維新の大業を行ふには、先づ幕府を倒さざるべからずといつたやうに、公は、獨逸帝國建設の爲には、先づ地地利を撃破し、之を倒さざるべからずと決したのである。故に、大に軍備を嚴にし、慶應二年、奥國の不備に乘じ、僅に七週間の戦を以つて、奥軍を破り、千年の威信を、一戦の下に失墜せしめた。諸將は勝に乗じ、ウィーンに進み、城下の盟をなさしめんと逸つたが、遠望ある公は、更に佛國と戦ひ、攘夷を行ふ必要あるを認めしたが故に、身命を賭して諸將を壓へ、奥國に絶大の恥辱を與ふることを爲さしめなかつた。之が爲に、明治四年、普佛戦争の始るや、奥國は、舊怨を忘れ、來り助けたのである。獨軍は巴里を包圍すること數月、容易に之を陥れ、佛宮殿内に於て、獨逸建國式を舉行した。

本題の三國同盟は、公の巧妙なる戦後策を示すものである。即ちビスマルク公は、西は佛蘭西の復讐を避け、東は露の侵入に備へんが爲め、獨逸伊三國を合縱せむとする計畫を立て、只管其機會を待つてゐた。ところへ、幸に、明治九年、露土戦争が突發した。即ちビスマルクは進んで居中調停に力め、媾和會議を伯林に開きたる職權を利用して、着着三國同盟の計畫を進捗せしめた。即ち、一方奥國の垂涎してやまなかつたヘルチェゴビナ・ボスニア二州を土耳其よりさきて、奥の保護國として、舊怨を忘れしめ、他方佛國に對しては、チニスの侵略を默許して、眼を其方に移さしめて、アルサス・ローレンを獨に奪はれし舊怨を想起する邊なからしむると共に、伊太利は久しくチニスを渴望して止まなかつた故、必ずや伊佛間に葛藤を生じ、伊太利の獨逸に依頼することのあるべきを豫期したのである。果せる哉、伊太利は、其後、佛國がチニス占領を實行するや、援を求めて、獨逸と同盟を約し、明治十六年、終に獨逸伊間の三國同盟は此公の計畫通り成立した。佛國に對するに伊太利あり、露國に

對するに塊國ありて、獨逸は一意戦後の内政整理に力むることが出来た。ビスマルクは尙之に安んぜず、或は英佛を海外に於て戦はしめ、或は自ら率先してアフリカ分割を謀り、只管列強の眼を歐洲以外に轉せしめんとした。彼は領土擴張主義ではない、海外に領土を得やうとしたのではない。只徒に空騒ぎして、一途に佛の復讐戦を避けた。即ち歐洲の平和維持といふ「ヨーロッパ政策」を執つたのである。然るに、現今のカイゼル、ウイヘルヘルム二世の即位するや、「余には宰相不用なり。我自ら國政を執らん」と謂つて、宇内統一の世界政策を執り、爲にビスマルクは隱退した。是が歐洲列國間同盟關係に變調を來した所以で、又、三國協商の起る原因であつた。獨逸の世界政策は明治二十二年に、此公の退隱と共に始つたが、英國は既に三百年以前より世界政策を執つて居た。我國は新舊大陸の中間に位して、地の利を占め、世界政策をとるに最も好都合である。明治二十三年の國會開設を以て、國內靜謐に歸し、海外發展の氣運は漸く熱して、日清日露の兩役、延いては今回の日獨戦争となり、略々獨逸と時を同うして世界政策をとりつゝあるのである。獨逸の政策を見るに、先づ、明治二十八年、我國民の終生忘れることの出来ない三國干渉に繼ぎ、膠州灣を租借し、モロッコに於て、英國西班牙を壓したのも世界政策の一端である。而して、其最も銳意畫策する所は、塊國を経て、塞比亞土耳其に出で、進んで小亞細亞・メソポタミア・波斯・印度を経て支那に入り、四川・上海を經略し、膠州灣に連結する一大帝國を建設せんとするのである。往年のバルカン問題等は、塊を手先として、此道を開かしたものである。又小亞細亞・シリアに移民を獎勵し、柘植をはかるも、其必要からである。バグダッド鐵道もその爲である。先般の加奈陀に於ける駒形丸事件の如きは、印度人の英國に心服せざる意氣を示したものである故、若し、獨逸海軍にして英海軍を破ることあらんか、獨逸は容易に印度を侵略するであらう。又精銳なる獨逸陸軍の陸路侵入も、夢想とは思へない。中華民國の袁政府

も親獨主義である故、獨逸が支那に勢力を張るのも左程難事ではない。かくの如くして、東洋に勢力を布かんとする英獨が、利害衝突し、龍虎相闘はんとするは當然である。英國は、十七世紀には、西・葡・蘭を挫き、十八世紀には、佛蘭西より加奈陀・印度を略し、十九世紀には、露西亞と競争し、今は獨逸と争はねばならぬ境遇となつた。佛・西・葡・蘭は共に並行して競争し、遂に失敗した。ロシアは、十九世紀に、バルカン・アフガニスタン・大連の三點に於て、直角に英國の勢圍を脅した。是に於て、英國は終に名譽の孤立を棄て、三十五年、我國と同盟を結び、我國をして露を破らしめた。新進氣鋭の勁敵獨逸は、斜にバルカン半島に出で、英國の勢圍を襲ふた。英國の最も恐るる處は獨逸の海軍擴張である。獨逸が餘り海軍擴張を行ふ故、英國は對二國海軍主義を維持することが出来ぬやうになつた。特に、近くキール運河が開通して、獨逸隊の北海に出動することは容易となり、又空には飛行機が自由自在に飛翔する。一衣帯水に強敵を控へて、英國は、未だ曾て遭遇した事のない危険に遭遇する事になつた。これ三國協商が、英國を中心として結ばれし所以である。獨逸がかくの如く勃興した爲に、之に對すべく、英國は大同盟を作らねばならぬ。ビスマルク退隱後、露佛接近して攻守同盟を結び、露國の日露戦争に破れ、勢力失墜し、佛の他に同盟を求むるに至るや、明治三十七年、英國は直に佛蘭西と協商し、次ぎて、四十年、露西亞と協商を遂げ、茲に三國協商が首尾よく成立した。由來協商なるものは、有事の際に大なる利益はない。然るに、此の三國協商の重きをなす所以は、前述の如く、對獨三國協商であつて、將來、必ず三國同盟を構成せんとする意嚮があるからである。其効力は殆んど同盟に等しいのである。果然、塊塞の戦火は三國同盟對三國協商の大亂を來し、世界政策上、英獨雌雄を決せんとするに至つた。唯伊太利は、嘗て土耳其を破つて、トリポリを占領した時、佛蘭西が、之が領有を默認した好があるから、今度の戦争には加らず、中立の態度を取つて居る。

此の戦争で、英獨海軍の勝負は、直に兩國の勝負の決となり、兩國の世界政策の消長に大影響を及ぼすことになるのである。

バルカン問題と塹塞戦争

上江敦
論講演

柴田省三筆記
飯尾定治

全歐を鐵火の裡に投じたる大動亂の近因は、實にバルカン半島であります。由て、是から、バルカン半島の歴史と塹塞戦争とにつきて御話致します。バルカン半島は、上世、東羅馬帝國が建設された地で、その當時は、國勢が非常に盛でありましたが、年月の立つに従つて、宗教上の争や蠻民の侵入等で、次第に勢力が衰へ出しました。その機に乗じて、中央アジア方面に起りたるオスマンリ・トルコといふ種族が屢々侵入しました。そして、遂に今日より四百六十年程前、我足利義政將軍時代に、ムハメッド二世と云ふ者、三十萬のトルコ民族を率ゐて、首都コンスタンチノープルを陥れ、全くバルカン半島を攻取つて、こゝに、歐亞に渉るトルコ大帝國を建てました。トルコ族は亞細亞人種に屬して、マホメット教を信じ、他のバルカン諸國の住民は多くはスラブ族で、キリスト教を信仰して居たのでありますから、自然、バルカン諸國の住民は、トルコ族に對しては心服するわけには行きませんでした。さて十七世紀の末頃から、トルコ民族の勢力も亦漸く衰へまして、我文政十二年、徳川十一代將軍家齊の時には、當時歐洲に盛に起りたる自由主義の氣運に乗じて、その領地なるギリシヤは、先づ、トルコ族に對して叛旗を翻し、遂に歐洲諸國の同情に因て、トルコ帝國から獨立しました。加之トルコ帝國は財政甚

だ紊亂し、從て國債頗る多く、住民よりは重税を取り、國內のキリスト教徒を迫害するなど、其稅政が甚しいので、ヘルゼゴビナ・ボスニアなどの住民が先づ叛亂を起し、續いて、ブルガリヤ・セルビア・モンテネグロも亦之に應じ、其勢が中々盛でありました。其頃、此地方には所謂スラブ民族統一主義が唱へられて居りまして、露國は、其盟主を以て自ら任じ、皇帝アレクサンドル二世は之を利用して、同人種同宗教の民族の保護を口實とし、我明治十年から十一年にかけて、ダニウプ河及びアジアの二方面から兵を進めて、所謂露土戦争を起しました。彼のトルコの名將オスマンパシャが、ブレブナの要塞に據つて五箇月間、露の大軍を苦しめたのも、此の戦争の時であります。されど、トルコは連戦連敗して、遂にサンステファアで、露國と屈辱的媾和を結びました。此時、英國は、露國の強大となる事を恐れて、塹塞國と共に、露國の要求を過重なりとして、干涉を始めましたが、獨逸の宰相ビスマルクの調停に因つて、ベルリンに列國會議を開き、前條約を取消して、新にベルリン條約を結びました。其要點は、トルコはセルビア・モンテネグロ・ローマニアの獨立を承認する事、半獨立のブルガリア侯國を建設する事、ボスニア・ヘルゼゴビナの行政は塹塞國の監督に任ずる事等で、六十四箇條から成つて居ります。此條約に由つて、トルコは、歐洲に於て其土地の三分の二、人口の二分の一を失ひました。其後明治四十一年になつて、さきに半獨立國となりたるブルガリアは、トルコの混亂に乗じて、獨立を宣言し、塹塞國は、ボスニア・ヘルゼゴビナを合併しました。降つて大正元年十月八日、モンテネグロは、其國境に就いて、トルコと葛藤を生じ、遂に其紛議の解決を兵力に訴ふる事とし、茲にモンテネグロ・セルビア・ブルガリア・ギリシヤの四國は同盟して、トルコと開戦しました。此戦に於ては、聯合軍は常に連戦連勝、大いにトルコ軍を破りましたので、終に、大正二年五月三十日、英國の外相グレー氏の仲裁に由つて、ロンドンに媾和條約を結びました。此條約に因つて、

トルコは大いに其領地を削られて、僅に、多島海のエノスより走りて、黒海のミヂアに達する一線を以て國境とする事となりました。然るに、一方同盟國では、其國境を定めるに當りて、ブルガリアが覇者の位置を占めんとするを惡みて、セルビアが主動者となり、モンテネグロ・ギリシアと聯合して、同年六月二十五日、ブルガリアに對して戦を開きました。七月三十日に至り、獨帝ウイルヘルム二世の調停に由つて、ローマニアの首都ブカレストに媾和條約を結びました。セルビアは、モナステールを中心とする地方を得ましたが、海に出づる事は出来ませんでした。其は、奥國がセルビアを抑へたが爲でした。よりて、此條約締結後、セルビアは奥國を恨む様になりました。さて、セルビアは、其面積元一萬八千五百餘平方哩で、人口は二百九十萬と云ふ國で有つたのが、ともかくも、此條約で三萬三千六百餘平方哩の面積と四百三十餘萬の人口とを有する事になりました。其人種は大部分スラブ族で、かく近々數年の間に、トルコ若くはブリガリアと戦つて勝ちましたので、將來は西隣のモンテネグロと合し、尙ほ附近の同民族の國々をも併せて、大セルビア國を建てんとする所謂大セルビア主義なるものが、彼等の間に唱へられました。露も亦、スラブ民族統一主義の上より、之を助けて居りました。然るに、セルビアが、將來、モンテネグロと共に合併せんと計畫し居りたるヘルゼゴビナ・ボスニアは、奥國が、機先を制して、之を併せました。又ブカレスト條約に於ても、奥國は大いにセルビアの主張を妨げました。そしてセルビアが、トルコから得た東歐鐵道も、奥國が其株券の大部分を占めるなど、種々大セルビア政策を妨碍したのであります。此等の事は、多く、奥國の後に控へて居る獨逸が加勢に依つたのでありますから、セルビアは深く獨逸二國を恨み、殊に、奥國がセルビアに對する政策の大部分は同國皇儲の方寸から出ると云ふので、一段その皇儲を怨みました。此皇儲はフランツ・フェルデナンド太公と申して、御年五十二歳、現皇帝フランツ・ヨーゼフ陛下の皇

弟カール・ルードウィッヒ親王の御子であります。現皇帝の皇長子ルードルフは、マイヤーリングの狩場に於て、無慘にも殺害せられ、他に皇子がないので、かく、フランツ・フェルデナンド太公を皇儲とせられたのであります。奥國は、ハンガリーと共に、奥國をなして居ますが、其五千萬の人口の内、二千五百萬はスラブ族であるので、バルカン半島に於て、スラブ族が發展するのは、自國內のスラブ族を統御するに困難を來す所以であるから、それで、セルビアを抑へて、之が發展を妨げ、一面では、露國を抑へるつもりで、是の如き政略を用ゐるのであります。セルビア人の方では、現奥國皇帝は八十四歳の高齡であるので、間もなく、フランツ・フェルデナンドが皇帝となられるであらうと云ふ事を非常に恐れて、遂に大陰謀を企てたのであります。時は丁度本年の六月二十八日、フランツ・フェルデナンド公及びソフィア太公妃は、ボスニア・ヘルゼゴビナ二州で行はれた陸軍大演習を檢閲せられし歸途ボスニアの首都セラエヴォに於て、セルビアの一青年の爲に暗殺せられたのであります。此青年の自白に由つて、此陰謀には、セルビア國高級官吏が多く加つて居る事がわかりましたので、奥國人は上下共に非常に憤り、七月二十三日に至り、遂に、セルビアに對して、嚴重なる要求を提出しました。其條項は

塞國に於ける大塞耳比亞主義を標榜せる各協會を閉鎖する事。

暗殺陰謀事件の審問には奥國政府代表者を参加せしむる事。

塞人の反奥的精神の不正不當なるを宣明する事。

陰謀に關係せる文武官を處罰する事其處罰は之を奥國政府監督の下に行ふ事。

教科書より排奥運動を助長するが如き事項を除く事。

と云ふのであつて、之に對する回答は七月二十五日午後六時限りと極められたのであります。しかし、セルビアは、之に對して満足なる回答を與へなかつたので、七月二十五日、塊塞の國交は全く斷絶して、ベルグラードの東方テメスクビン附近で、兩國兵の衝突を見ることとなりました。是の如く、兩國の交戦は、兩國の名に於いて開かれましたが、其背後には、スラブ民族統一主義及びドイツ民族統一主義を遵奉する露獨の兩國が潜伏し居りたるは固より疑を容れない事で、遂に延いて世界空前の大動亂を起すに至つたのであります。

野村男爵講演要領

F 生 筆 記

諸君私は今校長から紹介を受けた野村素介です。校長から何か諸君に話をして呉れよとの事であつたから書道に就いて少しばかり御話して見やうと思ふ。小少風邪の氣味で氣管を傷めて居るので聲が十分出ぬから聞き悪い事も有るかも知らんが泳へて貰はねばならん。當地は私の生れ故郷であるから、是迄も度々歸省したが此度も久振りに歸萩して親の年忌を營んだ。所が校長から青年時代國事に關係した時の感想を話して聞かせて貰ひたいとの話があつたけれども、是等の事に就いては先輩の人たちから追々話も有つたらうと思ふから私が今更御話する迄もなからう。此度は他の演説講話等は成るべく御斷りしたいものであるが、書道に關した事どもならば平生聊か嗜む所も有る事なれば多少諸君の裨益参考ともなるべければお話しして見てもよいと申したら、其てもよいからとの校長の請求であつたから承諾いたした次第であります。

文字の使用は東洋特に支那に於ては餘程古い事で、其始は數千年の昔に在つて、延いて我國朝鮮にまで及び、社交上最も必要な機關となつて居るのであるが、其の文字に普通のと専門的との區別が出来て居る。普通のと普通社會に應用して用務を辨ずるもので、學校の習字の如きは其方の稽古するのである。専門的とは所謂書學の方の事で文字の成立結體等から研究するので、是は特別に興味を有するものゝ爲る事である。今日多端の世にみんなが専門に遣る事は至つてむづかしい事で連も出来る事でない。一般は普通的に遣る事とせねばならん。普通的にやるには格別上手に書く必要も立派に書く必要もない。詰り字體を間違なく正しく書けさへすれば其てよいのである。

字には結體と云ふ事があつてちやんと極つて居るから之に外れてはいかん。之に外れると譌字である。人には目口鼻がそろつて居らねばならん。一つ缺けても不具であつて完全な人ではない。それと同じ事で間違つた字を平氣で書いて居ては其人の品を下げる事にもなるから譌字は書かん様にせなければならん。

今日は文字沿革の大略と結構組織の事と運筆即ち習字法の一斑とを御話する考である。書の事は範圍が極めて廣うて、順序に御話すれば長い時間を要するから思出し次第にボツ々々御話して行く事にしよう。

先づ文字と云ふ字義から云つて見ると形立ツクリタテ謂イハレ之ノ文ヲとありて、物の形に象りて作つたものが文である。原始時代は今の字と違つて物の形に依つて之を製し、日はヒ月はツキのやうに書いたもので是れが文である。聲具コト謂イハレ之ノ字ヲとありて、日は常に充實して居るからと云ふので之をジツツツと云ひ、月は盈虧があるからと云ふので之をゲツゲツと云ふの類である。又著ツキ於ニ竹ノ帛ニ謂イハレ之ノ書ヲとありて、文字を竹簡なり繅帛なりに書き附けるのが即ち書である。

文字に六書の法と云ふが有つて、文字の数は多いけれども此の外に出るものはない。六書とは

象形 會意 指事 諧聲 假借 轉注

象形とは物の形を其儘に寫し出して出來たので前に云つた日、月等の字が是である。

會意とは已に其々意義を有せる字を組合せて新一意義を有せしめた者で、人言を合せて信の字となし、止戈の字を合せて武の字となせる類である。

指事とは事柄を指示すと云ふ事で、其字の形にて其々事事情を察せさせる方法であつて、一、丁の字の類が是で、一は一の上の一を加へて上の意となし、丁は一の下の一を添へて下の意を表したものである。

諧聲とは其々に相當の主形を立て、其義を示し、之に其音聲を表すべき文字を配合して出來たものであつて、江浦柏楡峰嶺の類が是である。其水木山は其義を示したので工甫白會条領は聲を表したのである。

假借とは目的の事物をあらはすに適當の字母なき故、他の文字を借り來りて一の新義を持たせたもので、號令の令を借りて號令を出す官長の義となし縣令など云ひ、長幼の長を借りて人の頭に立つ長官の意を持たせ、能が獸中のすぐれたものであると云ふので借りて賢能の義に用ゐるなどの類である。

轉注とは音を轉じて義を注すると云ふ事であつて、一字に多義を含め、音の轉ずるに従つて義を異にするのである。賁の字が音ヒである時は飾る義となり、音ブンである時は大いなりと云ふ義となり、ハンである時は文章ある貌を云ふこととなり、ホンである時はたけしと云ふ義となり、敦の字が音トンである時は厚い義となり、

タイである時は食器の名となりジュンである時は幅廣さを云ふ事となる様な類である。

以上が六書の大略であるがどの文字も右六書の外に出るものはないのである。

書體は古文篆隸以下種々多様であつて、秦の八體漢の六體其他五十體から多きは百體まで數へる様になつたけれども、些々たる相違の點を捉へて強ひて名を作つたので悉く知る必要がない。唐の時定められた六體即ち大篆小篆八分隸書行書草書が其重なるものである。大篆は周の世に史籀が之を作り小篆は秦の時李斯が大篆に因つて之を簡にして作り八分は秦漢の際に出來たものである。隸書は今の楷書の事であつて、今の隸書は古の八分であると云ふ説もある。今日尙ほ書かれて居るのは小篆隸楷行草の五體で此以外の者は普通用に於いては殆ど書かれる事はない。

文字には獨體と合體とがある。日月人言の類は獨體で、日月を合して明となし、人言を合して信とする類は合體である。日月皿を合して盟となし、艸白玄木を合して藥となしたなどは三合又は四合である。

文字の結構は極めて肝腎な事で僅かの違ひで訛字となるものである。文字の形は逐々變化して來て居る。例へば雜の字が襍から變つた様なものである。雜の艸は衣であつて、衣の下に木を置き、隹を右に加へたものである。

從の字は古は從であつたのが、後に馭となり、更に从を彳とし彡と止とを上下に置き從とした。徒も古は徒であつたが、是も從の例に依つて徒となつた。つまり書くにむつかしいから形を改めたものである。又隸變と云つて隸書から變じた者も色々ある。竹冠を艸冠にした類が是であつて、竹の隸體が林である所から遂に艸となつた。今日では竹冠の字は艸冠に書いても宜しいやうになつて居る。

幸走去赤光等の字も隸變で元は卒交去走であつたのが上の大の隸體大が土となり、中にも赤の字は大が土となり火が心となつたのであり、光の字は上の艸が火となつたのである。原形を知つて活かして書けば差支はない。

又字には或時代に色々の事情があつて改めたものがある。秦の始皇の時ツミと云ふ皇の字が皇の字に似て居る

からと云ふので代りに罪の字を用ゐる事にした。罪の字は元捕魚竹岡と云ふ字で全く別義である。序に御話して置くが、皇の字はもと皇と書いたもので皇の方が正しいのである。上部の自は鼻の古字である。故に鼻の上部は白にしてはならん。皇の字がツミの事になるのも言罪人蹙鼻苦辛之憂とありて酸鼻と云ふ意から出たのである。又對の本字は對であつて口に从ふべきであるが、漢の文帝と云ふ人が人は多言してはよろしくないと云ふので口をのけてしまつた。悖は音フツであつたのを、梁の武帝が佛法を尊崇した處から、佛と悖と音が似通ふて面白くないと云つて音をハイと改めた。國の字に國の字を書く事は唐の代に則天武后が新製したのである。我國でも水戸黄門がいつも光圀と書かれるが説文などには無い字である。以上は文字の變化と云ふ事に就いて其沿革の梗概を御話したのでホンの一端であると言ふ事を承知してもらはねばならん。

支那の文字は今日色々非難もあるが、其性質を研究して見るとそんなにむづかしい者ではないのみならず色々面白い事がある。今日残つて居る文字で教育の意義のあるものや古の風俗制度を知ることの出来るものが幾等もある。

寶財賈賈賂賂賈賈等の類は皆貝に从つて居るが、是は古は貝を珍重して今日の貨幣處に用ゐて居たと云ふ證據になる。

恙はツツガと云つて小蟲である。太古穴居の時代には往々此蟲の爲に苦められた。そこで人々が出遇ふた時には互に無恙かと問うたと云ふ事だ、今日の御無事したかと云ふに同じ意であるから今日も尙ほ安否を問ふの語として用ゐられて居る。今でも北越地方に此蟲が居ると云ふ話があるが之と同じて有るかどうかはわからん。兎に角古代は穴居したものであることが此字から推察せられる。

葬の字は艸と艸との間に死の字があつて古代は屍を艸に藏めよつた事が想像せられる。是から推せば下部を井或は大に作るはよくない。井に書くべきである。

弔の字の如きも吊と書くは俗である。弔は人が弓を持つて居る形で、古代には草の間に藏めた屍を鳥が啄むので死者を弔らふに弓を持つて行きよつたと云ふ事から出来た字である。

軍陣等のいくさに關する字は多く車に从つて居るが、是は古代は車戦を用ゐたからであつて、千乗の國萬乗の國など云つたのも皆戦車の數から云つたのである。今度の歐洲の戦争に自働車を澤山用ゐて居ると云ふも同じ事である。

輶と云ふ字は罪あるものを車裂にすることであるが、後世は車裂の代りに斬ることにした、そこで斬の字も矢張車に从つて居る。

籊籊等の字は皆竹冠であり、冊の字も元は竹に从つて籊であつたのが、後に竹を省いた。之で見ても古は字を書くに竹を用ゐたことがわかる。

燈は鏡と書くが正しいのである。鏡をアブミと訓ずるは假借である。鏡は祭の時用ゐる器で之に火を點じたものであるが、アブミの形が之に似て居るので假借したのである。

夷は夸とするのが正しいのである。夷の字は大弓を合したもので東夷は大弓を持つて居ると云ふ事から出来た字である。或説に夷は日本を指す大弓を持つる風は日本の外にないと云つてある。夷とは失禮の云分であるが向ふてとう云つたのであるから此方からどうとも仕方がない。

梟は縣の本字でカケルと云ふ意であるが、今は心を加へて懸となつて居る。梟は首を倒にしたので懸である。

今は首と書くが本は晉ては髪である。古罪人の首を倒にかけよつたからカクと云ふ義を持たせたのである。我輩の少年時代には折々罪人の首の懸けられたのを見た事があるが併し倒てはなかつた。其丈は昔とかはつて居る。兎に角此等の字が昔の制度風俗の一端を見ることの出來ると云ふ一例である。

是から結構と云ふ事について少し御話して見やうと思ふ。

東は日が未だ十分升らんで木の中に在る形を取つて日の出る方角を示したものである。

果は木の上に日の上つた形で、日が木の上まで上つた時は明るいものであると云ふのでアキラカナと云ふ意を表した。

杳は日が木の下にかくれた所でクライと云ふ意を表して居る。

且は地の上に日の出た所で、百は日が地の下にかくれた所である。百は古の昏の字であつて、且百の上下の一

は地平線を示したものである。

昧はクライと云ふ字であるが、是は日の未だ出ない時はくらいと云ふ事である。

早の字は古は早とい書いたたもので甲上に日のあるはハイと云ふ義から出來て居る。其甲は人の首と云ふ字

である。

歩の字少は从ぶは誤で少でなければならん。少は音タツであつて三畫である。其形は止を反對に書いたもので

歩の字は止を二つ反對にひつつけた歩の形から出來て居る。止まる止まるで歩けるからである。

次の字を次に作るも非である。この原は篆書は欠て氷である。氷冬寒等のが是である。次は二に从はねばな

ならん。

決の字もに从ふはいかん。滅滅涼況等も皆に从ふ字でに从ふは宜しくない。の有るべき字を俗に省いて書く例が段々ある。富富宜の類は、がなくてはならん。寵字もさうである。又、のない筈の字に、を加へて書くことが有る。丈の字を犬に、馱の字を馱に作るは皆いけない。又、の有つても無くてもよいものがある。

士を主と書き、氏を氏と書き、神を神と書く様なのが是である。元ないのが本體であるが書く時缺けた所を補

ふ爲に一を加へるのである。是は補文と云ふ者で(此時男は氏の字同の字を餘版に書き「から書き終つて筆の持つて行き所がないからかうやるのである」とい、を加へて示されたり)女の兒

が頭にリボンをかけた様なものである。

達の字を達と書いてはいかん。幸に从はねばならん。幸の音がタツである。

越の字も越と書くはよくない。戊の字とは違ふ。戌に从はねばならん。戌は音エツ武器の名で篆形は成てあ

る。

在存等の字が在存となるはよくない。才に从はねばならん。才音サイで在の音は之から出たのである。教育の

教の字を教と書くのはいかん。教の本體は教て、幸はナラフとかマナブとか云ふ意のある字で、學の字も之に

从つて居る。

回の字を回と書く人が往々有る様であるが之もよくない。回は面の古字であるから回と混じてはならん。

武の上を弋と書くもよくない。それでは戈の形にならん。上部を弋の如く書くので戈の形となるのである。

貫の字實の字共に母に从つてはならん。運筆の順序も母の字とは違つて、冂一一の順に書くべきもので、母

の字は女を本として、ミを加へたのである。ミは乳の形である。

開の字はマ、シ、ツ内オリ、ア、イダなどの義を有する字であるが、中を日としたり又閑と書いたりするのはど

の字はマ、シ、ツ内オリ、ア、イダなどの義を有する字であるが、中を日としたり又閑と書いたりするのはど

の字はマ、シ、ツ内オリ、ア、イダなどの義を有する字であるが、中を日としたり又閑と書いたりするのはど

の字はマ、シ、ツ内オリ、ア、イダなどの義を有する字であるが、中を日としたり又閑と書いたりするのはど

れもよくない。閑は別義の字で閑とは違ふ。閑は門のアイダから月光の見える形である。
帝言辛商旁音章意童等の上部は皆ニの字でては無い。ナを用ゐるのは立の字より外にはない部倍等の字が是である。

楷書を書くには字典などの様に書いてはいかん。字典などの字は説文體と云つて書物などに用ゐる字で普通に書く字ではない。普通に書く字は後に楷體と云ふ一種の體が出来た。唐の開成の石經がそれ、書家の書くのは此楷書である。イサヲシと云ふ字は動であるが、楷體では里に从ひ勳と書くべく、羽の字も羽とすべきである。聖としたり羽としたりするのは似而非書家の爲る事である。彦産等の字も楷體では上部を産に書き、闕の字も楷體では闕と書くので唐代の名家などもかう書いて居る。全内兩の字なども楷書の時全内兩と書く。者の字でも、を書いてはいかん。、を書く様では駄目だ。高の字は高と書き、鬼碑の字は鬼碑と書く。舉の字も手を書かないで斗を書く。手扁の字はどう書くか、すべて斗と書くては無いか。斗は即ち手であつて足らん事もなんにもない。

是から字を書く上の注意を少し御話しやう。孫過庭の書譜の中に「至^ハ如^ハ初學^シ分布但求^ニ平正^ヲ、既知^ニ平正^ヲ、務追^ニ險絶^ニ、既能^ニ險絶^ニ、復歸^ニ平正^ニ」と謂つてある様に、初は成るべく平正を守るがよい。平正とは素直に書くを云ふ初から飛んだり跳ねたりしてはいかん。人間の一生でも幼年の時素直に成長して、二十三十の元氣盛には思切つて活躍せねばいかんが、老後には復平正に歸せねばならん。書を學ぶにも此心得てやらねばいかん。

書を書くに懸腕直筆と云ふ事があるが、つまり筆を動かすなと云ふ事である。筆をかう持つて此時男は指指無名指中指を以て筆管を把持する雙鉤掌を空虛にしてかう云ふ風に書く此時肘腕を動かしの形を示さるの形を示さる。

大字を書くには筆頭から一寸一分位の處を持つがよい。墨の餘りに黒過ぎるのは墨猪と云つてよろしくない。それかと云つて薄過ぎては精神がない。其間を見計らつて書かねばならん。肉も餘り太過ぎてはよくないが細過ぎたのは筋書と云つて之もよくない。少し瘦氣味にて力の有るのがよい。

字は姿が第一である。姿をよく書かねば不恰好で見られない。それで扁の畫の少い字は扁を上げて上をそへ、反對に扁の畫の多い字は旁を下げて書く。鳴知等の字の様なので之を態度と云ふのである。又三の字を書くに上畫は少し仰ぎ中畫は平に下畫は左右を少し下に向けると釣合がよい。是類を向背と云ふのである。連火を書くにも無意味に點を并べては妙でない。のの様になければいかん。御宮の鳥居でも下の方がじつと張つて居て形もよければ丈夫にもあるのである。イを書くには上のノの中央から次のノを起しその又中心から一を書く釣合がよい。は中の點を少し外に出し下の點を撥ねる時は上の點の中央を狙つてやると具合がよい。兎に角姿勢が完全して居らねばならん。目口鼻が一つ缺けても完全な人とは云へない様にどこかに一處抜けた處が有つてもよい字とは云はれんのである。

かやうな咄をすればまだ種々際限もないが、あまり長くなるから今日はこの位にして置くことにしやう。

柴田家門氏の訓話

下井干城筆記

只今校長から御紹介のありましたやうに、私が柴田家門であります。何か諸君に御話をする様にとの事であり

ましたが、旅中繁忙の爲に是ぞといふ考案も有しませんが、御話と申す程の事は出来ませんが、學校を參觀して諸君の御目にかゝつたのを幸に、聊か所感を述べて見ませう。

私は當地平安湖に生れまして、九歳迄當地で教育を受け、十二歳迄東京で學び、再び當地に歸りまして、巴城學舎に入學いたしました。確かには覚えませんが、明治十年だつたと思ひます。その巴城學舎が縣立中學校と改稱されましたから、依然として在學して居りました。後に、私は學制上に就いて意見を異にすることがあつて、とうとう退校することになつたのですが、それから云ふと、諸君とは同窓の因縁を有して居ると云ふもよいのであります。

さて、萩中學校の前身たる巴城學舎は、如何にして興つたものであるかと云ふに、毛利藩公が、文武の道を藩の子弟に教へんがために營まれたものでありまして、水戸の弘道館と主旨を同じうして居ります。即ち藩公祖先以來の教育方針たる忠信孝悌の道、換言すれば人倫を明かにせんがためであつたのであります。

一國が教育に力を盡す所以は、心ある日本の國民を作るにあつて、決して眼鼻や口を供へたばかりの人間を作るのではありません。又教育の主旨は、自己發展の都合の良い、便利な立場を得る道を教ふるばかりでなく、確實なる日本人としての素地を作らしむるにあるのです。

學問は只 Reading や Conversation のみでなく、最も大切なものは人間となる道を知るにありまして、それには中學校程度が最も適して居ると思ひます。國民性の陶冶といふことも、亦中等學生に一番力を盡して居ます。重ねて申しますが、つまり、皇室に對して忠節を盡すこと、家庭に於ては孝悌の道を盡すこと、之が我が國民性の基礎であります。これから先々大いに雄飛せんとする諸君は、大なる覺悟を要するのであります。幸にも萩中學校は、

この國民性を養成するに適した位置にあります。萩の周圍の地には、昔の賢哲の記念が古跡として澤山残つて居ます。故に此校に在る者は、眼のあたり、昔の賢哲に接して居ると同じこととあります。例へば、指月山に登り、志都岐神社に詣ると、明治維新の歴史、毛利氏の故事などそれからそれへと思ひ出だされ、松陰神社に參拜すると、松陰先生及び雲の如き諸豪傑の偉が髣髴として心に浮び、無量の感に打たれる、これ天下に、その比を見ないところでありませう。

諸君は、近づけば狎るゝの弊に陥らず、充分これ等の資料を考究して、大いに知識を増すことを務めなければなりません。兎に角、あの男は、何がよく出来るといふことは、人生最後の目的ではなくて、あの男の人格は、どう見ても缺點がないと云ふのが、人生終局の標的であらうと思ひます。最後に、同窓の一員として、後進の諸君に、切に希望することがあります。道を歩むにも、注意をしなければならぬ、陥穽に墜つるのであります。注意の上にも注意を重ねて、然る後に、誠心誠意を以つて、之を實行しなければなりません。これが成功の基礎をなします。諸君、萩中學校の出身者は、漢學が良く出来るとか、數學に深いとか云ふよりも、流石、あの校の出身者は、どう視ても人格が高いと世の人から云はるゝ様に努められんことを希望する次第であります。

まことに、つまらないことを並立てましたが、少しでも御反省の參考になりましたならば、満足に堪へません。云ひ足りないことも多々ありますが、何分旅中のことでありますから、これだけで御免を蒙ります。

松陰先生追慕會に於ける村上校長講演の要旨

吉田 浦 梁 操 筆 記

今から、例に依つて、松陰先生に關する講演をなし、終つてから、松陰神社に參拜するのである。抑々、今日は、松陰先生と如何なる關係のある日かと言ふと、安政六年、今日今日、先生は、江戸の小塚原と言ふ刑場で、死刑に就かれた。舊曆で言ふと十月二十七日であつたが、之を新曆に換算すると、十一月二十一日に當つたので、それで、今日を以て、松陰神社の秋季祭日としたのである。

松陰神社に參詣すると、右側の方に、小さな家があつて、其中に、米搗機械、此の地の方言で「ダイガラ」と稱する者が据ゑてある。元來、松陰先生は、杉家から、吉田家へ養子に行かれたので、此「ダイガラ」は、杉家のものであつたのだ。先生は、吉田家を繼がれたが、奥様も無く、子供も無く、獨身者であつたから、實家の杉家の世話になつて居られたのである。先生は、常に國事に奔走されて居たが、學問の暇には、家事家業を手傳はれたので、此「ダイガラ」で、米を搗かれたのである。その「ダイガラ」が、残つて居つたのを、縣の前代議士であり、温交會を組織して居られる瀧口國重等の方々が、杉家から譲り受けて、松陰神社に寄附し、先生の記念物とし、且は、後世の人々をして、之を見て、奮發興起する所あらしめんとて、かくは境内に据附けられたのである。此の由緒が、あの「ダイガラ」の上に記載してあるから、既に知つて居る者もあらうが、吉田庫三と云ふて、先生の姪にして、吉田家を繼がれた方が案を起されたのを、本校の安藤先生が書かれたのである。此「ダイガラ」に就

いて、松陰先生の手紙の中に書いてある事があるから、今日は、先生の遺文に就いて講演する心算である。

久坂義助に與ふ 安政五年二十八日

病肺の事最早昔話に御座候半御案じ被下間布候此節大暑中に候得共甚壯なり隔日左傳八家會讀勿論塾中同居七つ過會讀終る夫々畠又は米春與在塾生同之米春大得其妙大抵兩三人同じく上り會讀しながら春之史記など十二四五葉讀む間に米精け畢る亦一快なり口羽に話し候へばをかしの事はかりする男といふた

此手紙は、久坂義助に與へられたるものである。義助は、初の名を玄瑞と云うた。元來、久坂玄瑞は、醫者の家に生れた人で、兄様が早く死なれたから、後を繼いで、醫者にならなければならなかつたのである。それで、玄瑞と云ふ醫者らしい名が付いてををつた。然し、此人は天下國家の事を憂へて、今日で言へば、所謂政治家になりたかつたので、醫者にはなられず、此醫者臭い名を嫌つて、改めて義助と言はれたさうである。此の方は、松陰先生の門下の中でも、最も善く出來た人で、先生も望を屬して居られた。此人の外に、入江杉藏と言ふ人が居られた。此の人は、野村靖と言つて、後に、農商務大臣となられ、子爵になられた人の兄様である。此の方と久坂玄瑞とは、松陰先生が最も望を屬して居られた。つまり、松陰門下の二秀才双壁と言つて善いのである。如何に、先生が、此の兩人に望を屬して居られたかと言ふことは、先生の手紙で分る。安政六年、十月二十日、江戸の牢屋から、入江杉藏に送られた手紙に、「要之諸人才器醜礙、天下の大事を論ずるに足らず。吾が長入をして萎蕪せしめむ残念々々。足下と久坂とのみを頼むなり」と書いてある。之を以つても、此兩人が、如何に松陰先生から信ぜられて居たかが分る。此久坂義助と言ふ人は、廿六歳の時、京都で討死をせられたが、明治二十四年四月、正四位を贈られた。幾か廿六歳位で、畏くも、朝廷から、正四位を贈られたと言ふは實に偉い事である。先生が、

此手紙を讀み久坂玄瑞に與へられたのは安政五年六月二十八日の事である。此の折には、萩に居られて、松下村塾で、塾生を教育して居られたから、塾から送られたものである。塾生は、常に「治國平天下」と言ふことを論ぜられたが、其の餘暇には、高島に出で草を取り、或は米を搗かれた。然も、之を學生と一緒にやられたのである。今日の學生が、教師と一緒に、校庭の掃除をするのを、厄介な事だ等と思ふのは間違である。松陰先生は國士であり乍ら、「ダイガラ」にあがつて米を搗かれた。其後、廟堂に立つた人々も、皆共に搗かれたのだ。今日の學生も、學校から歸つたなら、家事家業を手傳ふのを忽にしてはならぬ。手紙の中に、「大抵兩三人同じく上り、會讀しながら春、之」とある。今日行つて見ても「ダイガラ」の上に、板が釣つてあるが、其に、書物を置いて、會讀しながら搗かれたのである。先生の志は、實に此所に在るので、先生は、かくも、光陰を惜まれたのである。一體、支那の教では、國を治め、天下を平にする人物にならねばならぬと言うが、始かちさうは言はぬ。初は、身を修め、家を齊へねばならぬのである。一身一家が治められぬ様で、如何して、天下國家が治められやうか。先生は、支那の教によられたので、一方では、天下國家の事を論じ、一方では、身を修め、家を齊ふる事をせられたのである。終りに、刺書にして、「口羽に云々と書いて居られるが、をかしい」と云つても色々ある。此様なをかしい事は、學生は大いにやらねばならぬ。此口羽と云ふ人は、亦非常に善く出来たが、惜しい哉、若死をせられた。安政六年十月六日に、先生が、高杉晋作に與へられた手紙の中に、「口羽病死、何共悲傷に堪不申候。清狂も死ぬし、口羽も死ぬし、天何不福江家。此兩人皆有、一無二之士、回等が如き、塵ためを掻き交せても出る土にあらず。殊に口羽は清狂の比にあらず」と書いてある。又、十月七日、矢張、高杉晋作に與へられた手紙に、「口羽の病死は

如何にも痛酷なり」と書いてある。更に、十月二十三日、これは死なれる少し前であるが、鮎澤伊太夫に送られた手紙に、「口羽徳祐と申者、可頼人物に御座候。先日死去、年二十五六にて、神社奉行相勤居候。此者の詩稿亦其志を見るべきものあり。何卒清狂と口羽との兩稿、久坂玄瑞に御申遣、御取寄御一誦被下度候」と書いてある。以上の話で、此手紙は略々解つたであらうが、兎に角、松陰先生は、國家の爲に奔走し、又、學問にも勉勵せられたが、其中にも、身を修め、家を齊へると言ふ小さい事に迄、氣を着けられたと云ふ事を忘れぬ様に、諸子に望む次第である。

これで、今日の講演は終るが、此手紙の中に、七つ過と云ふことがあるので、之に就いて、少し話して置きたい事がある。これは、昔の時の呼び方で、君等には、ちよつと分るまい。そのみならず、子の刻とか、寅の刻とか言ふ事も、明治生れの者には分り兼ねる。それで、かねて、心覺えの爲に、此様な物を作つて、常に座右に置いて居た。甚だ便利に感じたから、今日の講演會には關係は無いが、手紙の中の文言に、縁があり、又、先生も、掛算の九々を、塾に掛けて居られたと云ふ様な事もあるから、それに倣つて、この時刻方位聯結圖を君等に渡し、た次第である。(圖並に圖に就いての説明もありたれど略す)。

上家大人・玉叔父・家大兄書略解

特別會員 長 東 有 鄰

安政五年四月、彦根藩主井伊直弼、新に幕府に入りて大老となるや、遂に、赦許を俟たずして、米國と、條約

の調印を斷行せり。ここに於てか、天下の志士、大老の專横を憤ることはなほだしく、京師には、志士四方より集り、幕政を非議せり。大老これを鎮壓せんとして、間部下總守を上京せしむ。下總守、上京後、頻に、その辣腕を振ひ、朝廷を壓迫し、勤王の志士を捕ふることを急なり。時、恰も、尾・水・越・薩藩の志士、井伊大老襲撃の噂あり。松陰先生、これをさき、神州の正氣、いまだ亡びざるを喜ぶ。しかれども、事、四藩の謀に出て、われこれに従たるを恥ぢ、別に、一計を立て、岡部富太郎等十七人の同志と血盟書を作り、直に上京して、間部下總守を刺さんとす。こと、もとより、死を期す。この書は、實に、これ、同五年十一月六日、父兄及び叔父に、その志を述べたる永訣の書にして、先生が、従事を託せられたる書中に、死後、この書を、神主とせよとあるにより、いま、なほ、松陰神社の御神靈の一として、祭られあるもの、文中、悲憤慷慨の氣溢れ、躍躍人に迫る者あり。先生の面目想ひ見るべし。しかども、この計畫は、過激なりとの故を以て、藩政府の沮む所となり、果すこと能はざりき。

頑兒矩方泣血再拜、白家嚴君・玉叔父・家大兄之膝下。矩方稟性虛弱、嬰孩以來、連罹篤疾、而不幸遂不_レ死_ニ于病。制行狂暴、弱冠而還屢犯_ニ重典_一、而不幸遂不_レ死_ニ于法。回顧二十九年間、當_レ死者極多。迄_レ今未_レ死、復致_ニ父兄今日之累_一。不幸之罪、何以尙焉。然今日之事、關_ニ皇家之存亡_一、係_ニ吾公之榮辱_一、萬萬不可_レ休止。古人所謂忠孝不_レ兩全_一者、此類是也。

【注解】泣血。涙つきて血のいづること。非常に泣き悲しむをいふ。○家嚴君。先生の父、杉百合之助をいふ。

○玉叔父。先生の叔父、玉木文之進をいふ。○家大兄。先生の兄、杉梅太郎をいふ。○嬰孩。エイガイ。乳呑兒。

○弱冠。二十歳をいふ。弱冠而還屢犯重典とは、先生二十二歳の時、すなはち、嘉永四年十二月、許可をまたずして、他藩に出でたると、二十五歳の時、すなはち、安政元年三月、米艦に投じて、海外に赴かんとせしことな

どをいふ。

【通解】頑兒矩方が泣血再拜して、父上・叔父上・兄上の膝下に申しあげます。矩方は生まれつき體が弱く、乳呑兒の時から、うちつゞき、重い病にかかりましたが、不幸なことには、遂に、病氣のために死にませんでした。私は行が狂氣じみてあらあらしく、弱冠このかた、屢、お上の重い規則を犯しましたが、不幸なことには、遂に、法律によつて、死刑に處せられることもなく、今日まで、つらい世に生き長らへてきました。私は本年二十九才になります。回顧しますと、この二十九年の間に、死ぬべきことは極めて多い。それに、今に至るまで死にもせず、生き長らへて、御心配をかけ、いま、また間部下總守襲撃の事を企て、父上や兄上にわづらひをかけます。不孝の罪は、これにこそものはありません。しかしながら、今日の事は、皇室の存亡と、わが毛利家の名譽を耀すと否とに、關係して居つて、この企は、是非とも、中止することが出来ないであります。古人が、「忠ならんと欲すれば孝ならず。孝ならんと欲すれば忠ならず」といつたのは、丁度、私の目下の境遇のやうなのをいふのであります。天下之勢、滔滔日降、以至_ニ于今_一。其由蓋非_ニ一日_一矣。且以_レ近言之、墨使入_ニ幕府_一、上_ニ假條約_一、天子聞_レ之、下_レ敕停_レ之。幕府不_レ遵、定_ニ假爲_一眞、列侯之議、士民之論、一不_レ容_ニ幕府_一。天子又下_レ敕、召_ニ三家大老_一。大老不_レ至、三家則蒙_ニ幕責_一矣。幕府反使_ニ老中間部侯上京_一。侯已上京、稱_ニ病不_レ朝_一。僞言反復、謂水戸與_ニ堀田_一、西城之議合。以_レ故阿附朋比、遂爲_ニ違敕之舉_一。不_レ斬_ニ水戸堀田_一、夷事不可_レ理也。

【注解】滔滔。タウタウ。世の中一般なること。○墨使。米國の使節ハリスをいふ。○三家。徳川氏の三家にして、尾張・紀伊・水戸をいふ。○大老。大老職井伊直弼をさす。安政五年、拔擢せられて大老職となり、大勢の如何ともしがたきを察し、勅許を俟たずして條約に調印し、世の非難を受け、また將軍繼嗣問題に關し、反對黨の

怨を買ひ、萬延元年三月三日、櫻田門外に於て、水滸士に要撃せられ、非命に斃れし人なり。○間部侯。間部詮勝をいふ。老中堀田正睦等の職を罷めらるるや、代りて老中となり、井伊大老をたすけて、畫策する處多く、その命を受けて上京するに及び、大いに、辣腕を振ひ、志士を捕ふるに五十餘人、ために、天下の怨府となりし人なり。○西城之議。西城は西丸のことにて、世子の住する處なり。西城之議とは、將軍繼嗣問題のことをいふ。當時、將軍繼嗣問題に關し、二黨ありて、互に軋轢せり。一を一橋黨といひ、齊昭の第七子慶喜を迎立せんとするもの、一を南紀黨といひ、紀伊慶福を迎立せんとするものこれなり。○阿附朋比。アフホウヒ。へつらひつきくみになること。

【通解】天下の勢、流れて日に悪くなり、今日の如き、場合に立ち至つた。思ふに、これは、短時日の間になつたのではなく、漸を以てなつたのである。且、近いところていへば、米國の使節ハリスが、江戸に入りて、將軍に謁し、假條約をたてまつり、天皇はこのことを御聞き遊ばされ、幕府に勅を下し、この假條約を御禁止遊ばされました。しかるに、幕府は陛下の御命令に遵はず、假條約に調印してしまひ、諸大名や士民の攘夷論は、一も、幕府にいられない。そこで、陛下には逆鱗あらせられ、その理由を御詰問あそばされるため、幕府に、三家・大老の中、上京せよとの勅をくだされました。ところが、幕府では、井伊大老は、外交多端の折だから上京させることはできない。また、三家は、水戸・尾張は謹慎中、紀伊は幼年であるとの理由で、上京させない。かへつて、朝廷を壓迫せんとて、老中の間部侯を上京させた、間部侯は、已に上京し、病氣だといつて參内せず、虚言をくりかへし、水戸侯齊昭と前老中堀田正睦とは、將軍の繼嗣問題に就いて、一橋慶喜を立てるに、意見が一致したから、互に諂ひ組になつて、陛下の御禁止遊ばされるのをかへりみず、假條約に調印したので、違敕のことは、

幕府の知るところでない。この兩人の罪である。この兩人を斬り殺さなければ、外夷のことは處理することが出来ないといつて居る。

當今幕府幼冲、無所辨識。自非大老主之上、間部輔之下、天下之事、安至于此哉。然則二人者之罪、上違天子明敕、下害幕府大義、内背列侯士民之望、外飽虎狼溪壑之欲、極天窮地、俯仰無容。然而天下士夫、安然默然、無一盤往問其罪。神州正氣、既已爲邪氣所消蝕也歟。頑兒一念至此、食不下咽、寢不安、唯哀一死之不蚤而已。

【注解】幼冲。エウチユウ。冲は幼なり。幼冲はをさなきこと。○虎狼溪壑之欲。コラウケイガクノヨク。虎狼とは、貪欲殘忍なるをいひ、米國をさす。溪壑之欲とは、欲深きこと。虎狼の如く、飽くことをしらぬ欲をいふ。

○曠。ハツ、俗に砲を作る。いしはじきなり。國訓、おほつづ、大砲の義に用ひらる。

【通解】當今、將軍は弱年で、諸事のとりさばきができない。だから、井伊大老が上に居つて幕政を主り、間部老中が下に居つて、これをたすけるのでなかつたならば、天下のこと、どうして、かゞいふやうにならうか、なりはしないのである。この井伊大老・間部老中の二人の罪は、上は、天下の明敕に違ひ、下は、幕府の大義を害ひ、内は、諸大名や士民の希望に違背し、外は、虎狼の如き、飽くことをしらない、外夷の欲をみたせるので、この罪は、何處に行き、また、如何にしても、免されないものである。しかるに、天下の人は、しづかに、黙つて居つて、何等、往つて、その罪を問ふものもない。これで見ると、わが神州の正氣は、もはや、邪氣のために侵されてなくなつたのであらうか。私は、一度、ここに考へ及びますと、殘念のあまり、食物も咽を通らず、寢ても寐に安んずることができない。唯、早く死ななかつたことを悲しむのであります。

頃忽得江戶之報。尾・水・越・薩將襲誅彦根大老。頑兒聞之、距躍三百、曰、神州正氣、遂未消蝕也。政府之議、固當合從四家、鎮壓邪氣也。然兒猶有憾焉。事出于四家、吾因人成事、不免于公等碌碌之數也。是以兒私不自量、糾合同志、神速上京、獲問部之首、貫諸竿頭、上以表吾公勤王之衷、且振江家名門之聲、下以發天下士民之公憤、而爲舉旗趨關之首魁。如是而死、死猶生也。

【注解】 距躍三百。キョヤクサンビヤク。距は躍なり。をどりあがること。左傳に距躍三百、曲踊三百の語あり。こゝより得來れる文字なるべし。○合從。ガツシヤウ。支那戰國時代に、蘇秦が計策せし、秦に對する山東六ヶ國、すなはち、韓・魏・趙・燕・楚・齊の同盟をいふ。こゝにては、たゞ、同盟といふほどの意。○公等碌碌。コウラロクロク。碌碌は隨從の貌。また、凡庸の貌。こゝは凡石のごろぐゝところられるが如く、何の役にも立たざるをいふ。毛遂の語にして、史記平原君傳に、毛遂曰公等碌碌、所謂因人成事者也とあり。○糾合。キフガフ。よせあつむること。○江家。毛利家をいふ。毛利氏は大江姓なり。よつて、江家といへるなり。○趨關。シユケツ、朝廷に趣くこと。

【通解】 このごろ、忽ち、江戸のしらせを得ました。それによると、尾・水・越・薩四藩の志士が、將に、彦根藩主井伊大老を襲ひ誅することでありました。私に、この壯舉をさき嬉しさのあまり、をどりあがるのが三百、そして云ふには、わが國の正氣は、遂に、まだ、消え失せない。わが藩政府のはかりごとは、いふまでもなく、尾・水・越・薩の四藩に同盟して、井伊大老を襲殺し、朝廷を輕んずる邪氣を鎮壓すべきである。けれども、私は、これでは、まだ遺憾に思ひます。それは、この井伊大老襲殺の謀は、以上四藩の志士からたてたことで、いま、わが藩もこの謀にあづかつて、奸人井伊大老を誅しても、わが藩は、人について功をたてるので、かの毛遂が、十九名の食客とともに、平原君に従つて楚國に使い、敏腕をふるひ、己一人の力で、楚國に合從を約せしめたとき、同

行の十九人をかへりみ、君等は凡庸にして、何の役にもたない。所謂、人の力によつて、ことをするのであると云つた事があるが、われは、その十九名の手合たるを免れない。これは、まことに志士の大恥である。だから、大老のことは、四藩のものにまかせておき、自分に、別に、一計をたて、私に、自分の力量の如何をかへりみず、おほけなくも同志をあつめ、速に上京し、京都にて、勤王の志士を逮捕し、暴威を逞しうせる問部下總守を襲殺し、その首をとりて、竿のさきに貫き、上は、わが藩主敬親公の、王事に竭される心を表し、且、わが名門たる毛利家の聲譽を耀し、下は、天下士民の公憤をはらし、そして、勤王の義旗を翻へし、朝廷に趣くさきがけとならう。このやうにして死んだならば、死んでも、猶生きて居るのと同じである。死は惜しむにたらない。

然事固不可私爲。而亦不敢公請。趙貫高所謂事成歸王、不成獨身坐耳、是兒等之志也。是以兒等、將以某日、偕同志、詣益田行相之門、告故而發。不敢求許允。政府待以通亡可也。事捷則師旅當繼進。不幸不捷、他人或死、兒則投身就捕、明志士憤滿所發、決非公家所知也。

【注解】 貫高。前漢の趙王張敖の臣にして、高祖皇帝のその主張敖を遇する、甚だ無禮なるを憤り、同志趙干等とともに、これを殺さんと企て、事ならば王の功に歸し、ならずんば己一人にて責を負ひ、罪に死せんと誓ひ、機に至るをまちしが、不幸、謀もれ囚へらる。この時、同志十餘人、皆自刎せしも、獨、高は、「われ死なば、わが主張敖の、この謀に關せざることをあきらかにするものなし」として自刎せず、あらゆる酷刑に堪へ、百方辯解して、遂に、その主張敖の知らざることをあきらかにし、累を主家に及ぼりし人なり。先生は、常に、貫高を崇拜せられたり。そは、先生の肖像自贊の文中に、心師貫高とあるにてもしらるべし。○益田行相。益田彈正のこと。當時、長藩家老中、第一流の人材なり。行相とは、長藩にては、當職當役といふ家老中の要職あり。當職

は國事を總攝する故に國相といひ、當役は藩公補弼の任にして、江戸に従行す。よつて、これを行相といふ。○連亡、○ホバウ。にげさること。○師旅。シリヨ。五百人を旅とし、五旅を師とす。こゝにては、人員にかゝはらず、單に、軍勢といふ意。○憤懣。フンモン。いさどほりもだゆること。

【通解】 けれども、事はもとより、私にしてはならない。といつて、また、すすんで、間部下總守襲殺のことを、公に願ひはしない。かの趙の貫高が、「事が成つたならば、王の功とし、失敗したならば、己一人にその罪を受けて、死すべきである」といつた如くに、間部下總守襲殺の功をあげ得たならば、毛利家の功とし、失敗したならば、一身に罪をひき受けて、毛利家へは、すこしも心配をかけない。これが私等の志である。かくのごときわけだから、私等は、おつつけ、某日を期して、同志の者とともに、益田行相の家に至り、わけを告げて出發上京せうとします。強ひて、その許可は求めません。藩政府は、私を待つに、蟄居謹慎中なるにかゝはらず、藩を脱走したといふ罪を以てしてよろしいので、もし、間部下總守を、首尾よく打ち取ることが出来たならば、軍勢を繼ぎ進めて、義旗を翻すべし。不幸にして失敗し、他人は自殺しても、私だけは身を投げ出して捕へられ、この事は、志士の憤懣に堪へずして企てたことで、毛利家の命を受けたのではないといふことをあきらかにさせよう。

頑兒虛弱狂暴、本不在人數中。天下反有謬聽虛名、認爲豪傑者。向以愚論數道、致之梁川緯。緯窃讀上青雲之上。蓋經乙夜之覽云。一介草莽區區姓名、蒙聖天子垂知、何榮加之。兒死何晚也。近日正三位源公、以七生滅賊四大字見賜。且傳其世子詩數章、望高德、望博浪鐵椎、其意甚切。兒豈可不死哉。

【注解】 梁川緯。梁川孟緯なり。字は公圖、星巖と號す。孟緯はその名なり。最も、詩をよくす。外交の事起り、幕政亂るるに當り、慷慨の餘、詩を賦して時事を諷れり。天下勤王の士交を結ぶもの多し。○愚論數道。愚論二

三といふほどの意なり。先生の愚論・續愚論・對策等を梁川星巖に贈られたることは、久坂義助に與へられたる先生の書翰中に見えたり。○乙夜之覽。イツヤノラン。天子の讀書遊ばさるるをいふ。唐書に、天子は乙夜を以て、讀書の時と定められたりとあるに出づ。○乙夜とは、一夜を五分して、甲・乙・丙・丁・戊としたる名にて、午後十時をいふ。○一介。イツカイ。一夫の義。○草莽。サウマウ。仕官せずして、野に居るものをいふ。○區區。小なる貌。○正三位源公。正三位大原重徳卿をいふ。姓は宇多源氏、よつて、源公といふ。夙に、幕府の専恣にして、皇威の振はざるを慨き、日夜勵精して、王事に竭せり。先生は、時事に關して、屢々、その意見を大原卿に呈せられたり。○世子詩數章。世子は貴人の嫡子をさす。詩數章とはつぎの三詩をいふ。「江南霸氣已凌夷。正是中原逐鹿時。不得英雄若高德。與誰共起勤王師。」呼天慷慨涕如流。正是忠臣致命秋。生若不能清國耻。死爲靈鬼報君讐。「丈夫身死不爲仁。便是獸心人面人。博浪鐵椎今若得。擊頑兒首作微塵。」○高德。兒島高德なり。○博浪鐵椎。ハクラウノテツツキ。博浪は地名、河南陽武縣の南にあり。鐵椎は鐵の槌なり。韓人張良、五世、韓に相たりしが、韓、秦に滅されてより、亡げてその仇を報いんと隙を窺ひしに、たまたま、秦の始皇、東遊して博浪沙に至りしかば、張良、このときなりと、力士をして百二十斤の鐵椎を操り、始皇を撃たしめしことをいふ。【通解】 私は體が弱く、することは狂氣じみてあらあらしく、何等のとりえもない。本來、人數の中にも入らない位である。しかるに、かへつて、天下の人は、實際は、それほどでもない名を謬り聽いて、私を豪傑だとするものがある。向に、私の書いた愚論二三を、梁川星巖翁に贈つたところが、翁は窃に、恐れ多くも、これを朝廷に奉りました。けだし、それは、陛下の御覽を蒙つたといふこととあります。民間の一夫、つまらぬわが姓名、聖徳高き陛下の垂知を蒙りました。身にとつて、これ以上の光榮はない。嗚呼、何故に私は陛下の御爲に死ぬこ

とが晩いのであらうか。近頃、正三位大原重徳卿は、七世滅賊の四大字を書いて、私にくだされ、その上、御嫡子の詩三首を御贈りくだされました。其心は、私に、忠臣兒島高德のなした様な事をやれ、また、張良が、博浪で、始皇に鐵椎の一撃を加へたやうな事をやれよと望まれたので、甚だ切てあります。私は、どうしても、一命を捨てて、間部詮勝等の如き頑兇者に、一撃を加へなければならぬ。

不孝之子、唯慈父愍之、不弟之弟、唯友兄恕之。定省怡怡、不能復罄膝下之歡。願割愛抑友、以兒爲死已久矣。尋常之親肢、身體髮膚、併以見賜、頑兒之願、何以加焉。泣血漣漣、不能竭所思也。頑兒矩方泣血拜白。

【注解】 定省。テイセイ。尊を定め、安否を省ること。朝夕、よく、父母に孝養をつくすをいふ。○怡怡。イイやはらぎよろこぶこと。○罄。ケイ。つくすとよむ。○漣漣。レンレン。涙の流るる貌。

【通解】 親不孝の私、唯、慈愛深き父上よ、不愍と思召せ。弟の道をつくさな私、唯、兄弟の情に厚き兄上よ、これを許し給へ。今や、私は、義のために一命を捨てます。されば、もはや、朝夕孝養をつくし、和き悦んで、再び、親の膝下での歡樂をつくすことが出来ませぬ。願はくば、子を思ふ心をすて、兄弟を思ふ心を抑へられ、私は遠くの昔に死んでしまつたものとして、御諦めください。普通並並のこの身、身體・髮膚を併せて、私にくださつたならば、私の願は、これにこすものはありません。この永訣にあたり、悲泣極り、落涙雨の如く、思ふをいひ竭すことができません。頑兒矩方泣き悲しみ、つつしんで、これだけのことを申しあげます。

以上は、校長の命もだし難く筆にせるもの、余の淺學、十分に、文意を解く能はざるを憾む。且、匆忙の間に筆をとりたることとて、不備の點なきを保し難し。讀者、幸に、これを諒せよ。

松陰逸事

特別會員 安藤 紀 一

緒言

舊長藩の御膳夫たりし世良利貞は、好學の士にて、其筆録に有益の事多く、日記にも珍しき節少からず。その嘉永七年九月十八十九兩日の條に、吉田松陰先生の事を記せるは、往往實を失へるが如き處あれども、先生の性格をよく述べ、且つ當時先生に對する藩府の取扱、傍人の態度を詳にせるは、さすがに、未だ他書に見ざる所なり。今これを抄寫して、事實上疑はしき所には、先生の書翰、年譜、回顧録、及び、米人側の日記など、正確と思はるゝ書に就きて注記し、未見の記事には困點を施し、これを松陰逸事と題して、家に藏す。

世良利貞は、俗稱を孫槌といふ。仕務の傍、國學を修めし人なり。其人物は、嘉永五年五月、松陰先生屏居中、江戸なる山縣半藏(後の穴戸環)に與へし書牘中にある左の一條にて知らる。

阪港發舟。同舟者麻布邸に居候膳宰世良孫槌。頗通國史國語。且其人物卓立塵外。不野不恠。眞有爲之人。船中之興不斜。

大正二年十一月十八日

後學 安藤 紀 一

○世良利貞日記(嘉永七年九月十八日十九日ノ條)

十八日 法鏡院様御産土神永田大明神(御屋敷内天満宮ニ御相殿也)御祭日なれども、吉田大二郎といへるもの御預ケになりて、此御屋敷内に置かれける故、御祭御延引になりぬ。此大二郎が事は、次々にいふべし。

十九日 御留守方手元役檜崎彌次兵衛より、法鏡院様御殿裏老役へ、左の如く言來る。

浪人にて杉百合之助致厄害置候吉田寅二郎元足輕欠落者重之助兩人昨日御預ケニ相成御引渡相濟候ニ付其御屋敷ニ被召置候此段爲御承知得御意候已上

九月十九日

志道主水様

湯淺速水様

檜崎 彌 二 兵 衛

此吉田大二郎といへるは、代代軍學をもて業とする家なり、大二郎ハ、もと杉氏にて、吉田家の養子となれり、片眼にて、顔には疤痕の跡多く、至て見苦し。

紀按、片眼には非ざること、故父の皆證言する所。利貞一回面會したるのみにて、他の人と覺え違へたるか。且常に匱衣匱服を着、月代の長さも厭はず、髮の亂れしにも拘らず、其體世人とは大に異なれば、是を笑ふもの多かり。されど、其性剛勇にして、記憶強く、才智衆に超え、並並の軍學者流の類には非ず。何も、よく實地を踏で、名を求むる意なく、又、學びの力もありて、辯論よく、利害を説て人を感伏せしむ。是によりて、志あるものは、其才に服して、従ふもの亦多かり。此時年は二十五歳なり。さて、先年も、軍學稽古のため、江戸に來り、櫻田屋敷に居ける時、細川侯の藩某とともに

紀按、これ宮部増實俗稱鼎藏の事なり。

水府に行きて兵道を學び、夫より北國を廻りぬべき由を約し、其由を願ひたりしに、最早その許さるゝ期にもなりしかども、いかなる事にや、御國より御免の事御沙汰なし。(此時は殿様御國に在ましける故御國に伺ひしなり又は御免の沙汰はありしかども過書といへるもの未だ來らざりしともいへり左もあらむと思はる)是によつて、大二郎は、約し置きたる日も過ぎぬる故、押して水戸に行かむといひけるを、その友なる人人止めて曰へるは、未だ御免の沙汰もなきに出てむこといかなり」と諫めしかども、大二郎用ゐずして曰へるは、此事は、いつぞやより、内内ながらも伺ひしに、御免あるべしとの事なりし故にこそ、他家の藩と約したれ。さるに、其日限も多く過ぎながら、今に表向の御免もなしといはるゝ、我國家の政道は信あらしとて、餘國の人に議せられむと、我本意に非ず。身を捨て、人も、國家を思ふは、臣たるの道なりとて、政府には、暇をも乞はずして、御屋敷を出てたりしとぞ。(元より、御屋敷を出づるには、常にても、切手を附て出入すべき理なれども、此者は、稽古に來り居し事ゆゑ、切手なく出入せしなり)扱細川家の藩士と共に、水戸に往きしに、彼所にて、其材智を稱せられ、益々兵學をなして、北の方を巡り、御屋敷へ歸り來りしに、もと政府に暇をも乞はずして私に出でしゆゑ、欠落といへる沙汰になりぬ。さはあれど、彼は餘の欠落者といへる類には非ず。兵學の爲に出でし事は明なれば、先づ組の者二三人を添へて、御國へ返されたり。(是は嘉永五年子の春の事にて、己も此年御番手濟て、御國へ歸らむと、甲州路より木曾を経て、大阪に出でたりしに、大二郎は、東海道を経て大阪に出で、思はずも爰にて面會し、同舟にありて歸りしなり)

紀按、これ緒言に附記せし松陰先生の書翰中にあり。さて、御國にても、政府に、大二郎が、御暇を賜はらず、過書なども下されざる内に出でしは、其罪ありとはいへども、其才智勇氣の人に勝れたるをや惜み給ひけむ、同

年の夏、家祿をは没收しながらも、

紀按、五月十二日の歸萩にて、家祿没收は、十二月八日なり。是時、寅次郎と改稱せり。猶も當役衆よりの過書を賜ひて、再び學の爲にとて、諸國を巡りぬべきの由を命ぜられしとぞ。(こは、大二郎よく學びて歸りなば、其功をもて、始の罪を赦し、家祿をも返し與へ給はむとの、政府の深き慮なるべし。)

紀按、遊學許可は、翌丑の年正月十六日なり。

是によつて、再び江戸に出て、何かしとかや、兵學の譽ありける浪人に從ひて學びしとぞ。(大二郎、初め江戸に來りし時も、此者に從ひて教を受けしやいかゞや知らず)此浪人、後には眞田の藩となれり。

紀按、この兵學者は、佐久間象山のことにて、父祖以來、松代藩眞田家の臣たり。松陰先生は、前前年、始めて從學せしなり。

さて、大二郎、表向は、御暇を賜はりたりし浪人の身なれば、江戸にて、御屋敷へは來るべき由はなけれども、内々にては來り、政府にも出てし事もありしとむ。然るに、翌丑ノ年、亞墨利加國の船、相州浦賀に來りし故、江戸大騒にて、諸侯をして、所々の海岸を固めさせられ、此御方にも、大森御臺場に御人數を出して、且つ、夷船、江戸の内海に乗り入りなば、殿様にも、直に御出馬ましまして防ぎ給ふべきの旨、幕府の命を奉り給ひしかば、早飛脚にて、御國へも言ひ來りぬ。されば、御國の先鋒隊の者、夜を日に繼て馳登りしに、此輩は、いづれも、血氣剛勇の若者どもばかりなれば、江戸に來りても、我儘のみを専として、わざと大騒きをなし、人のいふ事を更に聞き入れず、高聲に笑ひ罵り、舞ひ踊り、心の儘に騒ぎて、禮もなく、傍若無人とかいへる有様なれども、もしや、夷賊ども、内海に乗り入り、殿様御出馬ありぬべき時は、かゝる者ならては、叶ひがた

ければ、政府にも、先づ其儘に差し置かれける儘、彌々わが儘に募り、心の儘に振舞ひける故、行逢ふ人は、道を譲りて通るばかりなり。さばかりの者どもなれば、誰がいふ事も用ゐざれども、御屋敷に訓練などするときに、此大二郎が言ふことをば、一言も背く者なく、皆謹んで、その差引に隨ひしとぞ、是等にて、大二郎が才智に勝れて、且、軍學にも長せしこと知られぬ。其後亞米利加も歸りて、江戸も漸靜になりしかば、大二郎は江戸を出て、諸國を廻り、終に九州に至り、熟く思ふやう、西洋人等が砲術と、且は船に長じたるは、實に、我國の人の及びがたき所なり。願はくば、僞て一旦彼に從ひ、彼が國に至りて、それより、萬國を巡り、其國々の陣法兵學、火術など、各其長じたる處あるを學び得て歸りなば、大に皇國の益たるべしと思ひ立ちしが、其比、魯西亞船、長崎へ入津せしゆゑ、是に乗らむと

紀按、嘉永六年七月、露艦長崎に來り、先生は、九月十八日に、江戸を發せり。航海の志は、江戸を發せざる前に決したりしなり。この時に、象山旅費を給し、且つ送別の詩を贈りたる由は象山年譜に見えたり。

ひそかに謀りしかども、其方便を得ず。かくて、

紀按、先生は十月廿七日長崎に至りけるに、露艦已に去れるゆゑ、熊本を経て、十一月十三日、萩に歸り、更に出發東行して十二月廿七日、江戸に達せり。

日數経る内に、一度江戸に歸りなむと思ひしかども、貯へ持ちし金銀盡き果て困窮せしかば、せむ方なく、彼眞田家の藩となりし兵學者の許へ、云々の由言ひ送りしかば、彼兵學者も、大二郎が大才にて、且常に信義あるを感じ、金銀の用意して、自ら迎に行き打つれて、江戸に歸りしとぞ。是は、今年の春の事なるべし。

紀按、是れ、前の旅費給與の事を誤傳したるもの、又、象山長崎に往くなどは、勿論跡かたなき事なり。さて

其比亞墨利加夷、再び浦賀に來りしかば、

紀按、浦賀に非ず、横濱沖なり。

大二郎は、先づ、一旦彼の夷船に隨ひて、彼の長ずる事どもを學びたき大志止みがたく、其由を語りしかば、眞田家の兵學者も大に感じ

紀按、松陰先生外遊の志を、象山の知りしは、前年九月に始まりしこと、已に記したるが如し。

さらば、先づ、アメリカ夷に降るべき間、迎の舟を遣はすべき由の書翰を彼舟に遣すべし、そは、我ら書くべしとて、自ら書きて渡せしかば、

紀按、象山の書きしは、浦賀の組同心吉村一郎に遣はす添書なり。松陰先生、これを持って、吉村に面會し、外人に近づく便宜を得んためなり。外人に與ふる書は、先生自ら草して、象山その數字を訂正せり。

大二郎大に悦び、是を帯びて、重之助(是も元は此御屋敷の足輕にて、才智ある者なり。大二郎と共に、軍學をして、自ら思ふ様は、今アメリカ夷或は魯西亞夷など屢々來るものは、必ず、皇國を犯さむと謀るものなるべし。今こそ穩なれども、やがて、合戦の起らむこと計りがたし。然るに、我歩卒の身にては、さる時とても、功を立つる事難し。されば、いづれへなりとも仕官して立身せむとて、御屋敷を出てしものなり。)

紀按、重之助ハ、始め、松陰先生の友なる、肥後の人永島三平に従ひて學び、因て先生の議論を聽き、大に感じて、遂に、これに従へるなり。

といへる者と共に浦賀に赴き便を窺ひしとぞ。其頃、亞墨利加夷等が願ひの事ども御許されも有るべき由にて、皇國と、既に親和ありければ、夷人どももバッテリーといへるものに乗りにて、心安く、浦々を見巡り遊びありき

ける。去る折をや窺ひけむ、大二郎、竊に、彼書簡を渡しければ、夷人これを持歸り、船將ベルリといへるものに見せたりしに、

紀按、外艦横濱を抜錨して下田に至りし後に、先生等二人下田に至り、上陸の外人に書を渡ししなり。今皇國と和親を取り結ばむとする折なるに、かゝる不義の降參者を本國に連れ歸らむは、皇國に對しいかゞなりと思ひしにや、又は皇國を疑ひ、大二郎重之助を問者なりと思ひしにや、迎の船をば遣さて、此書簡を浦賀奉行の許へ、云々の事なりとて送りしとぞ。大二郎重之助かくとは知らず、數日待ちぬれども、迎の舟も來らざれば、如何なる故かと心いらだち、小舟を求めて、兩人にて、夷船まで乗り行き、云々の由を言入れしに、異賊等、大二郎等が面體尋常の人ならざれば、疑ひて、舟に乗せざしとする故、大二郎等、異心なき體を現さむとて、大小刀をば乗り來りし船にぬぎおきて、からくして、夷船に乗り込みけれども、夷人は、猶受け引かずして、返さむとしける。かゝる紛れに、始の、大二郎等が乗り來りし小舟は、調度大小刀共に、汐につれて、浦賀の方へ流れ行きしゆゑ、夷人等兩人をばバッテリーに乗せて、浦賀の濱邊に揚げ置きしぞ。

紀按、日本の譯官、米艦に赴きて、松陰先生等二人の舉動を問ひたること、又た、米艦より、一士官を上陸せしめて日本官人の處に至らしめ、提督を始め各士官等は、決して、妄に、日本政府の許可を受けざる者を軍艦に乗込せしめ日本政府の信用に背き若くは條約の精神に違ふことを爲すが如き意あるに非ざることを申明せしめたること、ベルリの遠征記に見ゆ。又た、先生等二人の來艦は、米人を欺かむために企てられたるには非ざるかの疑念米人間に起れりし由、そは、日本の法律は、國人の外國に赴くことを禁じたる故に、米人はその法を守るべく、日本人の海外密航を助くべきに非ず。米人が果してこの法を守るかを試みむが爲に、かゝる詭計

を企てたるなるべしとのことなり。是事スバルディング氏の日本遠征記に見ゆ。又た、二人の内一人は、一口の短刀を佩び居たりし由ベルリの遠征記にあり

又按、刀を舟に残し置きしは、事實なれども、異心なきを示さむとて、留めおきたりし由は、松陰先生の自記には見えず。外人が先生等を近づけまじと、その小舟を衝退けむとするゆゑに、辛うじて、身ばかり、船の梯子段に飛び乗りたるがために、刀其他の物をも持ち行くに違あらざりし由にかけり。

又按、パツテイラは、梯崎の海岸に着けたるなり。浦賀には非ず。

兩人とも、是非なく、浦賀へ歸りて見れば、御奉行所より、注々に高札を立てられて、其文に、云々の大小刀、云々の調度、書籍の類のあなる小舟、此港に漂着せしかば、奉行所へ取り上げ置きたり。ぬしあらば、來るべし。渡し違すべきとの事をしるされたり。二人是を見て、扱は、我等が舟の、此處へ流れ寄りしかと驚きながら、竊かに様子を尋ぬるに、始め異賊に送りし書簡も、賊將ベルリより、御奉行所に送りしかば、眞田家の某が書きし事露れて、江戸にて捕へられぬと聞えしかば、兩人大に悲み、此秘計を行ひし三人の内、師は既に囚れとなり、我等二人かくて有らむこと、心の外なり。其上、大小刀も、人の手に渡り、必要の書籍調度も失ひながら、逃れ隠れむは、武士の行跡にあらず。よし、一旦こそ隠れめ、終には、探し出されて、恥の上に恥を重ねべし。さらば、御奉行所へ、有りのまゝに訴へ出てなば、責めては、師の囚なりとも赦さるゝ事もあるべしといふに、紀按、小舟に留め置きたる荷物中に、投夷書稿、及び象山の送詩ありて、是等はやく、吏の手に得たる故に、象山も咎を受くるに至れるなり。又、幕吏は、先生が横濱に居りしとき、象山の陣所に往來せしことを知り、また、送詩の事ありし故に、先生等二人のなせる事は、皆象山の意匠に出でしかと疑へり。

重之助は、此高札は、我等兩人を捕へむ爲の謀なり。かゝる大罪を犯したる身、いかに願ひたればとて、師の囚も赦されまじければ、一先此處を去りて、事ある時に、一度功を立て、それをもて、師の囚を赦さるゝやうに願ひなむと勸めしかども、大二郎聞入れれば、爲ん方なく。二人ともに、或る民家に立入り、

紀按、梯崎村の名主に、先づ告げて後に、下田の番所に往き、糺明の上にて、縛に就きたるなり。

其家の主をもて、御奉行所へ訴へしかば、即ち召捕へられて、江戸へ送られしとぞ。御糺明の時も、兩人ありのまゝに申して、其偽らざること顯れしかば、さして御咎もなく、もと、御國の籍なる故に、此御屋敷へ返さるゝ事になりたり。其日請取として、井上七郎三郎(物頭)豊田文右衛門(御中間頭)其外組の者多く町奉行所まで行きぬ。物頭御中間頭は麻上下なりとぞ。さて御奉行處にて、呼出す聲につれて、大二郎奥より出るに、下著の衣も揃ひの襟にて、上には、黒羽二重を著、上下を著、月代は長けれども、髪よく結びて、其出立いと清らかなりしとぞ。(大二郎貧窮なりし事は、上件にいへるが如し、さるに、かゝる衣類上下などの有るべきやうなしといへども、事ある時の役に秘し置きたるか。又は幕府の役所より賜はりしものなるか。)さて、大二郎、此方の人々に向ひ四人の事なれば、綱をかけ給へと強ていひし故、假に、細き綱を、大二郎が腰に纏ひて、駕籠に載せしなり。其次に、重之助を出して、御改め受取らるべきと事ゆゑ、足輕重之助に相違なき由を言ひて受け取りぬ。此重之助は、久しく病みたと見えて、腰も立たず、いたく勞れし體なりとぞ。夫より、兩人共に駕籠に載せ、錠をおろし。(此駕籠は此方より持ち行きしなり)大小刀をば、刀箱に入れて持ち、駕籠の廻りは、多人數にて取巻き、物頭先乗をなし、御中間頭はあとより歸りしと云。眞田家の兵學者某も、今日眞田家に御渡しに成りし由、此者は衣服なども、大二郎が如くにはあらで、甚見苦しく、受取の役人も一人にて、踏込み、尻割羽織を著たりしと

ど。大小刀も、刀箱へは入れず、風呂敷に包み、物毎甚重なりしといへり。町御奉行所の門内に、駕籠三挺あり。こは大二郎重之助並に眞田家の某と三人をこゝまで乗せ来りし駕籠なるべし。今までは、異所にて、圍ひ様の物の中に入れても入置きしならむか。大二郎當御屋敷(麻布なり)上馬場の固屋を矢來にて厳しく圍ひ入れ置き、無給通の侍並に組の者など、多人數にて守り居たり。御目代の方よりも度々廻りもありて、甚嚴重の事なりしとぞ。(眞田侯にては、さのみ嚴重にもさせられずして、直に、御國へ下し給ひしとぞ。さて、まだ夜の内に御國へ下し給ひぬ。公儀所本締武弘太兵衛同じく介添幾森一郎治、御陸目付梶山文左衛門、御中間頭豊田又左衛門、其餘組の者數多付てかへりぬ。

紀按、松陰先生、三月二十七日に外船に往きて志達せず、四月十日下田を發し、十五日江戸に入り、傳馬町の獄に投じ、九月十八日獄を出て、數日間麻布にあり、十月二十四日萩に歸着し、直に野山獄に入りたり。付て云、大二郎此御屋敷に居ける時、腰へ綱を付けて、自由には立ちがたき様にして置かれたりしに、大二郎いへるは、此腰に付し綱は、解けば解かるゝものなり。もし、其罪の者迫りて、此綱にて縊り死したならば、如何すべきか、すべて、囚人を、かゝる圍の中に入れて、其上にも綱を付くると云事は、皇朝の古法にもあらず。今江戸にて、武家の法にもあらず、いかなる事にや。但、此御家のみに、かゝる法もある事にやと言ひしとなむ。又云吉田大二郎、後には、寅二郎と改名せしなり。

石田海軍少將講話要旨

飯村 尾 定 治 筆記

生徒諸子、私は今校長から御紹介にあづかりました石田といふものであります。今度、本縣同業會よりの希望を以つて當地に參つたのであります。勿論、御承知の通り、海軍の方に務めて居りますので、海軍側を代表して、海軍軍人志望者の獎勵に參つた次第であります。偕、私が此處で申す迄もなく、生徒諸子の中、殊に五年四年の諸子に於ては、各自將來の目的を定め、之に向つて奮闘しつゝあるてありませう。然し、中には、今尙確固たる目的を定めない人もあるかも知れん。若しかゝる人がありますならば、其人たちに私の希望があるものであります、熟々世界の大事を考へて見ますに、今や、列強は表に平和を装ひ、裏は兵備完整に汲々たる有様で、殊に有爲なる青年士官の養成に務めて居ります。抑々武備は戦争するを主眼とするのではなく、國家の平和を永遠に維持して行かうと云ふが第一の目的であります。故に内には兵備の完全を計り、各方面の業務に従事し、殊に海外に發展して、富國を計るは國民として一日も忘れてはならぬ事であります。我國の事情としても、今後、領土内に活動せんとする事は不可能な事で、是非海外に發展せねばならぬ事は、もとより諸君の既に認めて居らるゝ所であります。今後、諸君が、如何なる方面に向つて國家に貢献せらるゝかは、諸君の考に依つて異なる所でありませうが、殊に海外に出てんと欲する人々の爲には、自分等の職務に對して、強固なる後援者が必要であらうと思ひます。其後援者たるべき者は海軍の外になにがありませうか。かの歐米諸強國民がどしどし海外に出て活動する事の出来るのは、彼等の後に強き海軍があるからであります。是に於いて武力の必要が起るのであります。

我防長二州の歴史が明かに示せるものは何てありませうか。即ち勤王と云ふ事でありませう。然も防長二州の人々の血液が、如何に、軍人となつて君國の爲めに盡すのに適して居るかは、歴史に照して判然と了解し得られるてはありませんか。縣下出身の者で位地ある人々は多くは軍人でありませう。諸子がかゝる特長を有せる父兄の血液を受け繼いで居るのであります。吾人が熱心に業務を勵んで、國家の爲めに盡さんと思ふ心は、全國民を通じて皆同様でありますが、其目的を達する早道は、各自の性質に適した方面に向ふこととあります。關東或は畿内の人々が實業に適して居る如く九州にせよ、四國にせよ、各々特長を有して居るのであります。本縣人は、歴史も示し、又先輩諸氏も、武人となるのが最も適して居ると思つて居られますから、諸子の中に、まだ目的が定まらない人があるならば、私は切に海軍軍人たる事を勧めたいと思つて居られます。さて、軍人となるには、陸海軍の二方面があります。本縣は、陸軍の方は非常に優勢であるのに反して、海軍側は誠に微々たるもので、これ實に私共の遺憾とする所であります。試に世界の地圖を開いて御覽なさい。英國は實によく我國の情態に似て居るのであります。彼國は四面環海の國であり、且つ世界第一の海軍國であります。これに依つても、我國が將來海軍を發達させねばならぬ事がわかります。諸子は海國男子であります。海を嫌ふことなく、須くこれと親しむべきであります。この短簡なる話に就いても、諸子は、海軍の必要なる點を察せられた事と思ひます。私のいつた所を斟まれて、今後益々體格を練り、以て、各自の目的に向つて進まれないことは私共の深く希ふ所でありませう。次に、海軍の軍人となるべき諸子の爲に、參考になるべき事を、少々御話して置きたいと思ひます。聞く所に依ると、「海軍の入學試験は、體格學科共に六ヶ敷い。全く他の學校と比較が出来ない程である」といふ様な論が中學生一般に行はれて居るといふこととありますが、それは、よく海軍の事情を知らないからの事で、云はば「食はず

嫌ひしてはなからうかと思ひます。實際兵學校は他の學校より六ヶ敷いのではありません。同じく中學卒業程度でありますから、區別する所はありません。そして、殊に、海軍の方は、他とは違つて、中學在學中ても、年齢に達して居れば、試験が受けられるのでありますから、諸子が、在學中、放課後にも、少しづつ補習して置けば、充分通るのであります。之を嫌ふのは、試験が六ヶ敷いのではなくて、其方法手續さがやかましいからだと察せられます。海軍では、一昨年頃迄は、英語、代數國語が豫定點に達して居れば、試験を最後迄続ける事が出来ましたが、近年は、生徒の頭腦が一方に偏して居るものよりも、全體に亘つて善き者即平均した頭腦を持つて居るものを選抜する様になりました。次に、日露戰役後、諸般の事業に改革を施して、海軍も、非常に經費を節約せられたので、今迄は、試験用紙等は皆官費でありまして、試験の出来不出来に拘らず、最後迄與へて居りましたものを、今は、一學科でも、豫定點に達せないものが有つたならば、どしどしはねる事にしたのであります。又他の學校と異つて、軍人の學校は、試験料及用具は官費であり、従つて、父兄の手を煩さない所から、受験者多く、且つ試験の經驗を得る爲と軍醫に體格を見て貰ふ爲とて、受験者が非常に多くあります。かゝる人が多から、従つて落第者が多いのであります。海軍の試験は六ヶ敷い、四千人中百人を採用するのみである」などと心配するは絶対に無用な事でありませう。體格の點に於ては、陸軍よりも稍精密に検査するとは雖も、中學在學中から常に用心すれば心配はないのであります。要するに、不幸にして身體虛弱なる人は致方がないのであります。普通の人なら、中學校時代に、體育學科共によく注意して修練し置けば充分であります。兎に角、諸子はいづれの方面にもせよ、各自に目的を立てられて、國の爲に盡さん事を呉々も望みます。そして、目的のない人は、私のいふ所を察せられて、將來、海軍軍人に志願せられ、武人として、國家に貢獻せられん事を偏に希望するの

であります。是で私の御話しやうと思つた事は大體終つたのですから、是から、校長の御請求になつた、海軍に關する事柄で、生徒諸子の御参考になるべきことを一二御話しませう。諸子が既に新聞紙にて承知せられたる如く、不幸にして青島封鎖艦隊の一軍艦高千穂は、過日、水雷の爲に沈没しました。その原因については、或は機械水雷とも云ひ、或は魚形水雷とも云ひ、説が二つに分れて居りますが、私の信ずる所では、魚形水雷であらうと思ひます。さて魚形水雷の爲であつたとすれば、彼の沈没時間が夜でありましたから、恰も高千穂艦が封鎖勤務中、敵が暗夜を利用して發射したのだらうと思はれます。抑々魚形水雷は驅逐艦の任務内にありまして、之を發射するには、先づ敵艦の年齢を海軍年表によつてしらべて、海面下何尺の處を討てばよいと云ふことを定め、それから發射するには、敵速打照準打雷速打等を用ひて、精密にはかつて、前に定めた點をねらつて發射するのでありますから、理論上からは必ず命中する事になつて居ります。併し軍艦に多大なる損害を與へる點から云へば魚形水雷よりも機械水雷の方が有効であります。此の水雷を用ふるには、先づ敵艦の來さうな所へ無數に装置しておくのであります。そして、潮の干満の關係によつて容易に動かない様に、充分重りをつけてあります。長い月日を経ますと、自然に離れて流れる事が有り、之を浮流水雷と云ひまして、危険な物であります。日露の役後、平和會議で、機械水雷の離れたものは、効力を失ふものたらしむる様規定してあります。で、前申した様に、この水雷は有力なものでありますから、高千穂の如きものでも、容易に沈没せしめるのであります。そして、世人もこの水雷にかかつたのではあるまいかと云ふやうな考を抱くのであります。さて高千穂は、明治十八年、英國の有名なアームストロング會社で造つたものであります。現今のものに比しては、艦底の薄弱なものでありますから、一度水雷にかゝれば、二十枚數位の穴があくのであります。現今の軍艦はダブルボトムと

稱しまして、鐵板がはつて、艦底を堅牢にし、普通の彈丸は防禦板で止め得る様になつて居ります。新式の艦の構造は、先づ縦に長くコンパートメントと云うて堅固な壁があつて、其片方の中央二室に各々汽罐が備へてあります。後方には防禦装置がしてあります。又一方は石炭が積み込んであつて、之で艦の安定をはかるやうにしてあります。彈丸が命中しても、その處ばかりが破れて、其破れが他へは及ばずして、他の諸機械を運轉するに妨ないやうにされてあります。又、近來造艦の術進歩して、巨艦の造られるやうになつてから、砲の如きも段々巨大なるものを用ふる事となり、米國などでは、既に十四吋を主砲とするやうになりました。大砲のする方も昔とは異なり、今は發砲に便なるやうにしてあります。昔のは不便さはまるもので、一度發射してから、八分乃至十五分もかゝつてやつと二度目が發射せらるゝ位で、そして、右舷なら右舷のみしか討たれなかつたのであります。今は左右自在に廻轉が出来るやうにしてあります。又、巨砲をすゑるやうになりましたから、艦の安定上、艦底の装置を改め、速力も早くなり、タービンを用ひ、推進器も多く用ひるやうになりました。今はほとんど理想に近い艦を造る事が出来るやうになりました。長い御話で聞き取りにくい事もありましたらうが、軍艦の構造はざつと右のやうに進歩したのであります。終りに臨み、諸子の益々意を體育にそゝぎ、學問を修め到處に奮闘して、國家の爲に盡されんことを祈ります。

吉田第七高等學校長講演要旨

諸君、私は、今日、諸君の熱心なる受業振を拜見致しました。此機會を以つて、何か、諸君に御話をする様にとの事でありませんが、村上校長さんは、私の夙に畏敬して居る人物で、必要なことは、既に隨時御話申されたこととてありませうから、別にこれといふ話もありませんが、眞理は誰でも同じでありますから、少々私の心附きを申しませう。

御承知の通り、當今は、未だ嘗てあらざる世界の大動亂で、歐洲の諸強國が、鎬を削つて奮闘してをる有様は物凄くもありまた目覺ましくもあります。そして、これは、應て、世界に大いなる時機を生ずるてありませう、又我國の地位にも、大いなる變動を起すこととてありませう。

今日世界の進歩の有様を考へて見ますると、以前は、英國が世界の中心となつて、覇を唱へてをりましたが、現今は、獨逸が勃興して、世界の中心點となりました。獨逸の發展は實に偉大なもので、此の度、英國が、獨逸に戰を宣したのも、獨逸が白耳義の自由を蹂躪したと云ふことが大いなる理由ではありませうが、其のみではなく、獨逸の發展が、英國にとつて心地よくないといふことも一大原因となつて居るのでありませう。今度の戰爭で、獨逸は或は頓挫するかも知れぬ。そこで、私は、この次の世界の中心點は何處であらうかと考へました。英國の前は佛蘭西、佛蘭西の前は西牙が世界の中心でありましたが、今度は、其の順番が、この日本へ來はすまいかと思ひます。果して然りとせば、我國民は大いに奮發せねばなりませぬが、殊に、第二の國民たるべき中學生は一層奮發せねばなりませぬ。幸に、いや寧ろ氣の毒なことであるが、歐洲の文化は今中止して居ります。此の間に、我國は驅足て之に追越さねばなりませぬ。それには、學問を發達させねばならぬ、實業を盛にせねばならぬ、又大國民たるの襟度を養成せねばなりませぬ。實に當今の青年の任務は重大であります。併し、獨逸が

英國を凌いで來た様にすれば、必ずしも六ヶ敷いことではありますまい。日本も世界の中心となれないことはあるまいと思ひます。併しゆつくりして居てはいけません。全力を注いで、西洋から教へられたり習つたりすることのない様に力めねばなりませぬ。

鹿兒島邊の學校を見ますと、一時は、學生の氣分が少々弛んだ様な觀がありました。山口縣と同じく、維新の元勳を多く出した處で、自尊心が甚しかつたといふものか、自惚心が盛んであつたものか、兎に角油斷してゐたらしく、それが爲に甚だ振はなかつたのであります。而し、近來は大いに奮發しました。油斷して居る間に、他縣人に追ひ越され、これではいかぬと、こゝに自覺を生じたのであります。殊に、中學生が奮發しました。陸海軍へ志願した者で、合格した者は、全國で第一でありました。高等學校も恐らくは第一だらうと思ひます。奮發すればそんなものです。

私は鹿兒島に居りはしますが、決して、自分の居る地方だからといつて、無暗に褒める様なことはしませぬ。悪い所があれば、どん／＼指摘します。昔の人が偉かつたからなど思つてゐたら、其こそおしまひてあります。昔、羅馬の Катт と云ふ人が、一平民に向つて、「吾々は貴族、お前等は平民、つまらぬではないか」といつて嘲つたところが、其の平民は、「勿論、私共は平民ですが、今、貴族にならうとして居るのです。」と對へたといふ話があります。誠にこの通りで、昔の事ばかり思つてゐては駄目であります。日本國民も、奮發すれば、世界に覇を唱へることが出来ます。之に就いて、前申す通り、學生の任務は非常に重大でありまして、或は其荷が餘り重過ぎはせぬかと思はれます。現今の日本の學生は、氣の毒な程學課が多い、餘り負擔が重くはないかと云ふ者もあります。一應尤もの様に聞えますが、日本が、世界の強國に伍するに必要なることの多く積み上げられて

ある此の際、どういふ風にやれば経済的であるかを熟知すれば、左程六敷いことではあるまいと思ひます。即ち腦力の經濟が大切であります。吾々の腦の中には、益にたぬい、いや却つて害になるものがあります。此は早く除かねばなりません。喩へていへば、家を構へて暫くすると、ガラタタ物が澤山出来る。この邪魔物は賣つて了ふか、棄てるか、早く始末をつけねば益々殖えます。吾々の身體も同じことで、不用物は早く排泄せねばならぬ。是と同様に、腦も、腹がたつとか、或は及びもつかぬことを考へるなど、役に立たぬ事は一切棄てねばなりません。心配しても甲斐のないことを思ふなどは愚の至りであります。落第する様なことはなからうかなどと心痛するは無益のことです。即ち未來過去の事は不用のことなれば、直ちに棄て、現在に地歩を固めることが必要であります。

昔、支那のある處で、一人の小僧が、使の途中、過つて、甕を落して割りました。而し、彼は見向きもしないで行過ぎた。或人が、不思議に思つて、「お前は、主人の甕をこわして、何故平氣で見向きもせずをるのか」と尋ねたところが、その小僧が、答へて、「割れたものを見向いたからといつても仕方がないではないか」と云ひましたので、問うた人が非常に感心しました。其後、彼の小僧は果してえらい者になつたといふ話があります。野に咲いてをる百合を御覽なさい。その綺麗に活々と咲いて居る様は、かのソロモンの榮華よりも立派であります。どうして、あの様に綺麗なものでありませうか。それは、花には憂がないからであります。今宵は雨が降るかも知れぬ。それを、花は少しも懸念することなく咲くからであります。決して、未來のことに心配してはなりません。世には、勉強し過ぎたから頭がわるくなつたなどいふ者がありますが、勉強が過ぎて、決して頭がわるくなるものはありません。感情上の障害が最もわるいのであります。學問のこと以外に頭を悩ますなどは、甚だし

い不經濟であります。「憂なければ命が長い」と釋迦も申されました。今年、私の學校へ、非常に年をとつた人がはいつて來ましたので、どうだらうかと心配して居りましたが、やはり眞面目によくやりますから、不思議に思つて、一度呼んで、そのわけを尋ねましたところが、次の様な懺悔談をしました。彼は中學校を六年かけて卒業した。その間學問はほつて置いて、第一には、友達と喧嘩をやつた。第二には、學校と喧嘩をやつた。大切な課業は第二にして、つまらぬ事に力を用ゐました。どうやら卒業はしたものの、學問の基礎は少しも出來て居らなかつた。聽て高等學校の入學試験を受けましたが、勿論合格しませんでした。是に於て、彼は始めて眼が醒めました。今迄馬鹿な生活をしてゐたといふと、痛切に彼の腦裡に響いたのであります。それで、今迄の間として大いに勉強しやうと覺悟をさめ、大いに奮發して、六度試験をうけて、今年漸く入學することが出來たのであります。即ち、中學時代は、全く無意味に過したのであります。「一つ、どうしても諦めることの出來ないのは、私が入學試験に落第して居る中に、父は非常に落膽しながら、昨年の暮に、遂に歸らぬ旅路に赴いたことでありませ」と、今年の成功を、父に見せることの出來ないのを、非常に悔んでをりました。中學時代の不心得は、彼にかやうな憂目を見せてをります。くよくよした思案は、早く水に流さねばなりません。それに就いて面白い俗語があります。「何をクヨクヨ河端柳、水の流れを見て暮す」といふのであります。右から推せば左に撓む。前から推せば後に撓む、少しもものに逆らはない、大丈夫の淡泊なところを歌つたもので、甚だ面白い、味ふべき言葉と思ひます。而し、それ許りではまだいけません。思うて及ばぬことは、さらりと水に流さねばなりません。現在のことは必ず始末をつけねばなりません。今日のことは今日必ずやつて了ふことが必要であります。一つ友達に手紙の返事を出すにも、直ちに書けば、端書で簡単に済むが、二三日も後れると、中々面倒になる。「早速返

事申し上ぐべき筈の處、當時何々の爲多忙を極め、心ならずも延引いたし、何とも申譯無之次第に御座候」などと、手紙でなければすまぬ様になり、心にもなき嘘もいはなければならぬ様になる。農夫が田の草を取る時の面白い歌があります。歌は忘れましたが、その意味は、今日の中に、早く雑草を除いておかないと、明日になると種をおろし、根を増して、とりにくくなり、又、稻の養分を盗むといふのであります。又、釋迦の御經の中に、次の様な話があります。印度では、ヒマラヤ山を千古の雪山といつてをりますが、その白皚々たる雪山の頂に、一羽の鳥が居りました。夜明造巢といふ六敷い名の鳥であります。此の鳥は、晝間、他の鳥がせつせつと巢を造つてをる間は、あちこちと遊び歩いて居りました。さて、夜になつて、他の鳥は、晝間造つた巢の中に寝るけれども、この鳥は、巢がありませんから、木の梢に寝て居りました。だんだん夜が更けて、寒くなつて來ますと、とうとう堪へきれなくなつて、悲しい聲を出して、夜明造巢夜明造巢、即ち夜が明けたら巢を造らう夜が明けたら巢を造らうと云つて啼きました。夜が明けて、日輪が山の端から現れ、だんだん暖くなつて來ると、又、巢を造ることはせないで、遊び歩いて居ります。毎日、斯くの如きことを繰り返してをりましたが、或る非常に寒い晩、寒風は、槍の如くに吹きつけて來ました。彼は非常に困りました。今度こそは、夜が明けたら巢を造らうと、悲しい聲で、夜明造巢々々々と啼き続けましたが、遂に血をはいて死んだといふ話があります。又、西洋の或る處で、小兒が、母親に、明日といへば何ですかと尋ねましたところが、母親は、「夜が明けたら明日が來る」と答へました。夜が明けると、小兒は直ちに「明日は何處に」と尋ねました。母親は、「今はもう明日ではない。今夜寝て、夜が明けたら明日が來る」と答へ、子供は、毎日、明日を捕へんとあせりましたが、明日といふ奴は甚だずるい奴で、いくら追つかけてもつかまりません。その筈です。明日を追つ掛けたこの子供は愚かなものであり

りましたが、豈嘗にこの小兒のみならんやであります。「明日になつたら」と、明日を待つ人は少くないのでありませう。

合衆國に、ピーチャーストリーといふ女が居りました。彼女は、非常に複雑な家庭に嫁いて居りました。嘗て、彼女が、南方の國へ旅行した時、當時行はれてゐた奴隷賣買を實見して、非常に驚きました。同じ人間に生れ乍ら、牛馬の如くに賣買され、六親離別し、親は子を呼び、子は親を尋ねる有様は、眼もあてられぬ悲惨なものでありました。直ちに旅行を中止して歸り、どうかして、奴隷賣買をやめさせる方法はないかと、獨り思ひ悩みました。女の身でどうすることも出来ません。せめて、この悲惨なる有様を筆にでも著して、己の意志を發表し、衆人の同情を促さうと思ひたち、小説を作ることになりましたが、思ふたばかりで、なかなか出来ない。屹度今度の月曜からは、本月からはと、幾度も決心するけれども、どうしても暇がない。遂に半年を過ぎました。彼女の家庭は、前申した通り、甚だ複雑で、多人數でありましたから、従つて、食事の際、ベルが鳴つて、皆が打ち揃ふ迄には、幾程か時間がありました。彼女は此に氣がついて、此の時間を利用して、筆を執ることにしました。そして、毎日決して怠ることなく、長年月を経て、遂に、その小説を完成して、出版しました。アングル・トムス・キャビンと名付けられて、何國にも翻譯されてあります。奴隷賣買の悲惨なる状態を描いたこの小説は、多大の興味を以て讀まれ、奴隷は廢せねばならぬといふ深い印象を、當時の人々の腦裏に刻み込みました。リンカーン及びグラント等は、畢竟之が實行者で、南北戦争の結果、奴隷解放の實は擧げられましたが、その動機は、此のピーチャーストリーの小説に負ふ所大なりとせねばなりません。實に我水戸光圀の大日本史、頼山陽の日本外史に比すべきものであります。而かも、この偉大なる力を持つてをる著作は、食事前の短時間で出來たものであり

ます。私共も、十年かけたならば、どんな事でも出来ぬことはなからうと思ひます。學問の獨立など、近頃は八釜敷くいつて居りますが、國內で發明して、間にはせなければなりません。到る處にあるあの電球の心は、現存のトーマスエジソンの發明であります。あの心は、もとは白金でありました。然し、白金の如き高價なものは、一般人の使用に適せぬので、どうにかして、廉價なもので造りたいと、炭や石炭で、種々苦心して見たが、どうしても出来ませんでした。あれやこれやと考へた末、或日、彼の頭の中に、電の如く閃いたものがありました。それは、竹の纖維ではどうであらうかといふことでありました。元來、この閃きと云ふものは、偉い人でも凡人でも、一樣に來るものでありますが、唯、凡人は平氣で見逃し、偉い人は直ちに之を捕へるのであります。けれども、天は、なかなか、容易に、人に寶を渡さない。先づ、身志を苦しめ、體膚を勞し、其の身を空乏にした後でなくては與へません。四年五年と研究してもまだ出来ません。親戚朋友等は失望しました。が彼エジソンは決して失望することなく、遂に、その發明を成遂げ、專賣特許として、あまねく世界に賣り出しました。私は彼の如きを現代的偉人と謂ひます。かの豊公那破翁の如きは、實際には、一つも、私共の役に立つところはあります。エジソンの發明は、六百も七百もあるとのことであるが、私は、この電球の心だけでも實に偉大なものであると思ひます。かの佛敎には、佛と謂うは、三十二相八十隨形好と具し、其内の一つとして、眉間に白毫といふ者が有つて、その光は三千大千世界を照すといつてありますが、エジソンの發明が如何に偉大なりと雖も、斯くの如きことは出来まいけれども、慥かに、この世界だけは、毎晩照して居ります。實に偉いものではないか。私共も、かういふ様に勉めたならば、日本帝國を世界の中心となすことは、強ち六ヶ敷いことではありません。殊に山口縣は維新の策源地でもあつた事であるから、決して自惚心などを起さず、大いに奮勵努力した

ならば、日本を、世界の中心となすことの出来る偉大な人物を必ず出すことが出来ると思ひます。これで話は終りますが、始めから、能く靜肅に聽いて下さつたことを感謝します。



校誌

聯合演習

三月四日、歩兵第四十二聯隊行軍して此地に来る。午後一時、全校之を中渡に迎へ、同所に於いて演習を見學す。翌五日、午前七時より、第四五兩學年生徒は、聯隊兵士の間に加り、鶯谷附近に演習を行ひ、三學年以下の生徒は之を見學し、更に、午後一時より、明倫小學校運動場に於いて、同聯隊兵士の中隊教練を見學したり。右終るや、本校は將校に茶菓を饗し、校友會より、手拭百五十筋を寄贈せり。

卒業式

三月十九日、第十四回卒業證書授與式舉行せらる。能美陸軍少將山根朝鮮總督府衛生顧問小倉陸軍大佐野北同中佐石川判事米原實科高等女學校長谷井明倫小學校校長以下三十餘名の來賓あり。例の如く校長は、下瀬一郎君以下卒業生五十九名に證書を、成績優良なる者及び精勤者に賞品賞狀を授與し、戒告の文を朗讀せられ、縣知事代理谷警視の告辭代讀あり、山根氏は、祝辭に代へて乃木大將の逸話を述べ、諸子が將來の修養に資せんとして、氏が親しく視聽せられたる逸事を談話し、深甚なる感動を與へられたり。右終りて、生徒總代加藤萬壽夫君の祝辭卒業生總代下瀬一郎君の答辭朗讀ありて式終る。來賓に茶菓を供し、生徒作品陳列場内に案内して和覽せしめたり。此の日、山根氏は、生徒に示したしとして、氏

秘藏の乃木大將の書翰其他先輩諸氏の書翰を聚めたる横披數卷を一室に陳列して和覽せしめられたり。氏の好意は吾輩の深く感ずる所なり。(山根氏談話の要旨は講壇欄に收む。卒業生) 氏名は卒業生一覽に加へたれば此に舉げず)

知事告辭

卒業の諸子に告ぐ諸子今や中學の課程を修了し卒業證書を受く是れ實に多年精勵の結果にして諸子の喜知るべきなり惟ふに諸子は今後或は進んで高等の學術を修め或は各般の業務に服する等其從事する所固より一ならざるべしと雖も何れも國家の中堅となりて國運の發展を期すべき重大の任務を有し前途遠達なりと謂ふべし宜しく既に修める教訓を服膺し忠孝の大義に基づき益其志操を堅實にし其品性を修養し其業務に盡瘁し以て各其目的とする所を遂行し上は 聖恩に奉答し下は父祖の囑望に報いんことを期すべし

大正三年三月十九日

山口縣知事從四位勳二等 馬淵 銳太郎

校長訓告

卒業生諸君諸君は今や首尾よく業を卒へ將に各々志す所に向て去らんとす願ひに諸君は明治四十二年四月を以て本校に入學せり而して予の本校に就任せるは則ち其年五月に在り諸君の本校に来る予に先つこと僅に一箇月のみ爾來五星期予は諸君より長ずること一日の故を以て初りに校長の職に在りと雖も敢て諸君を啓導し諸君を訓練せりと言はず唯諸君と共に學び諸君と共に修めんことを期したるのみ幸に諸君の篤實勉勵なる克く諸教員の懇切なる熏陶の下に學を勵み業を磨き且

年の刻苦終に其功を全うし正に本日を以て卒業證書を受くるの光榮を負ふに至れり予は大に諸君の卒業を喜ぶと共に我若輩依然たるを顧みて頗る慚愧に堪へざる也諸君と此堂に相見る實に本日を以て最終と爲す諸君は是より各々志す所に向て去り潤物江雲何の日か重ねて相見ることを得ん予は平素諸君の爲に謀て言はんと欲する所のものは既に言うて之を盡せり今復何をか言はん、然れども三年の間與に學び與に修めたる諸君と將に手を分たんとするや感慨胸に滿ちて禁ずる能はざるものあり諸君願くは今亦暫く予の言ふ所を聴け、抑今日競争場裡に立ちて苟も一頭地を抜かんと欲する者が卓越せる知識と秀絶せる技能とを要するは知者を決ちて始めて知らざる也然りと雖も男子に尙ぶ所は道義を重んじ廉耻を知るより大なるはなし道義を無視したる知識廉耻を忘却せる技能は無用の長物のみ音に無用の長物なるのみならず社會國家を蠱毒する是より甚しきものあらざる也然る方今の世態を考ふるに利己的個人思想消々として社會の上下に瀰漫し唯一身一家の利害を慮るに汲々として復國家の安危社會の休戚を顧みるに遑あらず士道を重んじ節義を尙ぶの風全く地を拂ひ黄白の前に垂涎し權勢の下に叩頭して耻づる所を知らず慨くに勝ふべけんや當地の先輩が維新の際國事に奔走せるや大に其趣を異にし唯社會國家あるを知りて毫も一身一家を顧みざりし也當年の野村和作氏が其師吉田松陰先生の密旨を奉じて將に京都に赴かんとするや時に年僅に十八家財を賣り拂つて二十兩を獲之を旅費に充てたりと云ふ當時松陰先生彼を送りて曰く爾國精忠十八歳汝家貧士二十金と予は諸君が悉く官吏と爲りて政事に執掌せんことを願はず職業の選擇に關しては其農たり工たり商たるを問はず偏に諸君の好む所に任す然れども世に處し事を行ふに當りては必ず當年

の先輩を學び其意氣と精神とを存せんことを切望せざるを得ざる也試に思へ家に巨萬の黄金を蓄へ身に金印紫綬を佩び高く廟堂の上に翔翔し得とするも或は腐敗漢と譽られ或は破廉耻と嘲られて天下萬衆の指彈する所とならば果して何の名譽ぞ何の幸福ぞ操守道徳者寂寞一時依阿權勢者凄凉萬古達人觀物外之物思身後之身寧受一時之寂寞毋取萬古之凄凉予は古人の言今日に至りて益其意味の深長なるを覺えずんば非ざ予は諸君が居常口に筆に管公の精忠を稱し楠公の大節を讀し乃木將軍の悲壯たる最期を感嘆して已まざるを知る然れども之をして徒に口頭の感嘆筆頭の稱讚に了らしむる勿れ口耳四寸の學は七尺の軀を美る所以に非ざる也諸君は幾多の試験を經來りて其極めて厭ふべきものなることを知了せり然れども學校生活を終ふると共に此厭ふべき試験より脱し得と思はゞ甚憚れり社會は一大學校にして人生は最後まで試験の繼續なることを覺悟せざるべからず古人が丈夫蓋棺事方定と曰ひたるも亦此意に外ならざる也而して社會が吾人に課するものは區々たる知能の問題に非ず或は黄金の光を以て吾人の良心を試み或は權威の力を以て吾人の節操を驗す若し此試験に通過する能はざれば社會は吾人を弾り去りて復顧みざる也諸君は此試験を受けて克く及第の榮譽を贏ち得る自信ありや否や諸君が知識の足らざる爲に畫策を誤り技能の熟せざる爲に失敗に陥ることあらんも未だ深く咎むるに足らざる也若し夫れ社會が課する道徳的試験に落第して破廉耻の遺無節操の嘲を招かば吾に諸君の父母兄弟を辱むるのみならず諸君が在學中校長の職に在りたる予も亦何の面目有つてか社會に對せん切に願くは意を修養に用ゐる事々物々の上に諸君の精神を練磨して怠るなからんことを望諸君は將に本校を去らんとす洩萍浪を追ひ轉蓬風に隨ふ人間の蓬蓬甚容易な

ち予は自今春雨秋風毎に諸君の前途を祝福して已まざる也意餘ありて辭足らず諸君能く予が意を諒するや否や
大正三年三月十九日

山口縣立萩中學校長 村上俊江
受賞者並に賞品次の如し。
銀制時計一個 卒業生下 瀬一郎
右本縣賞與規程第一條第一項に依り縣知事より授與
漢和大辭典一冊 卒業生小 川義雄
同 光本照夫

右入學以來克く校則を守り學業に精勵して一日も懈怠せず且つ伍長となりては其任務を全らし卒業の際成績特に優秀なるに因り前記の物品を賞與す
チェンバース英語辭典一冊 卒業生林 原孝一
同 藤山二郎
同 永松元治

右入學以來五個年同一日も懈怠せず其精勵實に衆生の模範とするに足るに因りて頭書の物品を賞與す
半紙一束 卒業生杉山 顯正 同野上猛三郎
同長谷川 濟 同幸月富士昌 同後藤 琢一 同兼重 政輔
同石津 清 同横田 國香 同重枝 猛夫

右本學年間伍長となり克く其任務を盡したるにより前記の物品を賞與す
半紙一束 第四學年村岡 淺一 同西林 鴻介
同柴田 省三 第三學年松村 正一 同阿崎 隆輔

第二學年倉重 義雄 同宮崎 恒介
同 中本 義助 同木村 幸一
右本學年間精勵し學力優秀にして克く校則を守り且つ伍長となりて克く其任務を盡したるにより前記の物品を賞與す
半紙一束 第四學年横山 繁介 第三學年中村 貞夫
第二學年原 俊人

同片岡 勝資 同松原 淨二 同三木 定治 同加藤萬壽夫
同兒玉 才三 同馬庭 長一 同黒瀬 貞益 同小河 千里
第三學年桑原 仁作 同松浦 梁作 同石井 精一
同森重 靜夫 同大谷 直弼 同高 武夫 同村田 四郎

同吉田 稔 第二學年大野 寛 同岡崎 文次
同仁保 晋 同三輪 杉門 同藤井 健三 同椛木 正利
同三好 忠良 同吉田 一虎 同齊藤 剛 同兒玉 義清
同桑原 芳樹 同熊谷 金伍 同木島 清七 第一學
年河村 宜介 同今田 泰 同友森 茂人 同高木 彦三
同田中 政太 同入江 糾夫 同中村 博 同吉村 潤一

同竹田 浩作 同横山 良晴 同國近 圭三 同金子 武
同原田 信次 同花田 好定 同吉田 博 同滝口 純
同金子 重恵 同小澤 重一
右本學年間伍長となり克く其任務を盡したるにより前記の物品を賞與す
半紙一束 第三學年伊藤 俊光 同中野 常二

同大谷 梓 同中川源三郎 同林 秀生 同村田 副郎
同増野 兼寛 同守永 寛次
右本學年間室長となり克く其の任務を盡したるにより前記の物品を賞與す

賞狀 卒業生石津 清 同松原 義方
同野原 英次 同内田 信平 同植村 美人 同宮國 武爾
同伊藤 實三 同村木 弘 同長谷川 濟 同秋山 節一
同小澤 亮一 同境 三輔 同伊藤 英二 同幸月富士昌
同田中 健藏 同戸倉 吉良 同重枝 猛夫 第四學
年富田 穰 同五峯 作一 同下瀬 幸男 同下瀬 茂雄
同馬庭 長一 同松岡 六雄 同石津 清 同金子 武馬
同田中 英熊 同大津 藤一 同田總 時俊 同兒玉 才三
同武田 滋介 同松井 武夫 同井本 明治 第三學
年原 眞介 同山本 賢次 同池内 久 同藤井 勇
同飯田 剛一 同玉置 一 同阿武 芳輔 同原田 種長
同横山 義秀 同小田安二郎 同石井 精一 同大谷 直弼
同光藤 省一 同村上 俊夫 同行本 盈三 同辻野 有一
同松浦 梁作 同白根 鶴松 同笠井 義助 同國重 爲人
同林 秀生 同大谷 晋久 同野北 祐彦 同杉 義夫
同來多島幸夫 同守永 春一 同末武 清 同山本 悟一
同井上 光 同杉山 良一 同田坂 武夫 同中山 靜夫
第二學年藤井 元治 同高田 豊 同時山 孝一
同岡崎 文次 同須子 基介 同谷村 芳一 同中野 治作
同中津江延彦 同仁尾 重人 同白井 正夫 同齊藤 虎雄

同大谷 義雄 同松尾 剛介 同田村 正吉 同村上 三郎
同伊藤 敏三 同宇野 徳兄 同鈴木 昭夫 第一學
年入江 糾夫 同内野 敏男 同山本 信明 同三山 五郎
同高木 彦三 同守田 義秀 同藤村 六雄 同友森 茂人
同松崎 登資 同吉村 潤一 同和田 義忠 同西永 彰治
同依 武雄 同信常 兼道 同池田 實三 同山本 篤一
同和田 節二 同久保田昇一 同太田 豊 同桑原 松雄
同椛木 秀輔 同平田 繁一
右本學年間精勵したるにより之を賞す

奉悼式

四月十一日、午前十時、縣知事より、皇太后崩御につき、授業を停止し謹慎を表すべき旨訓令あり、校長は直に生徒を講堂に會し、哀悼式を擧げ、服喪の心得方を説示し、各自歸宅して謹慎を表すべきを命ぜられたり。
噫明治天皇崩じて國民の心憂未だ除かざるに、今又此凶報に接す。旻天曷ぞ我邦家に幸せざる。

校長訓話

四月二十七日、放課後、講堂に於いて次の諸件に就きて校長の訓話ありたり。

- 第一、諒闇中に在ることを忘れずして十分謹慎の意を表せざるべからず。御送葬の未だ終らせられざる今日に於いては特に然りとす。
- 第二、禮儀作法を忽にすべからず。校門に入れば、教師に禮をなさいるも不可なしと考ふるが如きは甚だ謂れなき事なり。
- 第三、午後授業の有無に關せず、辨當を携帯せしむる事となせしに就きては、或は其何の意なるかを解せざる者も有らんが、右は放課後に於いて、一般に訓示するを要する事件出来しあれども、午後授業なきに由り、辨當を携帯せざる組あり、爲に已むを得ず後日に廻すなどの事往々あり、不便少からざるを以つて斯くは改めしなり。
- 第四、辨當を教室にて使はしむることとなしたる爲に、麥飯を持參するを厭ひ、菜の長否に心配するが如き者はあらざるか。質素儉約の精神を忘れ、衣食に心を煩すが如き事ありては、第一戊申詔書の御注意にも戻り、甚だ不都合なれば、今後は遠慮なく麥飯を持參すべし。菜は香物にても梅干にても宜しかるべし。
- 第五、衣服用具の華美に赴く傾向あるは歎くべし。脈手なる風呂敷箱蛇目の傘などは決して用ゐるべからず。
- 第六、他人の物品を濫りに使用するもの有るが如し。ナイフ、インキ教科書などの往々紛失することあるは、故意に藏匿するにてはあはまじけれど、濫りに使用するが爲にかゝる結果を生ずるなるべし。嚴に禁戒を加ふべし。

第七、物品を遺失したる者、遺失品を拾得せる者は共に速に届出づべし。

右終りて、星野博士の苦學談を引きて懇々説示せられたり。

學友長の改選

四月三十日、各學友區の學友長及び副長の改選行はれ、左の如く決定せり。

- | | |
|---------------|---------|
| 東菘學友區 區長 田中教諭 | 副長 中村一郎 |
| 第一小區學友長 兒玉才三 | 副長 石井精一 |
| 第二小區學友長 柴田省三 | |
| 南菘學友區 區長 藤井教諭 | 副長 松浦榮作 |
| 第一小區學友長 横山繁介 | 副長 小川千里 |
| 第二小區學友長 加藤萬壽夫 | |
| 第三小區學友長 伊藤好春 | |
| 西菘學友區 區長 倉橋國彦 | 副長 片岡勝資 |
| 第一小區學友長 藤原教諭 | 副長 武林治朗 |
| 第二小區學友長 西林鴻介 | |
| 北菘學友區 區長 齋藤八郎 | 副長 田中英熊 |
| 第一小區學友長 阿部耕 | 副長 五峰作一 |
| 第二小區學友長 長東教諭 | |
| 第一小區學友長 渡邊壽 | 副長 田村尹夫 |
| 第二小區學友長 馬庭長一 | |
| 第三小區學友長 持山太兵衛 | |
| 下瀬茂雄 | |

笹村氏の來校

式の喇叭を合圖に、西川教諭先拜禮せられ、各職員生徒の各隊小使炊夫に至るまで順次に拜禮を行ひ、九時式を終へたり。

七月三日、當地川島の出身にして現に新潟鐵工株式會社事務取締役たる笹村萬造氏は、歸省展墓の序を以つて來校せられ、金堂百圓を本校基金に寄與せられたり。

明治天皇遙拜式

七月三十日、午前第八時より、明治天皇御三年祭遙拜式を講堂に舉行せらる。式終りて、校長は、「とし／＼におもひやれとも山水を汲みてあそばん夏なかりけり」の御製を擧げて、先帝御勤勉の聖徳に就き講話せられたり。

始業式訓話

九月一日、午前七時三十分より、第二學期始業式行はれ、校長より左の趣旨の訓話ありたり。

夏季の休業を終へ、第二學期に入り、諸子の健康なる容姿を見るを得るを喜ぶ。是より漸次季候も良好となり勉強するに適すれば、前學期に成績の不良なりし者は之を恢復すべく、良好なりし者は更に益々良好ならしむべく、共に努力するを要す。今や世界は未曾有の大變亂となり、吾邦も亦干戈執りて獨國と相當らざるを得ざるに立至れり。併しながら東洋の戦局は自ら限界あり、膠州灣を陥るれば、之にて大抵事は終り、我國威は三たび世界に發揚せらるゝに至り、我國家將來の

大葬遙拜式

五月二十四日、午後第八時より、皇太后御送葬遙拜式を行はる。先づ運動場の東邊中央の位置に壇場を設け、大玉串を建て、帷を繞らして三面に圍み葉附の竹を立て、注連を張廻し、西面に門を設けて出入の處とし、壇の左右に大庭燎を焚き式場を照す。校長は御大葬參列の爲上京中なるを以つて西川教諭代攝せらる。各教職員玉木校醫以下職員參列、始

事業は益々重大となるべし。今日の時局に對しては、諸子に餘りに痛念するに及ぶまじけれども、業を卒りて社會に出づる頃は、恰も我國家の事業の重大となり來れり時なるべければ、諸子は今より其覺悟を以つて學問を勉勵し體を養ひ徳を修めざるべからず。

時局講演

九月十日、午前七時半より、講堂に於いて時局講演會開かれ、來賓として栗屋少將、小倉大佐、内田中佐、原少佐、熊谷法學士、淺田郡視學、竹内實科高女教師、信國山内井町の各小學校長、波多野修善女學校長、花村防長新聞通信員の諸氏來會せられ、校長の開會の辭終るや、左の諸氏順次登壇、熱心に講演せられ、多大の利益と感興とを興へられたり。

バルカン問題と埃塞戰爭 教諭 土江知太郎

三國同盟と三國協商 同 西川五郎

要塞戰に就きて 砲兵中尉 近藤友吉

交戰國の準備及び戰況に就きて 教諭 田邊友吉

右終りて校長は閉會の辭を述べ、軍國學生の心得に就きて我輩一同に警告せらるゝ所あり、正午過三十分散會せり。(要領の筆記は講壇欄に載す但近藤中尉、田邊教諭の二氏は精密なる地圖に據りて講話せられたるを以て印刷の都合上遺憾ながら本誌に載すること能はず)

赤星知事來校

十月七日、午前十一時、赤星知事來校、各教室の授業を巡視せられ、十二時、寄宿舎食堂にて舍生と共に午餐を喫し、食後、會議室に校長以下各職員を會し、左の趣意の訓示ありたり。

江、山本、相島の三先生に引率せられて校門を辭し、濱崎なる汽船間屋に行き、諸先生及下級生諸君に送られて船に乗る。時に七時四十分。汽笛一聲船は波を蹴り動き出し、暗澹たる夜色の裡に、吾一行を送るが如くなりし指月山もいつしか見えなくなり、萬頃の波上、唯漁燈の各處に點々たるを見る。角島附近、思の外波高く、二百五十三噸の小汽船はゆりにゆられて、或は高く或は低く、頭は枕上に定らず、身體は船中に展轉せり。爲に船暈に苦むもの哀からず、嘔吐の聲々々として、腥氣人を襲ふ。

一時千秋の思にて、辛じて下關港に着く。燈臺の光、おぼれ目を射て、港の曉景目覺むるばかりなり。暗より明に、明より美に、寫眞の現像を見るが如く、被方此方の工場汽笛六時を告げ、大船小船織るが如し。折から淀泊の軍艦は、如何なる任務を帯びて、將に何地に向はんとすらん。一行は連絡船にうち乗りて門司に渡り、汽車の人となりて、朝霧はるゝ九州地を、南へ南へと下る。海岸には、輪圍船屈せる矮松の各處に林を爲すを見る。時計九時を指す頃、幾多の通色をすぎ、龍南の停車場に着く。嗚呼、昨は指月山下に戯れし身、未だ半日を出でざるに、早く此處に芒鞋を印するを得、文明の惠澤吾人をして轉々歡喜の情にたへざらしむ。此地在留の吾縣出身諸氏より茶菓を饗せられ、繪圖書を贈られ、吾校出身の諸兄より亦各種の贈物を受け、直ちに各處を巡覽す。金島漸く西に傾いて、異郷の鴉海を求むること急なれば、急足にて高等學校、高等工業學校を訪ふ。壯大なる建築物と豊富なる設備とは、此に學ぶ諸兄の日々得る所亦尋常ならざるべきを想はしむ。先づ博物その他の標本を觀る。吾人が將來の參考に資すべき者、多々なりしも、如何せん盧閩の日を度くべき術なければ、口

余は決して諸君の前に訓話などなすを欲せず、又爲すこと能はざるなり。然れども始めて一堂に相會するを得たれば、聊か所感を述べて諸君の參考に資すべし。本校生徒は打見たる所にも、何となく質樸なる所ありて甚だ愛すべきが如し。此地は交通の不便なるが爲に、智識の發達は或は世間より後るゝ事もあるべけれど、堅實なる人物となるには最も適當なるべしと信ず。特に生きたる模範の澤山なる地なれば、諸君が教育を施さるゝには甚だ便利なるべしと思はる。余が赴任の際防長教育會諸氏は特に余を招きて、色々縣下青年教育の事に關して囑せらるゝ所あり。余の意向と大體に於いて一致したれば、不肖ながら、青年教育の事に今後益々全力を盡す考へなれば、諸君も、何事に限らず、所見あらば、階級的の考へを捨て、腹藏なく開陳せられん事を望む。

修學旅行

十月十九日、第五學年生は、土江山本相島の三教師に引率せられ、午後八時濱崎港より乗船、熊本地方に向つて、修學旅行の途に就きたり。一行旅中の狀況は左の紀行に詳なり。

修學旅行記

十月十九日、午後五時、喜び勇める我修學旅行隊五十一名の搭乗すべき陸鼓丸は、氣笛の響勇ましく萩港に入れり。

同行の人々は、放課後、語々愛情に満ちたる校長の訓辭を受け、土

武田 弦介
中山 節郎

惜しくも室を辭す。作業服を着けたる幾多の英士が、珠なす汗をふきふき、實習に従事せらるゝを見る。吾校出身の津田等君の紹介にて、某教授の説明を聴く。東洋第一てふ力を計る機械あり。其の他數多の器械を見しかど一々記憶せず。河崎、三輪、小川君の案内にて、第五高等學校を觀る。時間に餘裕あらざれば、外觀のみを見て去れり。

阿蘇の麓を洗ひて流るゝ白川を、あやうき渡舟にて渡る。遙にのぞむ阿蘇の山、今日は如何にと問へど、白川の水谷もなし。浩々乎として限りなき平原を膝骨痛く行く程に、名にし負ふ水前寺に着く。白くみがける石鳥居、清く澄める池の水、細鱗數多浮びたり。深緑夏の名残を留め、四阿客を待てども此る人もなし。金山全庭芝生に覆はれて、木石の配置人工の妙を極め、富士の形なせる築山ゆかしくも覺えたり。山のあなたに日露戰役に於て、名譽の戦死を遂げられし長岡護全子の銅像あり。此處は魚肉の味名あり、其の味を知らば飽くことなかるべしとにや、自然の黒幕はおとされて、遠く見えたる阿蘇の連山形をかくしぬ。美しく飾れる花馬車に來りて、そが行くまゝに引かれ行く。活動寫眞をみる心地して熊本城に到る。城高くして堀深く鬼將軍の威風を想像するに足る。今は第六師團司令部あり。次いで本妙寺に參拜す。老松古杉天を覆ひ、石段續くこと數町、石燈籠並ぶこと二百基、深より深に入り、暗より暗に入り、老樹古木の間に點々見え隠れする燈明は、人をして宛然他界に逍遙するの感あらしむ。本堂に入れば、點燈幾百、幾多善男善女の讀經の聲たえ入る心地す。拜殿後に丈に餘る自然石あり。是ぞ本寺の本尊なる。鉦の音大鼓の響、深き林を通して次第々々にうすれ行くを聞きつゝ下る。足痛くして膝屈す。

吾校出身諸君の盡力にて、上野旅館といふに投宿す。和氣篤々として夕飯を喫し、喋々日中の所感を語る。やがて山口縣人會諸氏及吾校出身諸君の、特に吾等が爲めに催されたる歡迎會あり。餘興に云ふべからざる愉快を覚え、旅寢の枕安くして夢亦穩なり。

四時起床、黎明加藤社に参拜、風寒き熊本の市街を見渡し、六時五十三分、熊本驛出發、河崎君其の他の見送を添うし、感謝に堪へず。

大牟田にて下車し、三井氏所有の炭坑を觀る。高さ八十五尺二百馬力の捲揚機デビースポンプ其の他發電所等語る可き者多けれど、前年旅行隊の紀行に詳悉したれば、今は贅せず。唯特筆感謝すべきは藤村茂、林晋作、林俊香以下の諸氏が貴重時間を割き、吾等の爲めに案内説明の勞を取られたるのみならず、出發に際し、物品を惠與せられたること是なり。

羽犬塚をすぎ、造賀川を渡り、二日市に着く、驅足にて太宰府天滿宮を参拜す。庶民の湯御年所を経て益々厚し。公の徳亦大なりと謂ふべし。馬車鐵道にて再び二日市に歸り、七時福岡に着く。

丸本江面兩先生の出迎を受け、美菜及福岡市案内圖を配與せられ、夕飯を喫し、直ちに市街を見物す。電車のゆきかひきもきらず。街衢整然としてまことに九州第一の都會たるに愧ぢず。折から開催の菊人形見んとて電車にのる。暗中高く響ゆるは縣會議事堂にして、目を驚かす大廈は縣廳なりと聞き、屹然空を衝くは大學なりと知る。

二十三日、午前に東公園を觀る、かきたき事は山々あれど、先年と變りなければ記さず、寫眞隊諸君の撮影あり、長く今日の記念を止めむ。午後一時出發、四時三十分下關に着し、長陽館に入る。赤間宮龜山神社に参拜し、境の浦に平家一門の墓を弔す。市場に臺灣其他より

に對し、一場の軍事講話をせられたり。(講話の要旨は講壇欄に載す)

松陰先生追慕會

十一月二十一日、午前十一時より、例に依りて、松陰先生追慕式を執行し、校長の講演あり、十二時半、式を終へ、一時午より、松陰神社に参拜せり。(講演要旨は講壇欄に載す)

吉田氏來校

十一月三十日、午前九時、鹿兒島第七高等學校造士館長吉田賢龍氏來校、各教室授業の状況を參觀し、午後一時より、講堂に於いて有益なる講演ありたり。(要旨は講壇欄に載す)

送迎彙報

四月二十日、午前八時、サマランド教師の告別式を兼ねてアダムス教師の紹介式行はれたり。サマランド教師はモンクリーフ氏の後任として山口に赴仕せらるゝに就き、アダムス教師其後を承けて本校に來任せられたるなり。翌二十一日、午前八時、サマランド教師の出發を自働車會社前に送る。

栗屋教諭朝鮮平壤の普通學校に轉任せらるゝこととなり、四月二十二日零時二十分告別式あり、同二十五日午前八時、行を金谷に送る。

五月一日、放課後、英語科擔當教諭庄野貞一先生の紹介式行はる。

五月八日、午前八時、國語漢文科擔當教諭岡本祐純先生の紹介式行はる。

九月二十一日、午前七時三十分より、D. C. Buchanan 教師の紹介式



輸送せる菓物を見る。然れども價高くしていたづらに垂涎をうながすのみ。

二十四日、四時四十分出發。白砂青松の瀬戸内海波靜かにして朝霧深く立ち籠め、半身あらはせる鳥の影、薄衣まける松原など、目にふるゝ者、一として人意を快にせざるなし。汽車は長蛇の如く走りて、八時山口に着す、直に勇を鼓して一の坂をこえ、佐々並にて晝飯を喫し、一升谷も苦もなく下り、明木に憩ふ。下級生諸君が遠きを意とせず迎へられたるは實に嬉しかりき、除を整へ金谷に着けば、校長を始め諸先生の出迎を添うし、且校長の訓辭ありて解散し、宅に着けば、六時の鐘寂しく聞えぬ。此の稿を終ふるに及び、今回引率示導の勞をとられし各先生に對して感謝の意を表す。

野村男の講演

十月二十五日、午後二時より、講堂に於いて、野村男の書道講演ありたり。男は老軀をも厭はず、諄々として二時許講話せられ、我等をして大に益する所あらしめられたり。(講演筆記は講壇欄に載す)

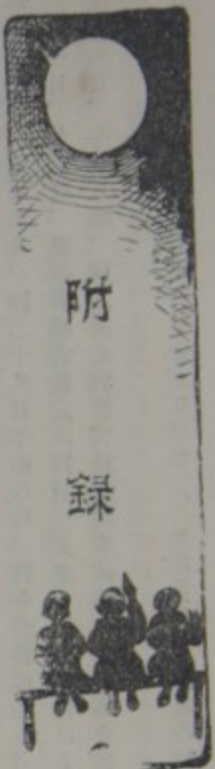
柴田氏の來校

同二十六日、午前十時、貴族院議員にして吾郷の先輩たる柴田家門氏來校、各教室の授業を巡覽せられ、寄宿舎にて午餐を喫し、零時三十分より一同を講堂に會し訓話せられたり。(要旨は講壇欄に載す)

石田海軍少將の來校

十一月十四日、海軍少將石田一郎氏來校、午前十一時より、生徒一同

行はる。先生は、一千九百十四年、ワシントン、アンド、リー大學を卒業し、マスターオブアーツの學位を受けられたり。



山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫觴す。○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す。○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所管に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり。○二十年四月一日改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる。○同年八月重見氏轉任し線貫謙輔氏代る。○同年十二月萩學校と改稱せらる。○二十一年一月職制の改正あり線貫氏校長に任せらる。○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に歸せり。○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す。○四月一日線貫氏萩分校主事を命ぜ

らる。○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる。○三十一年三月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となる。○同年四月渡邊盛作氏主事に任せらる。○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職制並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九拾三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盛作氏校長心得を命ぜらる。是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る。○同月十八日雨谷兼太郎氏校長に任せらる。○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む。○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名。是月始めて補習科を設く。○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す。○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名。○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名。○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名。○同年十月十二日雨谷校長病歿せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる。○同年十二月七日塚本氏校長に任せらる。○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名。是月縣令を以て共通入學試験の制を

定めらる。○同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命ぜらる。○九月長崎縣立島原中學校長羽石重雄氏校長に任せらる。○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名。○四十年三月二十三日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名。○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名。○十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ。○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年より縣令を以て共通試験を廢せらる。○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる。○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる。七月七日戊申詔書奉讀心得を頒つ。○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名。○四十二年一月一日寄宿舎の名を定めて誠之學舎といふ。○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名。○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名。○七月一日久原氏獎學金給與規程成る。○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試験施行規程を定めらる。○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生五十九名。○十一月四日久原氏獎學金給與規程

第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることとなれり。○三年三月十九日第十四回卒業式を舉行す卒業生五十九名。



職員表(大正三年十二月末現在)

Table of staff members including columns for subject (受持學科), position (身職), name (氏名), and birth date (就職年月).

卒業生一覽

第一回(明治三十四年三月)

Table of graduates from the first session, listing names, institutions, and dates.

第二回(明治三十五年三月)

Table of graduates from the second session, listing names, institutions, and dates.

Table of students by grade level and sex, including columns for subject (國語, 漢文, etc.), grade, and name.

Table showing grade levels (學級數) and student counts (生徒數) for various subjects.

學級數及生徒數表(大正三年十二月末現在)

海軍大尉 和田專三
 在郷 阿座上長一
 死亡 木村彌三
 東京帝大農科卒業陸軍二等獸醫 渡邊五六
 荻中學校教諭豫備陸軍歩兵少尉 山本百合熊
 日立鐵山 江川暢
 陸軍歩兵中尉 青木英一
 早稻田大學卒業小坂鐵山 波根良一
 陸軍一等軍醫(山口四十二聯隊) 茶川一
 門司稅關官吏 増野榮三
 臺灣協會學校卒業臺灣製糖會社 杵築市助
 國學院大學卒業下關高女教諭 原川國介
 死亡 山本慈雲
 以上四十二名

第三回(明治三十六年三月)
 奈良女子高等 藤井 玉木正行
 師範學校教授 モト藤井 兼常清佐
 京都帝國大學卒業 中村文次郎
 死亡 佐古良一
 海軍大尉 大田明治
 東京帝國大學院 木村磯治
 陸軍輜重兵中尉 (輜重五大廣島) モト中島 吉田光胤
 東京美術學校師範科卒業 羽根義三

死亡 寺田村市
 東京慈惠醫學校卒業 在下關、商業
 死亡 曾根昌一
 早稻田大學商科卒業 大阪帝國通運會社 在郷
 在郷 宇野英一
 在郷 林壽香
 在郷 片山市太郎
 在郷 赤川省吾
 未詳 飯尾強介
 慶應義塾大學卒業 鳥尾平七
 東京高工染織科卒業 農科大學實科卒業 大多和作太
 大阪商船會社三ヶ濱支店員 島田八重丸
 大阪高等醫學校卒業 三浦國藏
 選信省在勤 波邊儀賢
 朝鮮釜山稅關在勤 弘毅太郎
 陸軍歩兵中尉(步四二) 紀藤庄介
 內務省福井縣土木出張所事務員 山田正一
 在郷醬油製造兼米商モト永富 友永儀三郎
 以上五十一名

第四回(明治三十七年三月)
 東北農科大學卒業 モト厚東 津田武雄
 陸軍砲兵中尉(野砲七) 香積見彌
 海軍大尉海軍大學校 佐田健一

神戶高商卒業臺灣銀行倫敦支店 佐々木義彦
 工科大學卒業三菱會社員 兒玉馨三郎
 京都帝國大學理工科大學卒業 林俊香
 三池炭坑在勤 白根正輔
 朝鮮總督府在勤 中村良弼
 未詳 寺西啓太郎
 陸軍歩兵中尉(二一) 山下盛太郎
 神戶鐵寸會社 宮原藤吾
 休職陸軍三等主計 木津谷泰夫
 三池炭坑事務員 松尾英一
 陸軍歩兵中尉(步四二) 乃美忠次
 陸軍歩兵中尉(步四二) 杉山俊亮
 海軍中尉 安間定次
 慶應義塾商工學校卒業 福田信彦
 東京帝大文科卒業 久保田庄作
 京都帝大文科卒業 玉縣立 船壁中學校教諭
 死亡 東京高等工業學校機械科卒業
 收稅屬 兒玉武男
 死亡 吉見市郎
 陸軍經理學校卒業 藤井晴一
 死亡 新庄順一
 豫備陸軍砲兵少尉 伊藤傳次
 未詳 室田貞一

朝鮮群山市郡吏 死亡 山本公平
 東京高等商業學校 卒業 橋本秀
 海軍中尉 能美留壽
 鹽務局在勤 高橋熊太郎
 東京帝國大學法科大學卒業 浮里俊道
 在滿洲 今井武方
 早稻田大學 青原忠一
 遼陽石光洋行員 古武傳一
 東京商船學校卒業 大阪商船會社役員 横田三介
 在朝鮮 井山正作
 陸軍少尉 原田信藏
 東京外國語學校獨語專修科卒業 山田俊江
 在京 中村敏介
 在郷酒造業 桂木庄市
 陸軍中尉(步四二) 村橋孫市
 陸軍中尉(步四二) 和田正敏
 山口高商卒業 木村精男
 三見高等小學校教員モト小池 有吉武彦
 京釜鐵道在勤 正木孝介
 慶應義塾大學卒業 根來行藏
 東京外國語學校獨語科卒業在郷 井國武尙
 未詳 西村昌一

早稻田商業學校卒業 在朝鮮 笹原孝一
 東京高等商業學校卒業 住友倉庫會社員 大谷清記
 東京帝國大學法科大學 東京帝國大學法科大學 大賀幾太
 東洋大學卒業大田嗣田寺住職 榮正範
 東京高等工業學校卒業 海軍中尉 寺田幸吉
 陸軍中尉(步四二) 陸軍中尉(臺灣) 前原四郎
 陸軍中尉 南方秋亮
 山口高商卒業 東北農科大學卒業大連製鹽公司 中村芳樹
 陸軍中尉 大田三郎
 萩魚市場 陸軍中尉 中村仁介
 熊本高工探鑛冶金科卒業在朝鮮 橫地素之通
 慶大商業卒業 赤川義助
 死亡 林井治
 死亡 須崎勝五郎
 岡山醫學卒業陸軍二等軍醫 下瀬政三
 在朝鮮元山 厚東洋
 八幡製鐵所在勤 野村英一

第六回(明治三十九年三月)

早大卒業小學校教員 太田健太郎
 岡山醫學卒業 增野純亮
 早大卒業 笹村武一
 在郷商業 百井盛一
 慶大卒業 河野利長
 在郷商業 高橋信一
 神戸市役所在勤 國弘壽
 早大卒業日本人造肥料會社 吉富嘉春
 死亡 坪井海乘
 長崎醫學卒業 岡田信太郎
 大阪高工卒業 落合兼文
 滿洲鐵道會社在勤 神崎一郎
 京都佛大卒業 河名謙雄
 明治大學卒業 田中義雄
 京都佛大卒業 藤津亮然
 豫備步兵少尉 中村正治
 陸軍測量部技手 堀兼治
 防長自備車會社員 口羽素介
 在郷 日比豐
 未詳 水津貞輔
 臺灣銀行支店員 東谷光亮
 國重照
 山田八郎
 以上四十三名

山口高商卒業在臺灣 山口高商卒業在臺灣
 京大工科卒業東京大講師 第五高等學校
 海軍少尉 陸軍少尉
 陸軍步兵少尉 陸軍步兵少尉
 陸軍少尉 陸軍少尉(步三五)
 小學校教員 陸軍步兵少尉
 東京商船學校卒業 陸軍砲兵少尉
 陸軍砲兵少尉 第四高等學校

三浦正夫 死亡
 藤井寬 山口高商卒業
 松井式部 在朝鮮
 原田芳介 早大理工科卒業
 益田謙 在下關
 岡田亮一 岡山醫學卒業
 岡田裕一 在米國
 小野格一 死亡
 神田孝 在郷、商業
 吉村正 京都帝國大學法科
 名古屋高工卒業
 小林京介 在東京銀行員
 中村樹介 未詳
 林義助 在下關會社員
 吉岡恒郷 神戸稅關鑑定官補
 長岡忠雄 神戸鐵道院經理係在勤
 山下寬一 在東京
 國重孝 陸軍步兵少尉
 河北一三 早大理工科卒業
 金子雨一 關東都府府大連土木出張所員
 守永五郎 山口高商卒業
 大谷二郎 大阪鐵道會社員
 阿川義人 在東京
 阿川市熊 死亡

品川庸平 長谷千代一
 秋本善五郎 石村勘次郎
 三戶良一 長井寬治
 伊藤利博 三浦惟一
 田村壯介 溝部九一
 波多野壽福 白井嘉幸
 吉浦精信 柏村堅吉
 村崎敏行 白井嘉三
 德富周平 岡藤基三
 杉山清一 松野研一
 江原一良 岡野哲郎
 柳田昇二郎 平島哲政
 長谷川秀一 堀澤正政
 來島元助 松野哲政
 橫見亮爾 平島哲政
 村上欣一 松野哲政
 水井精 松野哲政
 黒瀬白 松野哲政
 福間四郎 松野哲政
 田中一 松野哲政
 中村誠一 松野哲政
 河野次郎 松野哲政
 奥野眞一 松野哲政

新聞社員 山科元二
 在郷果樹栽培 奥田又助
 千葉醫學卒業福岡大學病院 木村六郎
 早大商科卒業 齋藤民治
 阿武郡書記 モト松尾
 山口縣師範學校卒業 長澄市術
 梅西小學校調導 西山七郎
 白水小學校教員 野野政一
 在郷 野野政一
 鹿兒島電氣鐵道會社員 謝井毅一
 未詳 三好謙一
 未詳 井山謙輔
 死亡 小田太吉
 大阪高工卒業日立鐵山 栗柄康生
 死亡 波根又介
 未詳 伊藤八郎
 以上六十一名

第七回(明治四十年三月)

死亡 田原四郎
 奈良小學校教員 厚東潤英
 陸軍三等主計 堀田俊太郎
 山口高商卒業日韓銀行員 水門義繼
 東京高商卒業 善市正三
 東亞同文書院助教授 佐藤良文
 陸軍三等主計 村田歳一

山口高商卒業在臺灣 山口高商卒業在臺灣
 京大工科卒業東京大講師 第五高等學校
 海軍少尉 陸軍少尉
 陸軍步兵少尉 陸軍步兵少尉
 陸軍少尉 陸軍少尉(步三五)
 小學校教員 陸軍步兵少尉
 東京商船學校卒業 陸軍砲兵少尉
 陸軍砲兵少尉 第四高等學校

三浦正夫 死亡
 藤井寬 山口高商卒業
 松井式部 在朝鮮
 原田芳介 早大理工科卒業
 益田謙 在下關
 岡田亮一 岡山醫學卒業
 岡田裕一 在米國
 小野格一 死亡
 神田孝 在郷、商業
 吉村正 京都帝國大學法科
 名古屋高工卒業
 小林京介 在東京銀行員
 中村樹介 未詳
 林義助 在下關會社員
 吉岡恒郷 神戸稅關鑑定官補
 長岡忠雄 神戸鐵道院經理係在勤
 山下寬一 在東京
 國重孝 陸軍步兵少尉
 河北一三 早大理工科卒業
 金子雨一 關東都府府大連土木出張所員
 守永五郎 山口高商卒業
 大谷二郎 大阪鐵道會社員
 阿川義人 在東京
 阿川市熊 死亡

神戶稅關吏員

以上五十六名

第八回(明治四十一年三月)

死亡
山口高商卒業
海軍機關中尉
東京高師卒業相馬中學教諭
東京高工卒業
陸軍步兵少尉
陸軍步兵少尉
海軍中尉
海軍機關少尉
東京高工卒業
山口師範學校二部卒業
東京高工卒業
東京高商卒業
大阪高工卒業
陸軍步兵少尉
長崎造船所
在郷
千葉醫專
在朝鮮
陸軍砲兵少尉

兒玉忠彦
以上五十六名
椋木貞一郎
大草又七
三戸由彦
富田義介
彌政竹雄
山根四朗
平川新太郎
石光憲次
濱尾七平
木原直孝
津守完
波多間靈
村田泰
栗屋三
小倉誠一
杉本基良
原純一
中村信介
齋藤新一
田坂榮助

在朝鮮
陸軍步兵少尉
在京部
山口高商卒業小野田セメ
ント會社大連支社
山口高商卒業
三池炭坑
在郷
早稻田大學
在郷
東京齒科專門學校卒業
川崎造船所
山口師範二部卒業
長崎高商卒業
未詳
死亡
未詳
未詳
未詳
大阪高工卒業
山口師範二部卒業
日置小學校訓導
在朝鮮
未詳
早稻田大學師範科

岩崎利一
藤田秀八
吉岡良平
河内通祐
末永一郎
藤井愛吹
津守猛
上田重一
岡德一
早川鏡
竹重頼三
山本願祐
同藤又七
松浦純一
伊藤時重
田中喜一
中村道生
西村基助
小倉誠一
野村昇輔
落合實藏
齋藤徹多
白井沈

善市亥三郎
戶田剛三
田中敏藏
梅田吉郎
玉木正之
和智孝任
藤井醇一
小野太亮
枝村匡輔
阿部時治
藤元三郎
藤邊寬博
渡邊寬治
土井武一
村上繁
上利賢介
安達茂作
山田耕作
金子眞一
福田敬二
石津美矯
益田直養
山一源吾
落合健

早川富正
堀正一
中村誠
兒玉一男
長井要藏
神田直光
西村武光
齋藤武夫
堀永修一
堀野雅一
安藤芳彦
石川光一
渡邊池知
渡邊池知
大谷祇詮
村田三介
松野十一
齊藤定一
黑瀬積一
永松力
松野信次
古谷退一
瀧一實

第九回(明治四十二年三月)

東京帝國大學工科
同法科
東京高工卒業
同上
京都帝國大學理科
陸軍步兵少尉
山口師範二部卒業小學校教師
未詳
在臺灣
陸軍步兵少尉
東京高商卒業
在郷
大阪高等工業學校
大阪高等工業學校
未詳
大阪高等工業學校
未詳
死亡
京都醫學專門學校
陸軍步兵少尉
山口高商卒業
京都帝國大學法科
在臺灣

第十回(明治四十三年三月)

在郷實業
山口縣師範學校二部卒業
三陽明倫小學校訓導
山口高等商業學校
未詳
未詳
未詳
陸軍步兵少尉
吉部小學校訓導
在郷
未詳
千葉園藝學校
陸軍步兵少尉
東北大學林科實科
仙崎小學校訓導
在郷

岡良之
三村惣一
宇野四郎
香積元清
伊藤義雄
中西作介
吉澤正太郎
武安明
山本傳一
金子勤助
大田良吉
桑原雅亮
白井曉彦
松浦好輔
窪井隆三

神戶高等商業學校卒業
山口高商卒業
陸軍步兵少尉
電信學卒業朝鮮釜山郵便局在勤
陸軍步兵少尉
陸軍步兵少尉
陸軍步兵少尉
死亡
水産講習所
東京高等商業學校
山口高商卒業
海軍少尉
千葉醫專
山口高商卒業
慶應大學理財科
在郷水産業
白水小學校教員
山口高商卒業
熊本高工卒業
陸軍步兵少尉
第八高等學校
關西大學商科
慶應義塾大學
在郷
東京農大實科卒業

山口高商卒業
京都醫學專門學校
在東京
在臺灣兵役
山口師範二部卒業
三陽小學校教員
山口高商卒業
岡山醫學專門學校
門司鐵道院
在郷
山口高商卒業
未詳
小川小學校訓導
山口高等商業學校
熊本高工卒業
慶應義塾大學
在郷
在郷
在郷
在郷

福島俊一
村井重元
阿部重利
野北重利
朝枝櫻英
横田秀一
齊藤忠明
柴田信智
三浦嘉七
榎本勝虎
高信一
前田孝男
田邊健
須子伴二
佐々木四郎
三好敬一
松浦茂

以上四十九名
第十一回(明治四十四年三月)
藤村良作
廣兼來藏
大谷雄介
松井隆美

山口縣師範學校第二部卒業
山口高等商業學校
第三高等學校一部乙類
山口高等商業學校
格東小學校調導
第七高等學校
第三高等學校
在郷
陸軍士官學校
東京高等商業學校
大田小學校調導
陸軍主計候補生
第七高等學校
在東京
山口高等商業學校
百十銀行表出張所員
陸軍士官學校
東流協會專門學校
近衛師團入營
在郷
在東京
淺田小學校教員
大阪高等工業學校
第七高等學校

波佐間 久
村田 清一
矢田 篤
塚本 清一
西山 彦三
兼谷 善二
寺戶 篤
榎木 史朗
齋藤 二郎
末成 茂
栗栖 靜
古橋 清一
上野 義清
兼田 唯助
山崎 秀輔
飯尾 三郎
大田 茂輔
伊藤 道顯
厚東 剛四郎
桑原 義輔
三浦 敬造
小枝 義雄
河口 百合長
山本 直正

山口高等商業學校
熊本高等工業學校
大阪高等醫學學校
白水小學校調導
在東京
小野小學校教員
山口高等商業學校
在郷
在京都
第五高等學校
在郷
山口師範學校二部
山口師範學校二部
在郷
山口師範學校二部
在北海道
山口師範學校二部卒業
東京齒科醫學學校
在吳
新潟醫學專門學校
第十二回(明治四十五年三月)
以上四十七名
第三高等學校
東北大學農科
第三高等學校第二部甲類

富田 強吉
津田 武文
齋藤 通
柴田 龍三
豐中 善實
守永 自由平
松崎 周介
林 孝一
原田 正三
江原 茂
藤原 政一
上田 嘉一
信國 久堅
大野 鶴夫
櫻井 秀康
高橋 藤太郎
伊藤 香
長宗 純
辻野 喜一

東亞同文書院政治科
東京鐵道院
陸軍士官候補生
同
同
東京高等商業學校
主計候補生
東京高等商業學校
岡山醫學專門學校
東京高等工業學校機械科
在朝鮮
陸軍士官候補生
同
佐々並小學校教員
在旅順滿鐵會社員
京城小學校教員
陸軍士官候補生
山口高等商業學校
東京美術學校豫備科日本畫科
山口高等商業學校
在東京
山口高等商業學校
未詳

香取 敬藏
高橋 保勝
大津 正一
有倉 誠
黒瀬 知一
厚東 四郎次
日野 二郎
波根 彌六
室田 五郎
渡邊 四郎
田村 眞一郎
佐々木 四方介
廣瀬 五郎
陶村 政一
伊藤 義彦
鳥羽 義陳
石田 四月
同 正
內藤 千里
平島 公平
秋本 一郎
河內 山陸輔
伊佐 小次郎
松永 隆亮
松原 慶市

陸軍士官候補生
同
京都佛敎大學
同
尖詳
陸軍主計候補生
在東京
陸軍士官候補生
在東京
山口高等商業學校
陸軍士官候補生
長崎醫學專門學校
在郷
在東京
大阪高等工業學校應用化學科
山口高等商業學校
大阪高等工業學校探礦冶金科
東京協會學校
在郷
山口師範學校第二部
在郷
在朝鮮
長崎醫學專門學校
山口高等商業學校

下村 福治
佐伯 四郎
南部 法電
守重 哲成
渡邊 梅吉
柿並 修三
秋丸 哲夫
生駒 林一
吉田 耕造
村上 正文
伊藤 清忠
杉山 守輔
藤本 貢
片山 豐助
岩崎 吾一
木村 榮太郎
岡田 行雄
福永 隆太郎
坪井 三介
奥田 準一
上野 實造
松永 知義
豐田 延雄

萩海軍員
山口高等商業學校
第十三回(大正二年三月)
以上五十二名
以下○符ヲ附スルハ久原氏獎學金ヲ受クルモノ
○河崎 松之助
○白石 英男
上岡 謙雄
鈴木 清
柳屋 良輔
德永 英介
竹内 久治
森重 精雄
柏村 稔三
馬場 秀藏
遠藤 俊雄
松野 雅治
赤川 勝
大田 元輔
竹重 英治
村田 芳彦

大阪高商
第三高等學校
明倫小學校教員
陸軍士官學校
在東京
未詳
同
在東京
山口高等商業學校
在郷
在朝鮮
在九州
山口高等商業學校
熊本高等工業學校
在東京
京都佛敎大學
未詳
在東京
在東京
在臺灣瑞芳金山
在東京
在郷
未詳

香取 敬藏
浮里 宜也
上利 祥介
藤永 智
金子 生一
藤田 俊彦
村上 愛二郎
守永 喜平
村田 義嗣
磯村 惣吉
岡田 節藏
馬場 健一
原田 勝二
河野 莊介
三上 孝之
岩本 南洋
伊藤 諒
上田 久芳
小野 富真
多田 俊雄
高田 正臣
橫田 弘
長岡 正人

未詳	阿武茂雄	山口高等商業學校
慶應義塾	河野一雄	明治專門學校
陸軍士官學校	池田猛	在郷
在朝鮮	坪井彌太郎	第一高等學校
在朝鮮	野村四朗	在大阪
在東京	堀信一	山口高等商業學校
慶應義塾	篠田直武	小學校教員
在東京	片山平作	旅順工科學堂
慶應義塾	植田瑞穂	同
兵役	笹村繁	税關吏
在大阪	原田景三	岡山醫學專門學校
山口師範學校第二部	内山芳忠	在郷
在東京	野田保男	小學校教員
在釜山郵便局	村木義一	熊本高等工業學校
防長自働車會社員	井町照久	川上小學校教員
在東京	熊谷巖	兵役
		慶應大學
		滿洲鐵道會社員
		税關吏
		在東京
		在郷
		同
		山口師範學校
		郡役所吏員
		在郷

小澤亮一	同	在東京
兼重政輔	在郷	在東京
杉山顯正	在郷	奈古小學校教員
重枝猛夫	在郷	青山學院
後藤琢一	鐵道會社員	鐵道會社員
堀幸一	士官候補	士官候補
堀勘市	國華新聞社員	國華新聞社員
野上猛三郎	滿洲鐵道會社員	滿洲鐵道會社員
田中健藏	防長自働車會社員	防長自働車會社員
植村美人	在東京	在東京
竹重保衛	在郷	在郷
江木敏武	熊本高等工業學校	熊本高等工業學校
境三輔	慶應大學	慶應大學
三好輝夫	在東京	在東京
香川景久	專賣局員	專賣局員
藤山二郎	在東京	在東京
林眞一	兵役	兵役
石川長介	福岡商科學校	福岡商科學校
金子潤介	三見小學校教員	三見小學校教員
上田九一	税關吏	税關吏
石津清	兵役	兵役
池内清	同	同
秋山節一	在東京	在東京
永松元治	同	同
松原義方	同	同
友森文彦	同	同

能美安猛	安田香	安田香
横田國	植田新	植田新
植田新	三原一	三原一
三原一	樺原一	樺原一
樺原一	戸倉一	戸倉一
戸倉一	山下一	山下一
山下真	飯田治	飯田治
飯田治	山時一	山時一
山時一	杉原茂	杉原茂
杉原茂	平山二	平山二
平山二	伊藤三	伊藤三
伊藤三	山田三	山田三
山田三	内田信	内田信
内田信	熊谷介	熊谷介
熊谷介	村木弘	村木弘
村木弘	安部寬	安部寬
安部寬	矢野造	矢野造
矢野造	波多野五郎	波多野五郎
波多野五郎	土肥健三	土肥健三
土肥健三	八谷英三	八谷英三
八谷英三	野原英三	野原英三
野原英三	宮國武	宮國武
宮國武	渡邊武	渡邊武
渡邊武	三宅十	三宅十
三宅十	藤田保	藤田保

會 告

一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は十一月末日までとす。用紙隨意。

一、會友にして、本誌の寄送を望まらざる諸君は、郵税共實費金貳拾貳錢（郵券代用妨なし）を豫め送附し置かれたし。本誌の發行は毎年三月とす。

一、卒業生一覽に載する所の會友諸君の現況中には實を失へる者鮮からざるを信ず。御氣附諸君の御一報を請ふ。

大正四年四月八日印刷
大正四年四月十二日發行

（非賣品）

發行兼編輯者 山口縣阿武郡格村 三輪 勗

印刷者 勝亦省三

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

